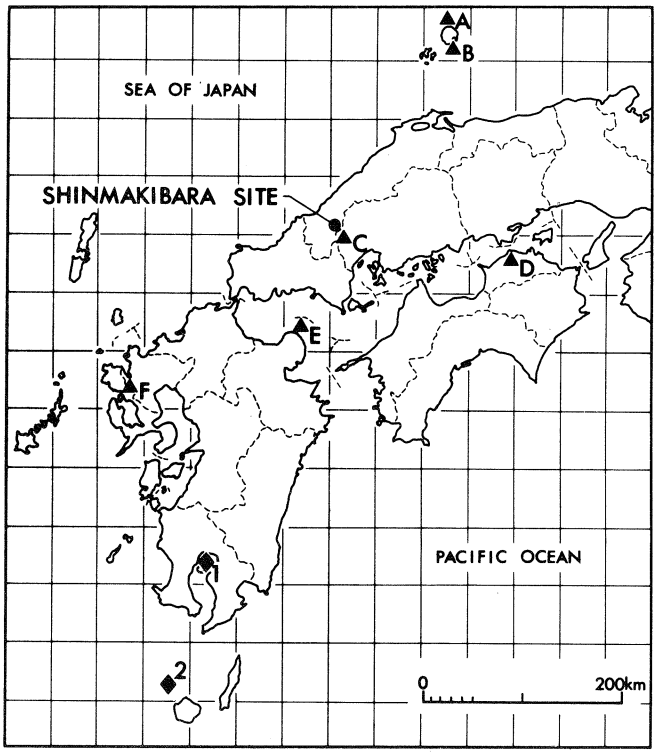
新槇原遺跡発掘調査報告書

昭和62年2月

島根県匹見町教育委員会

新槇原遺跡発掘調査報告書



新槇原遺跡の位置　A. 隠岐久見　B. 隠岐加茂　C. 冠山　D. 金山・五色台　E. 姫島　F. 腰岳　1. アイラ火山灰(AT)噴出源の姶良カルデラ　2. アカホヤ火山灰(Ah)噴出源の鬼界カルデラ

昭和62年2月

島根県匹見町教育委員会

序

本書は，昭和60年12月に発掘調査した新槇原遺跡の調査報告書である。

匹見町に人類が住み始めたのは何時頃からか，どこから移住したか，この疑問に対して匹見町史によると，紀元後古墳時代からとしか考えられないとしている。

最近に至り町内考古学に関心ある有志の方々によって，町内各地の建設工事現場や農耕地等から古代遺物の発見が相次ぎ，弥生時代から縄文中期にかけて古代人の生活の足跡を知る事が出来た。

今回，新槇原遺跡の発見は匹見町古代史解明に向けて町民の関心がいやが上にも高まり，文化財保護に大きな「はずみ」をつけたと言える。しかも先土器（旧石器）時代12,000～30,000年前として県内でも極めて稀な発見例として，貴重な遺跡資料となればな尚更である。

このことは町民の古代への関心の高まりと同時に，歴史ある町民性への認識を深め，町の起源が古代へ大きく遡ったという起源解明による「町づくり」に対する町民意識高揚につながり，期待をもって文化財保護を進めている。

今回の遺跡埋蔵地約３アールは，地元自治会で責任保存する為，町外所有者より買収され積極的な保護が進められ，同慶の至りである。　この報告書が考古学上の資料として今後の関係者の活躍の一助となれば幸いである。

今回の発掘調査にあたり，第一発見者である渡辺友千代氏を始め島根県教育委員会，山口大学，島根大学，並びに調査に積極的に御協力頂いた各位に対し，深甚なる感謝の意を表するものである。

昭和６１年１０月

匹見町教育委員会

教育長　吉　原　　了

例　　言

1．本書は，島根県美濃郡匹見町大字道川字ヲシヤ田イ133-1ほかに所在する新槇原（しんまきばら）遺跡の発掘調査報告書である。大字道川字ヲシヤ田の周辺は地元で「新槇原」と称されていることからこの遺跡は『新槇原遺跡』と命名された。

2．本調査は，昭和60年12月16日から12月25日まで匹見町教育委員会が実施した。

3．本遺跡のうち約３アールについては，昭和61年９月８日に匹見町文化財として指定され，道川自治会により買収された。

4．本遺跡出土遺物は，匹見町教育委員会で保管している。

5．本書の執筆は，渡辺友千代・定池博之・中村友博・三浦　清・松本岩雄が行ない（執筆分担は目次および文末に記す），編集は中村友博の協力のもとに松本岩雄が行なった。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（松本岩雄）…… 1

1．調査に至る経緯 …… 1

2．調査組織 …… 2

3．発掘調査日誌抄 …… 3

第２章　地勢と環境 ……（渡辺友千代）…… 5

1．地域概観 …… 5

2．立地と位置 …… 8

3．地域的様相 …… 10

第３章　層位と遺構 ……（松本岩雄）…… 12

1．調査の方法と経過 …… 12

2．Ｇ１区の概況 …… 14

3．Ｇ２区の概況 …… 18

4．Ｇ３区の概況 …… 22

5．Ｇ４区の概況 …… 23

第４章　出土遺物 …… 25

はじめに ……（定池博之）…… 25

1．層位と遺物の関係 ……（定池博之）…… 25

2．縄文土器 ……（定池博之）…… 27

3．石器遺物 ……（中村友博）…… 40

第５章　自然科学的調査 ……（三浦　清）…… 56

1．テフラからみた新槇原遺跡の層準 …… 56

2．黒曜石製の石器とその起源について …… 62

第６章　まとめ ……（松本岩雄）…… 65

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第２図　新槇原遺跡の位置 …… 9
第３図　上家屋遺跡出土土器実測図 …… 11
第４図　遺跡周辺地形図 …… 13
第５図　調査区配置図 …… 14
第６図　Ｇ１区上層平面図 …… 15
第７図　Ｇ１区北壁土層断面図 …… 16
第８図　Ｇ１区東壁土層断面図 …… 16
第９図　Ｇ１区南壁土層断面図 …… 17
第10図　Ｇ１区西壁土層断面図 …… 17
第11図　Ｇ２区上層平面図 …… 19
第12図　Ｇ２区SK01実測図 …… 19
第13図　Ｇ２区北壁土層断面図 …… 20
第14図　Ｇ２区東壁土層断面図 …… 20
第15図　Ｇ２区南壁土層断面図 …… 21
第16図　Ｇ２区西壁土層断面図 …… 21
第17図　Ｇ３区土層断面図 …… 23
第18図　Ｇ４区土層断面図 …… 24
第19図　新槇原遺跡層位柱状図 …… 24
第20図　Ｇ１区上層の遺物分布 …… 26
第21図　Ｇ１区の遺物の垂直分布 …… 26
第22図　Ｇ１区下層の遺物分布 …… 26
第23図　Ｇ２区の遺物分布 …… 27
第24図　Ｇ１区第２層出土の縄文土器 …… 28
第25図　Ｇ１区第３層出土の縄文土器 …… 29
第26図　Ｇ１区下層出土の縄文土器 …… 31
第27図　Ｇ２区とＧ４区出土の縄文土器 …… 33
第28図　表面採集にかかる縄文土器 …… 34
第29図　Ｇ１区出土の石器遺物 …… 47

第30図　Ｇ２区出土の石器遺物 …… 49
第31図　Ｇ３区とＧ４区出土の石器遺物 …… 50
第32図　石材交易の離心減少モデル …… 51
第33図　表面採集にかかる石器遺物 …… 52
第34図　Ｇ１区東壁の層準 …… 56
第35図Ａ　Ｇ１区第２層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 57
第35図Ｂ　Ｇ１区第２層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 57
第36図Ａ　Ｇ１区第３層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 58
第36図Ｂ　Ｇ１区第３層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 58
第37図Ａ　Ｇ１区第４層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 59
第37図Ｂ　Ｇ１区第４層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 59
第38図Ａ　Ｇ１区第５層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 60
第38図Ｂ　Ｇ１区第５層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 60
第39図Ａ　Ｇ１区第６層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 61
第39図Ｂ　Ｇ１区第６層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 61
第40図Ａ　Ｇ１区第７層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 62
第40図Ｂ　Ｇ１区第７層に含まれる火山ガラスの成分変化 …… 62
第41図　新槇原遺跡から出土した黒曜石片の石基部分の化学組成 …… 63
第42図　姫島産黒曜石の石基部分の化学組成 …… 63
第43図　隠岐産黒躍石の石基部分の化学組成 …… 64

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 7
第２表　縄文土器の分類 …… 30
第３表　縄文土器の観察表 …… 35・36
第４表　石器遺物の観察表 …… 42・43
第５表　打製石鏃の観察表 …… 44
第６表　楔形石器の観察表 …… 44

図　版　目　次

図版一　遺跡及び周辺地形の鳥瞰
1　空からみた新槇原遺跡
図版二　遺跡外景
1　遺跡の遠景
2　遺跡の近景
3　遺跡の近景
図版三　Ｇ１区上層の状態
1　Ｇ１区２層の調査状況
2　Ｇ１区３層除去後の状態
図版四　Ｇ１区遺物出土状態
1　Ｇ１区３層遺物出土状態
2　Ｇ１区５層遺物出土状態
3　Ｇ１区５層遺物出土状態
4　Ｇ１区７層遺物出土状態
5　Ｇ１区５層調査の状況
6　Ｇ１区７層遺物出土状態
図版五　Ｇ１区土層
1　Ｇ１区北壁の土層
2　Ｇ１区東壁の土層
図版六　Ｇ１区土層
1　Ｇ１区南壁の土層
2　Ｇ１区西壁の土層
図版七　Ｇ１区土層
1　Ｇ１区北壁の土層
2　Ｇ１区南東隅の土層
図版八　Ｇ１・Ｇ２区調査状況
1　Ｇ１区東北隅の土層
2　Ｇ２区２層の調査状況
図版九　Ｇ２区調査状況
1　Ｇ２区SK01の調査状況
2　Ｇ２区各壁の土層
図版一〇　Ｇ３・Ｇ４区調査状況
1　Ｇ３区
2　Ｇ４区
図版一一　出土遺物・土器
1　Ｇ１区の縄文早期土器
2　縄文前期土器
3　縄文前期土器
図版一二　出土遺物・土器
1　条痕とナデ調整の土器
2　条痕とナデ調整の土器
図版一三　出土遺物・石器遺物
1　Ｇ１区の石器遺物
2　Ｇ１区の石器遺物
3　翼状の剥片
図版一四　出土遺物・石器遺物
1　Ｇ２区の石器遺物
2　Ｇ２区の石器遺物
図版一五　出土遺物・石遺遺物
1　Ｇ３区とＧ４区の石器遺物
2　Ｇ３区とＧ４区の石器遺物
3　玦状耳飾
4　両縁背つき尖頭器
図版一六　出土遺物・石器遺物
1　表面採集にかかる石器遺物
2　表面採集にかかる石器遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

1．調査に至る経緯

昭和60年11月８日，渡辺友千代氏から匹見町大字道川の工事現場で先日（11月６日）石器片を採集したとの電話連絡が県文化課にあった。渡辺氏の口調はやや興奮ぎみで，工事現場をかなり綿密に歩いたところ採集されたのは人工的に打ち欠いたと思われる剥片ばかりで，土器がまったく見あたらないことから，先土器（旧石器）時代の遺跡ではないかということであった。剥片の形状等の説明を受けたが，もとより電話だけでは判断できないので，とりあえず，石器片と思われる数点を県文化課まで送ってもらうこととした。またこの間の状況を匹見町教育委員会にも連絡しておいていただくこととした。

11月14日，22点の資料が県文化課に送付されてきた。この資料は同封の手紙によれば，11月６日に発見したものと，その後11月11日に吉田花子，西田保氏等と踏査した折に採集したものをも含んでいるということで，土器２点，石鏃４点，剥片16点がみられた。早速，足立克己，丹羽野裕等と観察したところ，土器は縄文前期の轟式系のもの，石鏃はていねいなつくりで，石鏃初源期のものも含まれているようにみうけられた。さらに，特に注意されたのは剥片のなかに先土器（旧石器）時代の技法をもつ翼状の剥離が施されたと考えられるものが含まれていることであった。

11月21日，匹見町教育委員会栗田久次長より，先日渡辺氏が送付された資料はどのようなものかとの問い合せがあった。そこで，土器は縄文前期のもの，石鏃はたいへんていねいなつくりであること，さらに先土器時代の技法をもつ剥片がみられることを指摘し，先土器時代の明確なものとすれば，県内ではきわめて発見例の少ない貴重な遺跡であることを伝えた。そして，とりあえず工事を中断してもらい，遺物発見届，遺跡発見届を提出してもらうとともに業者，土地所有者との協議に入ってもらうこととした。

事業内容は，美都町の大川建設が昭和60年度河川改良事業に伴う残土処理場としてこの水田を借り受け，昭和61年３月末までに埋めるもので，その後，畑として利用できるようにして土地所有者に返却する予定であるとのことであった。

工事中に発見された遺跡でもあり，今後の対応を早急に決定すべきであると判断されたので，12月２日に県文化課から松本岩雄，丹羽野裕，片岡詩子が現地に出向き，状況を把握することとなった。現地は水田の耕作土が除去されて数箇所に小山状に盛り上げてあり，遺物は耕作土直下で採集されたとのことであった。これまでに採集された地点と現地踏査の結果を総合する

と約2,400㎡にも及ぶ広範囲にわたって遺物が散布していることが判明し，これを全面調査すれば優に１年間は要するものと予想された。事業内容が盛土をしたのちに畑として利用するということなので，今すぐに全面調査までは実施しなくてもよいと判断されたが，少なくともいくつかの試掘坑をあけて，土層の堆積状況，遺物の包含状況等を把握しておく必要性が高いものと考えられた。

そこで，町教委においては早速事業者との協議を行なうとともに，調査費，調査員の確保，調査日程等について検討することとなった。その結果，事業者とはなんとか年内まで工事を中止してもらうことで話がまとまり，調査費については県費補助等の制度がないので町において補正予算を計上することとなったが，専門の調査員の確保ができない。調査員を全面的に県に依存されても，猫の手も借りたいくらいのスケジュールを消化している状態なので，県からもそう容易に派遣することができない。県内であらゆる調整を計ったにもかかわらずよい結果が得られなかったが，最後に山口大学へ問い合せたところ，12月16日から１週間程度ならなんとか協力できるとの回答が得られた。ただし，突然のことでもあるし，十分な調査体制が組織できないので調査担当者は県文化課職員があたることを条件として附された。

紆余曲折はあったものの，以上の経緯により下記の組織によって発掘調査を実施することとなった。現地調査に着手し，報告書の刊行に至るまでの全期間を通じて，御指導・御協力賜わった多くの方々に対し，心からお礼申し上げる次第である。

2. 調査組織

調査指導　中村友博：山口大学助教授

事務局　吉原　了：教育長　・栗田　久：教育次長（昭和60年度）
藤井厚志：教育次長（昭和61年度）　・渡辺　隆：社教主事

調査担当者　松本岩雄：島根県文化課文化財保護主事

調査員　定池博之：山口大学学生

参加者　三好恵二　・河野甚一　・秀浦春子　・秀浦スミエ　・高橋重子

協力者　三浦　清：島根大学教授　・河瀬正利：広島大学助教授　・酒井利雄
河村吉行：山口大学　・渡辺友千代：町文化財専門委員　・大川建設
吉田花子：町文化財推進員　・西田　保：町文化財推進員
入沢　淳：道川自治会会長　・大石　進：道川自治会副会長　・木原　光
大谷静也：道川自治会副会長　・三浦博一：道川公民館主事　・堀江美鈴
宍道正年：法吉小学校教諭　・河野央美子　・足立克己　・柳浦俊一
丹羽野裕　・片岡詩子　・内藤多佳子　・匹見町立道川小学校　・道川自治会

3. 発掘調査日誌抄

◆12月16日(月) 雪

午前6時30分　松江出発。未明より雪が降りはじめ，積雪約5㎝

午前11時30分　積雪のため予定より大幅に遅れて益田駅着。
定池博之君（山口大学学生）と合流し，匹見町へ向かう。

午後1時　匹見町役場着。吉原教育長，栗田次長に会い調査打ち合せ。昼食。
役場周辺では約30㎝の積雪。

午後2時30分　ジープに発掘機材を積み込み，役場出発。

午後3時30分　宿舎である河野央美子氏宅着。

午後4時　道川出張所へ発掘機材を搬入。道川では70～80㎝の積雪。雪は1日中降り続きどんどん積もってゆく。明日からの調査が危ぶまれる。

◆12月17日(火) 雪

雪は昨夜から降りつづき，積雪1m近くになる。日中でも気温が0℃以上にならず，雪が降り続く。

発掘予定地の除雪作業。除雪したあとから次々と積もっていくため困難をきわめる。

道川小学校からテントを借り，機材置場兼休憩所を設営。

2×2mの調査区を2ケ所設定し，北側の調査区（G1）の上に覆屋設営。G1区の第1・2層の除去作業を行う。

参加者：松本岩雄，定池博之，三好恵二
河野甚一，秀浦春子，秀浦スミエ
高橋重子

協力者・来訪者
栗田　久，入沢　惇，秀浦　哲
三浦博一，道川小学校教諭

◆12月18日(水) くもり時々晴

G1区の調査を進める。15～20㎝の深さまで掘り下げる。15～20㎝の深さのところで10～20㎝大の石が散見される。遺構の存在する可能性あり。縄文土器約35点，石鏃2点，石器剝片・屑片20点出土。

参加者：松本岩雄，定池博之

協力者・来訪者
栗田　久，渡辺友千代，斎藤正明

◆12月19日(木) くもり時々雪

G1区では遺構の可能性が考えられたため，プランの追求を行なったが把握できず。そこでグリッド西南隅にサブトレンチを入れて断面で確認しようとしたが，落ち込みをみつけることができなかった。本日は遺物の出土が少ない。

G2区を設定し，調査開始。縄文土器片，石器剝片・屑片出土。5～7㎝の掘り下げたところで土壙状の落ち込みを2個検出。

G3区の調査開始。現表土面で石器剝片3点が出土したのみ。50㎝ばかり掘り下げたが変化なし。

午後，中村友博（山口大学助教授）氏，調査指導のため来跡。渡辺友千代，秀浦昇氏1日来援。

夜，タウンホールにて懇親会（中村，定池，松本，栗田，渡辺）

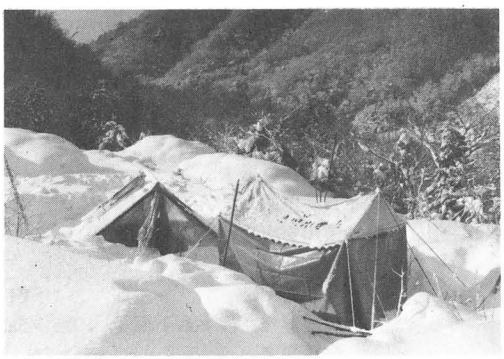
参加者：松本岩雄，定池博之

協力者・来訪者：栗田　久，読売・柳記者

◆12月20日(金) くもり一時小雪

G1区で7個のピット状の落ち込みを検出，検出状況写真撮影，平面図作成。

G2区で土壙プランを確認（SK01とする）し，写真撮影。4分法で発掘し，土層断面図作成，写真撮影。



雪に覆われた遺跡

調査風景

南側水田部の除雪作業。
午後，中村先生帰られる。
参加者：松本岩雄，定池博之
協力者・来訪者：読売・柳記者

◆12月21日(土)　晴時々くもり

Ｇ１区の現地表下40～70㎝（黄褐色土）まで掘り下げたが，遺物が全く出土しないので諦めていたところ，土層が暗褐色に変化し，その中から土器片が出土。感激！上層の土器（前期）より層位的に明確に分離されるものと判断され，きわめて興味深い。夜，祝杯をあげる。

Ｇ２区SK01の発掘。土器片，石鏃等出土。SK01を完掘し，写真撮影。実測図作成。

Ｇ４区を設定し，調査開始。石器剝片，屑片が５点出土。

渡辺友千代氏が１日，秀浦氏が0.5日来援。
参加者：松本岩雄，定池博之
協力者・来訪者
入沢　惇（自治会長），河野央美子
三浦博一，読売・柳記者

◆12月22日(日)　雨

Ｇ１区，暗褐色土中遺物出土状況写真撮影。この層では土器片は出土するが剝片等は全くなし。本日はさらに下層を掘り進めたが遺物なし。落胆す。

Ｇ４区は雨のため作業はかどらず。秀浦昇氏に応援してもらい，調査区の上にテントを張る。数点の剝片が出土したのみ。

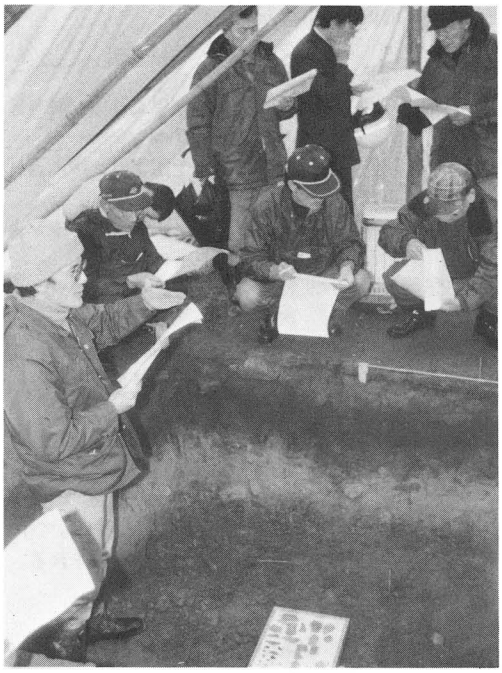
午後，現地説明会開催。参加者約30名。
（渡辺友千代氏，１日来援）
参加者：松本岩雄，定池博之
協力者・来訪者：読売・柳記者

◆12月23日(月)　くもり一時小雪

Ｇ１区：一昨日土器が出土した層の下を掘り下げたが何も検出できず。さらにその下層を掘り進めたところ暗褐色砂質土になり，その中から明らかに人工的に打ち欠いた剝片が１点出土。層位的にみて先土器（旧石器）時代の層である可能性が高い。感極まる。出土状況写真撮影。Ｇ２区：黄褐色土上面を精査し，３個あまりのピット状の落ち込みを検出。写真撮影，実測図作成。

Ｇ４区：写真撮影。北壁と東壁の土層断面図作成。

午後，定池君帰る。
参加者：松本岩雄，定池博之
協力者・来訪者
栗田　久，渡辺友千代，NHK・石川記者，山陰中央・弥重記者，中国・水野記者



現地説明会（読売新聞社提供）

◆12月24日(火)　くもり

Ｇ１区：壁の清掃。土層ライン引き。土層写真撮影。土層断面図（北，西，南壁）作成作業。

Ｇ２区：黄褐色土を掘り，その下の暗褐色砂礫層も掘り下げたが，遺物は出土せず。標高472.7m あたりで炭化物，火を受けたと思われる石が出土したが遺物はなし。

木原光（益田市教委）氏，秀浦昇氏１日来援。道川小学校児童16名・先生３名見学。
参加者：松本岩雄
協力者・来訪者：栗栖克己，佐々木小百合

◆12月25日(水)　くもり時々晴

Ｇ１区：東壁土層断面図作成。土壌サンプリング。

Ｇ２区：壁の清掃。写真撮影。土層断面図作成。土壌サンプリング。

Ｇ３区：土層断面図作成。
地形測量。発掘機材撤去。
秀浦昇氏１日，木原光氏0.5日来援。
午後６時に道川を出発。10時に松江着。
参加者：松本岩雄
協力者・来訪者
三浦博一，佐々木小百合，山陰中央弥重記者

（松本　岩雄）

第2章　地勢と環境

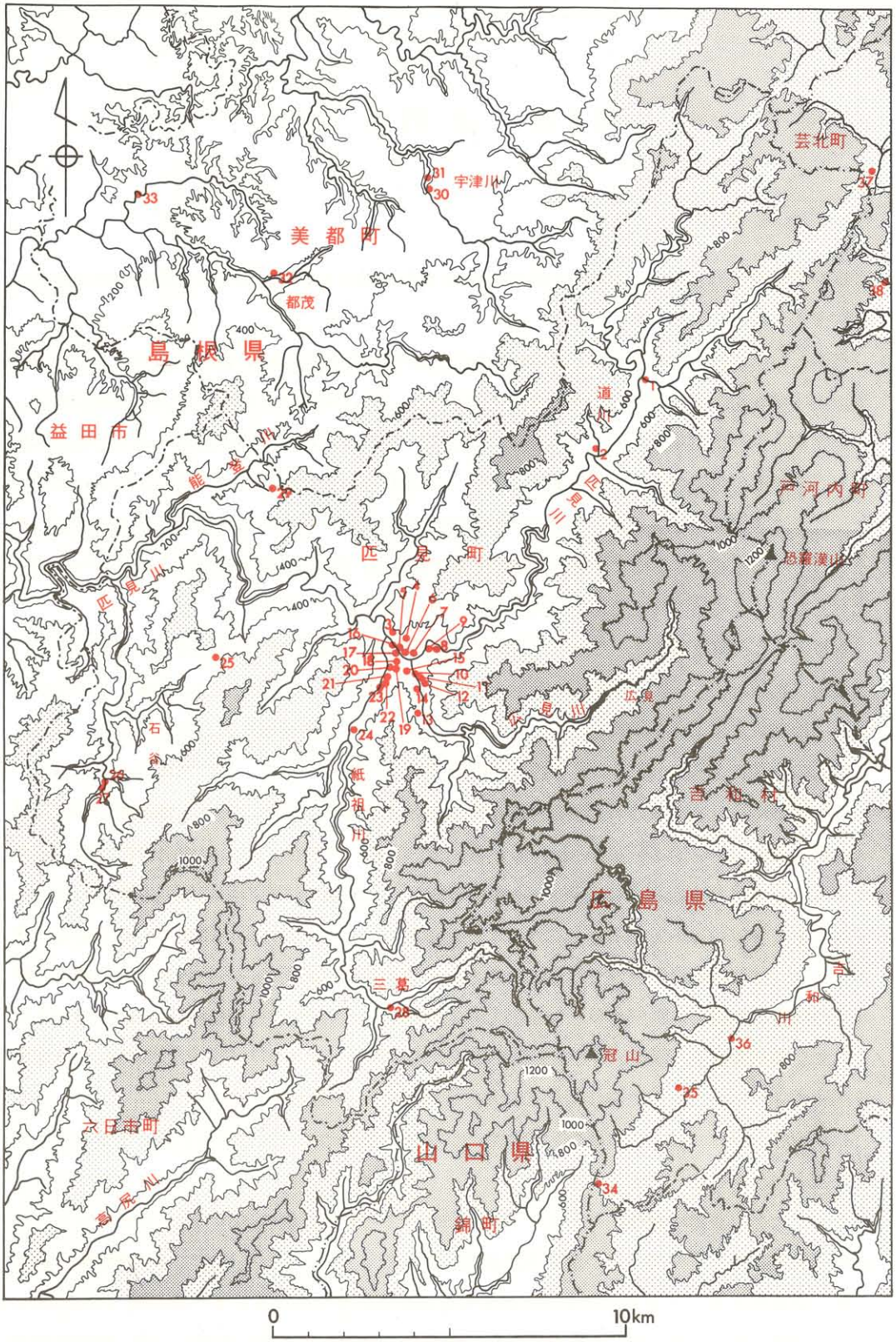
1. 地域概観

島根県美濃郡匹見町は，島根県の西端を貫流する高津川水系の支川である匹見川の上流部に位置する。

東南には広島県との境をなす1,000m内外の中国脊梁山地が北東 — 南西に走り，その南端は寂地山々塊をもって1部は山口県にも接している。また北東面は「境山」である弥畝山をもって那賀郡，南西面は安蔵寺山々塊を挟んで鹿足郡，また低位面の北西には三子山や日晩山が屹立し，その間を縫う匹見川は深い峡谷をつくって益田市へと流れこんでいる。こうした典型的な山間地に立地する匹見町は，面積300.88㎢の96%は林野で占められ，耕地といえば匹見川を中心にその支流域にみるにすぎない。基幹産業は農業で，豊富な森林地を生かした木材・山葵・椎茸あるいは下地区を中心とした三椏・楮などの生産は盛んである。

本報告する新槇原遺跡は，匹見町の北東端，脊梁山地中の道川地区に所在する。本地区には，天杉山（1,173m）・中ノ川山（1,136m）・空山（1,060m）・岩倉山（1,022m）といった高位な山地が屹立する山岳地にあって，中国地方でも多雪・最多雨域に属し冷涼である。また，これらの山地は北東 — 南西に走る数条の断層地塊から成っており，その岩質は中生代白亜紀の火山活動によって生成された流紋岩質凝灰岩類（匹見層群）で占められ，地溝帯は幅8～15㎞延長100㎞に及んでいる(1)といわれている。そのため，河谷はそれらの地溝帯に支配されて流下する。つまり上流域では北東 — 南西に適従し，中流域ではその断層地塊を横切り北西へと流路をとっているのである。したがって，合流地といっても断点に位置するため急峻な山地がせまり，沖積地は余り発達しない。こうした地形的特性は諸所にみられるが，特に奥匹見峡などの峡谷には顕著に展開されている。しかし臼木谷・赤谷などの断層谷には谷底平地がみられ，また最低等高線420mを測る下道川には帯状の沖積地がひろがり，そこは幾段かの河岸段丘が形成されていて，水田耕作地などの人文活動域となっているのである。

標高約400m～1,100mの高低をもつ該地の林相は，基本的には温帯林を主体とする落葉広葉樹で占められている。つまり，ミズナラ・コナラ・ツガ・ケヤキ・ノブ・トチ・ホウ・シデ・イヌブナなどの豊富な樹種にみられ，その階層域を多とする。特にミズナラ・コナラなどは温帯林の指標となるもので，この地域の代表的な樹林でもある。しかし現在では広葉樹林が破壊され，2次林としてスギ・ヒノキなどが大勢を占めるに至っている。また山岳地（標高800m以上）では，ブナ・クロモジを主体とした冷温帯林の林相を呈しているが，一方，低位地や渓



第1図　周辺の遺跡分布図

第1表　周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時代等	No	遺跡名	所在地	種別	時代等
1	新槇原遺跡	匹見町大字道川字出合原	散布地	先土器・縄文	17	神田遺跡	大字匹見字野入	散布地	縄文
2	上家屋遺跡	大字道川字下道川	散布地	縄文	18	能入遺跡	大字匹見字荒木	散布地	古墳
3	江田古墳群	大字匹見字江田	古墳群	横穴式石室	19	猿地遺跡	大字紙祖字荒木猿地	散布地	弥生・古墳奈良
4	江田平台遺跡	大字匹見字江田	集落跡	弥生	20	福田ノ上遺跡	大字紙祖字荒木福田ノ上	集落跡	縄文・弥生古墳・奈良
5	塚田遺跡	大字匹見字江田	散布地	古墳	21	水田ノ上遺跡	大字紙祖字荒木水田ノ上	集落跡	縄文・弥生
6	ヨレ遺跡	大字匹見字半田	集落	縄文・弥生古墳・奈良	22	槍田遺跡	大字紙祖字荒木槍田	散布地	縄文・弥生奈良
7	半田遺跡美濃殿地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	23	長グロ遺跡	大字紙祖字元組長グロ	散布地	弥生・奈良
	サイカチ地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳奈良	24	石ケ坪遺跡	大字紙祖字乙佐原	集落跡	縄文
	八祖地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	25	牛首古墳	大字石谷字内石牛首	古墳	
	イセ地区	大字匹見字半田	散布地	縄文	26	土井田遺跡	大字石谷字内谷土井田	散布地	縄文
	辰美屋地区	大字匹見字半田	散布地	縄文・弥生古墳・奈良	27	新宅遺跡	大字石谷字内谷	散布地	
	家ノ後地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳奈良	28	新井屋畑遺跡	大字紙祖字三葛	散布地	
	木ワダ畑地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・奈良	29	尖頭器出土推定地	大字澄川字能登	散布地	
8	上黒和遺跡	大字匹見字黒和	散布地	弥生	30	本郷遺跡	美濃郡美都町大字宇津川	散布地	縄文・古墳中世
9	沖ノ田遺跡	大字匹見字萩原	散布地	縄文・弥生奈良	31	お熊ぐろ古墳	美濃郡美都町大字宇津川	古墳	古墳
10	川原田遺跡	大字匹見字山根上	散布地	縄文	32	屋敷平横穴	美濃郡美都町大字都茂字屋敷平	横穴	横穴
11	和田古墳	大字匹見字山根上	古墳	横穴式石室	33	小原古墳群	美濃郡美都町大字小原	古墳	
12	永長山古墳群	大字匹見字上根上	古墳	横穴式石室	34	冠遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	先土器・縄文
13	越峠遺跡	大字匹見字越峠	石斧	弥生	35	頓原遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	縄文
14	サノクチ遺跡	大字匹見字植地	散布地	古墳・奈良	36	半坂遺跡	広島県佐伯郡吉和村	散布地	縄文・弥生
15	土井分遺跡	大字匹見字植地	集落跡	奈良	37	押ケ峠遺跡	広島県佐伯郡芸北町西八幡原	散布地	石器
16	野入古墳	大字匹見字野入	古墳		38	樽床遺跡群W地点	広島県佐伯郡芸北町	散布地	先土器

流域にはウラジロガシ・シイ・アラカシ・ヤブツバキなどの照葉樹も混生する暖帯林もみられる。こうした温帯林を主体として，冷温帯林あるいは暖帯林を混生する豊富な植生下では，その実・果実・根菜を求めてかけめぐる小中動物も多く生息する。例えば，イタチ・タヌキ・キツネ・イノシシ・サルあるいは標高500mにはムジナ，広域に棲むノウサギ・ムササビ，ブナ帯にはツキノワグマなども生息している。かつてはシカも多く棲んでいたらしく，藩制期には鹿皮は「御買上げ」として藩に差し出されていた(2)。また渓流には遡河性のサケの仲間であるゴギ・ヤマメといった冷水の魚類も棲んでいる。

該地は，“山地”の特性下にある。したがって，そこには山にふりむけられた生活があった。

例えば，豊富な山林は藩制期に盛況をきわめた鉚業[3]を誘発させるとともに，その系譜は明治・大正期の製炭業へとひきつがれていった。また山地には杣人や木地師も入り込んでいたが，「ソラ」「ハタ」の地名が示すように，そこでは焼畑を糧とした生活もあったのである。こうした山地との密着性は，生業にとどまらず信仰的にも深く結びついていた。それは聖山とみた春日山（989m）などの山岳信仰，あるいは臼木谷の山神などにも顕れているが，この地域に分布する大元神なども源初的にはそうであった。その大元神は『石見神社記』によると5社数えるが，その性格は山に鎮まる祖霊だったのである。その特性も山地から平地への移動によって，祖霊的要素を失い，地域神として作神・農耕神へと変異していった。匹見町大字紙祖字小原の大元社2社の由緒に「此地山間にして猪鹿田畑を妨害す故に猪鹿退散五穀成就の為往古勧請す」と『村誌編纂原稿』にあるように，そこには単調化した大元神の性格がうかがえる。

また一方，平地では田畑作・養蚕・紙漉きなどの生業が行われていたが，河岸段丘沿いの水田耕作はその中心をなすものであった。その耕地，とくに谷地では水田耕作の守り神である「河内神」が祀られていて，合流地には厳島系の4社もみられた『石見神社記』。また脊梁山地をひかえた立地性は，山陽文化との近接を密にしていたのであった。それらは生活の立て方に顕われているが“塩道[4]”にみる南塩（瀬戸内海で生産される塩）の移入は，そのことを如実に物語っているといえる。このような人文構造にあった該地も，社会経済の変容にともなって生業構造も崩れていった。つまり1次産業を基盤とした生業は，今日では余業的あるいは廃退に追いやられ，就業場の制限をまねいているのである。そのため，明治22年「道川村」成立時には戸数147・人口802，また昭和30年の匹見村吸収合併時の戸数197・人口1,019を数えていたが，現在（昭和62年）では戸数81・人口216と減少し過疎化現象が進んでいる地区となっている。

2. 立地と位置

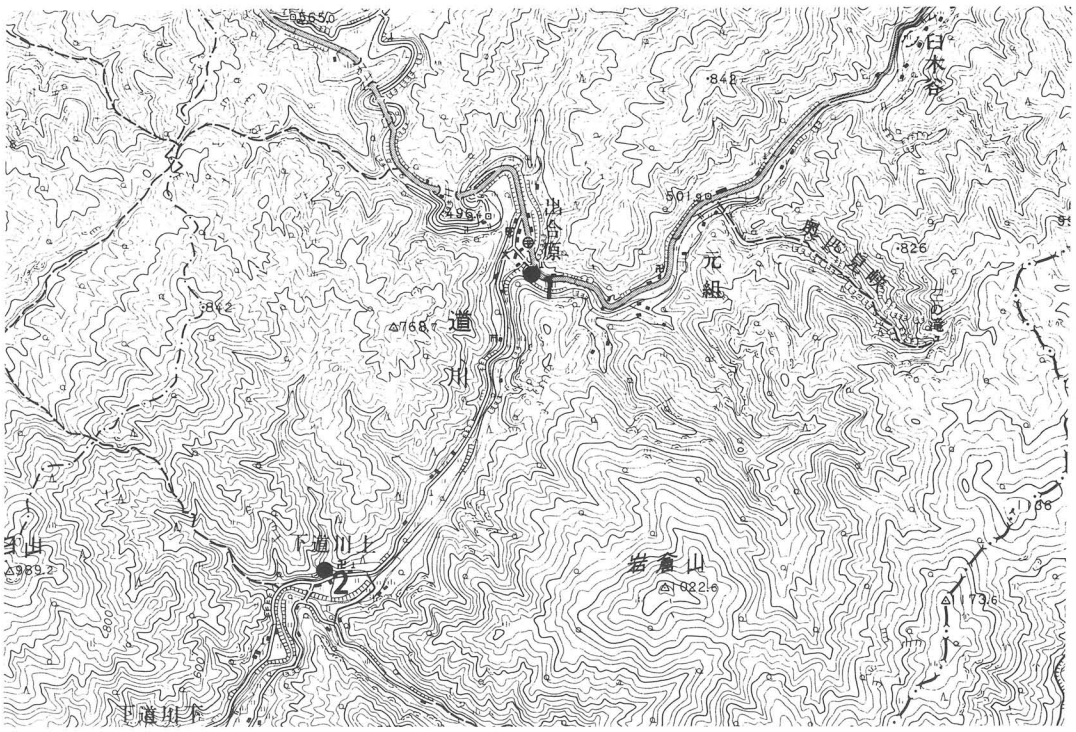
匹見川本流は，広島県境に屹立する標高989mの嶽を水源とし，断層谷を形成する臼木谷を南西流する。出合原で右支の赤谷川を合わせ狭長な沖積地をつくりながら下道川を下り，さらに狭窄部の表匹見峡をぬけ，匹見の中央部で北西に流路をとり益田市へと流下する。本遺跡はその2川の合流する匹見町大字道川字出合原に所在する。その域は2川の堆積作用によって沖積地を形成しているが，この地域特有な断層谷の断点に位置するため狭小である。しかし合流地という地形的立地から，ここには郵便局や出張所・学校などの公的機関も置かれていて，人家も集中する（第2図，図版1）。

新槇原遺跡は，北東面に地塁山地である寿美台山系の日南迫（698m）を背後にもち，その背斜は陰陽を結ぶ国道191号線がぬけている。全面はなだらかな傾斜をもつ水田化された河岸

段丘が横たわり，その端部を匹見川・赤谷川が周流して西面で交差している。遺跡はこの段丘上に立地し，通称「新槇原」と呼ばれている地点である。段丘は，比高差10m測る匹見川に沿って東側にのびているが，西面は出合原の沖積地を隔てて貫流する赤谷川が比高差10m～14mもってこれを遮断している。標高470m台を測るこの段丘は，河面にむかって，とくに合流点が低位となっており，遺物の散布は，その西側の赤谷川に面した約2,400㎡の範囲に検出されているのである（第4図，図版2）。

このような三叉点にある本遺跡の相対的位置を，河筋からみた3コースをあげておくことにしよう。つまり，北東方向に1直線に上る臼木谷コース(1)，またその流れに沿って下る下道川コース(2)，そして横谷を形成する堀越コース(3)，と名づける各コースである。これらの1つのコースは，動脈ともいえる交易路(ルート)とも想定される[5]ので以下それらを踏まえて記述する。

(1)は，大規模な断層谷に立地しているため，もっとも有力視されたルートであったに違いない。元組 ― 臼木谷 ― 虫送峠 ― 八幡（広島県）その距離約9㎞。今日国道191号線がぬけている。先土器時代を検出する樽床遺跡群は同一線上にあり，また同遺跡には阿高式土器も出土しており，匹見との交流が想定される[6]。また該地の生活の立て方が“芸北的”であるのは，このコースが余りにも“得易すかった”ことによると想定される。



第2図　新槇原遺跡の位置　　1：50000

（1．新槇原遺跡　2．上家屋遺跡）

(2)は，臼木谷断層と同一線上にあるもので流れに沿って下るコース。下道川 — 眼鏡峠 — 匹見へと通じ，その距離約14㎞。谷底平地を形成する下道川には縄文後期を出土する上家屋遺跡がある。さらに直線上に諸断層を結んでいくと，七村 — 柿木（鹿足郡） — 椛谷（鹿足郡） — 河内谷（山口県佐波郡） — 仁保（山口県山口市） — 山口（山口県山口市）へとつづくコースが確認できる。本遺跡に検出される安山岩が冠山（広島県）に求められたものとしたら，下道川 — 眼鏡峠 — 匹見 — 三葛 — 冠山ルートということになり（匹見地区の諸縄文遺跡にも安山岩が多出する）その距離約33㎞を測る。

(3)は，並走する数条の断層谷を横断するコースで，下赤谷 — 堀越峠 — 宇津川（美都町）へと通じ，その距離約13㎞。藩制期の浜田表への街道筋でもあった。海岸（日本海）への最短距離で，とくに断層を集約するルートとして注目されるコース。

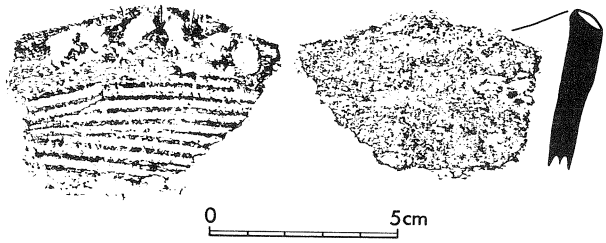
3. 地域的様相

標高1,000mを越す重畳たる山岳地にある本地区は，様ざまな様相をひきおこしている。例えば気候的には多雨・降雪をよび，年平均気温は10～14℃と冷涼である。その環境は一方で，ドングリ・トチの実などの堅果類をはじめ，マタタビ・サルナシ・ミツバアケビ・カヤの実などの植生を育てた。また，その実や根菜を採餌する小中動物，冷水の渓流にはマス・ヤマメ・ゴギなどを棲まわせている。このような落葉広葉樹林帯（温帯林）の資源的環境下では，照葉樹林とともに伸張された農耕の弥生文化よりも，むしろ狩猟採集を基調とした縄文文化の方が密度が高かったかも知れない。それは既に検出されている該地の縄文遺跡である上家屋（縄文後期・第3図）にもみられるが，地域的にみても弥生遺跡より，縄文遺跡がはるかに多く分布していることから裏付けられる。つまり弥生遺跡4ケ所に対して，縄文遺跡は11ケ所数え，しかも匹見中央部に集中する弥生遺跡に対して縄文遺跡は支流域にも点在するという違いをみせている。そのことは豊富な資源をもつ落葉広葉樹林帯が，狩猟採集生活を主体とした縄文人にとって格好な活動域であったことを示しているといえる。

こうしたナラ林帯との“つきあい”は『石見八重葎』（1,817年）の道川村の項に「民業 木地を挽，山猟，炭を焼」とあるように，形態を変えながらも永きにわたっていたことが判る。それらは今日の生活誌にみることができるが，特にトチの実を食用とする「トチモチ」や「トチガユ」などは狩猟採集時代の系譜をもつものとして注目され，また明治期にはドングリも「ダンゴ」にして食べられていたらしい(7)。また，同町大字紙祖の三葛地区に伝承されている「熊まつり」の狩猟儀礼も，同地域の環境的背景と関連づければ民俗的にもおもしろい事例でもある。

脊梁山地を挟んだ広島県の芸北地方との交流を密にしてきた該地は，北東 — 南西方向に走

る西中国山地最大の断層線（臼木谷断層）によるところの“通路”によってなされたものであった。この北―南（峰越し）との交流は，方言や通婚あるいは住居の作りなどの生活文化全般にわたっており，今日その通路は国道の経路ともなっていて交通は頻繁している。また信仰的には宮島系の４社の勧請，あるいは，南塩（瀬戸内海で生産される塩）の移入などにみられるように，その基調は瀬戸内海に強く吸引されていた。しかしその交流も峰越しルートだけではなかったことは，自然神から発生した水田耕作神の河内神の分布にみることができる『石見神社記』。つまり河内神は，山口県山代地方に濃厚に分布するもので，このような古態の神が該地に10社も分布していたということは，断層線を通して西方向との近接，むしろその方面の移植文化とも考えられないでもない。いずれにせよ該地は，地形的断絶をもっていた日本海側との交流は，少なくとも原始古代は希薄であったと想定され，文化の曙光はもっぱら北東―南西に走る断層線を通して，漸移的に文化を受け入れていったものと考えられる。



第３図　上家屋遺跡出土土器実測図（1/2）

◇注

(1) 島根県地質図説明書編集委員会『島根県の地質』昭和60年８月
(2) 矢富熊一郎『石見匹見町史』昭和40年８月
(3) 島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ，石見部製鉄遺跡』昭和59年３月
(4) 富岡儀八『塩道と高瀬舟』昭和48年７月・昭和50年３月
(5) 交易路は歴史的時間差の中でたえず移行したが，河筋も１つの地形体をなすものであるから，“方向づけ”としてとらえたとしても問題はないかと考えられる。
(6) 匹見町大字紙祖の石ケ坪遺跡に阿高式土器が検出されている。
(7) 吉田花子氏 談

◇参考文献

芸北町教育委員会 『樽床遺跡群の研究』 昭和61年３月
島根県・広島県 『西中国山地国定公園候補地―学術調査報告―』 昭和41年３月
桑原良敏 『西中国山地』 昭和57年12月 ㈱渓水社

（渡辺 友千代）

第3章　層位と遺構

1.　調査の方法と経過

現地調査は昭和60年12月16日から12月25日まで，延べ10日間を費して実施した。

今回調査を実施した地域は，匹見川と赤谷川の合流地点の河岸段丘上に位置する。国道191号線を益田・美都から広島方面に向かって進み，ちょうど城之詰橋を渡り切った地点にあたる。国道の南西側に3段ばかり階段状につくられた水田があり，国道側から川の合流地点に向かって次第に低くなっている。この水田部に約2,400m²にわたって遺物の散布がみとめられるが，このうち16m²（2×2mの調査区を4箇所）の調査を行ない，層位・遺物包含状況等を確認することとした（第4・5図，図版1・2）。

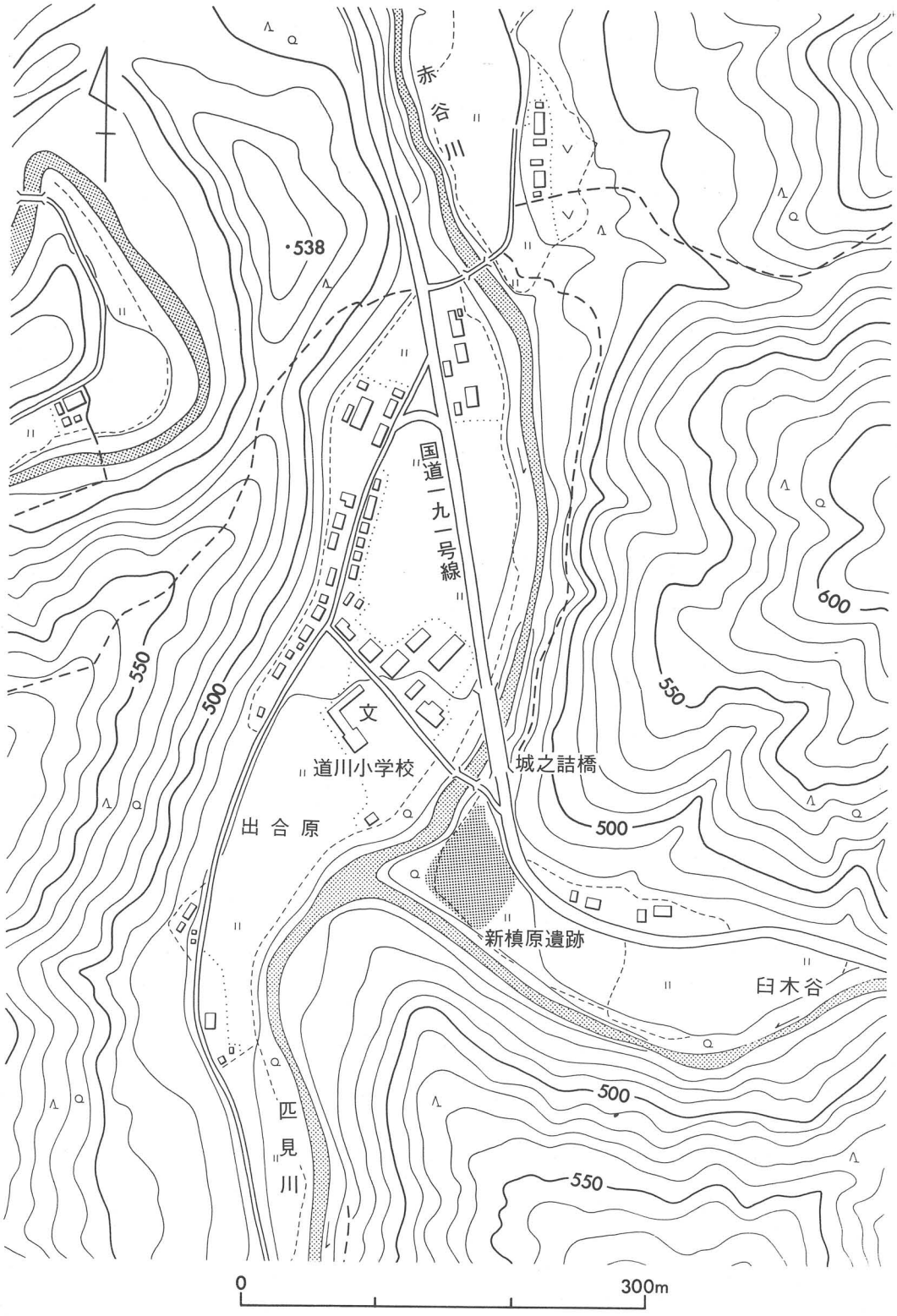
調査にあたっては，当初1mあまりの積雪があったため，地形測量や全域にわたるメッシュの設定等が実施できず，とりあえず国道に最も近い水田に2×2mのグリッドを設定し，これをG1区と呼称することとした。このG1区の概ね南北方向を示す線を基準線として延長し，G2区・G3区・G4区といった具合にさらに3箇所の調査区を設定した。この基準線としたものは先に概ね南北線と記したが，実はN－42°30′－Eを示すことから正確にいえば北東から南西方向に向かう線である。ただし，ここでは調査時からこれを南北線と仮称してきたことや記述を簡略化するといった意味あいから，N－42°30′－E方向のラインを一応南北線，それに直交する線を東西線として以下の記述を行なうこととする。したがって，調査区の「北壁」とか「東壁」と記した場合，この基準線に沿ったものであることをあらかじめおことわりしておきたい。

G2区は，G1区の南方へ4m行き，そこから東に6mの地点に設定したもので，G1区と同じ水田面にあたる。この水田は国道より約2.2m低く，標高474.13mあまりある。

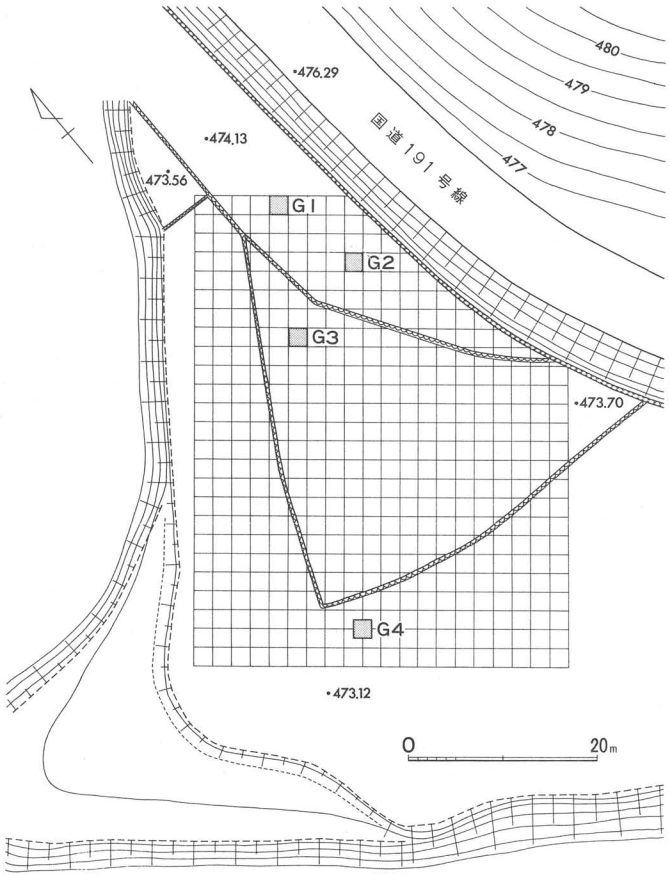
G3区は，G1区の南方へ12m行き，そこから東に2mの地点に設定したものである。G1・G2区の水田より45cmほど低い水田にあたり，標高は約473.68mである。

G4区は，G1区から南方へ42.5m行き，そこから東に8.5mの地点に設定した調査区で，川に最も近い。G3区より56cmあまり低い水田で，標高は473.12mあまりある。

調査は，まず調査区全面を薄く平面的に削りながら遺構プランを検出するように努め，必要に応じて適宜サブトレンチ等をいれて断面による確認も行なうこととした。また，その過程で出土した遺物については，1点づつ出土地点とレベルをおさえて取り上げることを原則としたが，近接して出土したものについては数点を同一番号で取り上げたものがあるほか，不注意に


赤谷川
538
国道一九一号線
550
500
600
550
文
道川小学校
城之詰橋
出合原
500
新槙原遺跡
臼木谷
匹見川
500
550
0
300m

第4図　遺跡周辺地形図



第5図　調査区配置図

よって排土中に捨ててしまった遺物を採取したものもある。

調査の結果，G1区では明確な遺構は検出されなかったものの，縄文前期の層，縄文早期の層，先土器（旧石器）時代の層を良好な状態で確認することができた。G2区では縄文前期の層，縄文前期の土壙を把握することができた。G3・G4区では年代のわかる良好な包含層は確認できなかったが，石器遺物が数点づつ出土した。

このたびの発掘調査は，冬期の調査であったうえ，12月としては例年にない大雪にみまわれたため，作業は難渋を極めたが地元の方々の温かい御協力により，なんとか無事に調査を終了することができた。

出土遺物の整理作業にあたっては，遺物の洗浄・註記作業は県文化課で行ない，実測図作成・写真撮影は山口大学，土壌・岩石の分析は島根大学で実施していただいた。

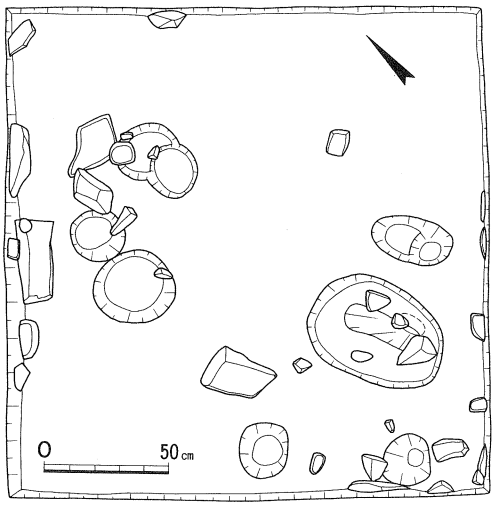
なお，この発掘調査のあと，昭和61年3月には柳浦俊一が中心となって，G1区の土層剝ぎ取り作業を実施した。土層の剝ぎ取りは2枚行ない，1つは町教委，他の1つは県教委で保管・活用することとした。

2.　G1区の概況（第6～10図，図版3～8）

G1区は今回の調査で最も高い山側の水田に設定したものである。調査に入った時点ではすでに水田耕作土が除去された段階であり，現地表面は標高474.13mあまりであったが，元の水田面はこれより15～20cm高かったものと思われる。

第1層　水田耕作土で暗青灰色を呈する。現状では調査区の南西寄りに部分的（最大厚10cm）にしか残存していない。

第2層　暗赤褐色を呈し，粘性があり，黄色ブロックを若干含むものである。10～25cm大の石塊をわずかに含んでいる。この層の厚さは平均15cm（最大20cm，最小10cm）あまりあり，ほぼ水平に堆積している。第2層と第3層の層界は若干の凹凸がみられるものの，比較的平坦である。土器，石器遺物を多数含んでおり，遺構の存在が予想されたため慎重に掘り進めたが，落ち込み等をまったく確認することができなかった。また，遺物の分布状況を平面的にみても，散在した状況を示し，まとまりのある様子等は把握できなかった。



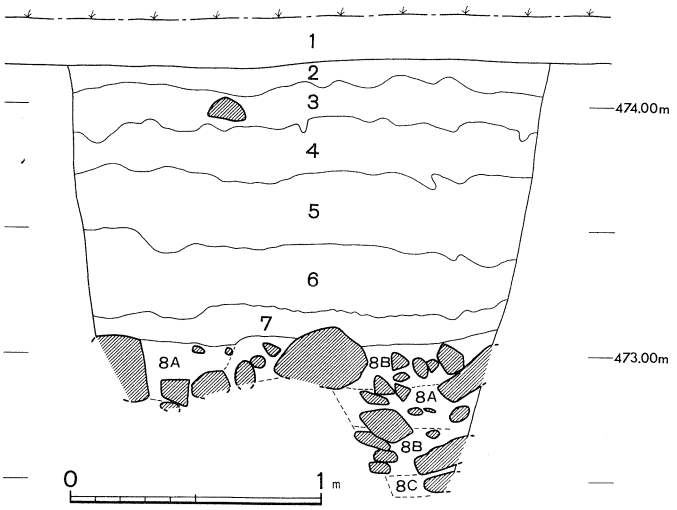
第6図　G1区上層平面図（1/30）

第3層　黒褐色乃至黒色を呈し，やや粘性を有するものである。色調は単一ではなく，調査区北壁側は黒褐色を呈するが，南壁側に行くにつれて漸移的に黒色となる。10～30cm大の石塊を多く含む。この層の厚さは概ね20～30cm（最小15cm，最大35cm）あまりあり，北から南に向かって若干傾斜している。すなわち，北壁における第4層との層界の標高は約473.90mであるが，南壁では約473.75mとなっている。第3層と第4層の層界は，凹凸が著しい。第3層中からは多数の土器と石器遺物が出土した。これらの出土遺物と石塊の平面分布をみると，北東隅と南西隅が稀薄であり，何らかの遺構の存在が考慮された。まず，平面的にプランを把握しようと精査したが，人工的な落ち込み等を検出することができなかった。そこで，調査区西壁沿いにサブトレンチを設定して，断面によって遺構を確認しようと試みたが，検出することができなかった。第3層を掘り進み，第4層上面に達した時点で多数のピットがみられた。このうち比較的明瞭に輪郭をたどることのできた8個のピットを掘ってその状況を確かめた。埋土はいずれも第3層と同じ土と考えられ，ピット内に土器片が落ち込んでいる例もみとめられた。ピットの断面形は大半がくさび状を呈し，壁もきちんとしたものではなく，柱穴等の遺構と判断するには躊躇されるものである。また8個のピットの配列にも規則的なあり方をうかがうことができず，現状では明確な遺構であるとは言い難いものといえる。

なお，第2層と第3層は色調の違いは認められたが，第4章(1)で詳述するように近年に層界区分が二次的についてしまったものと考えられ，基本的には同一層であったと判断される。

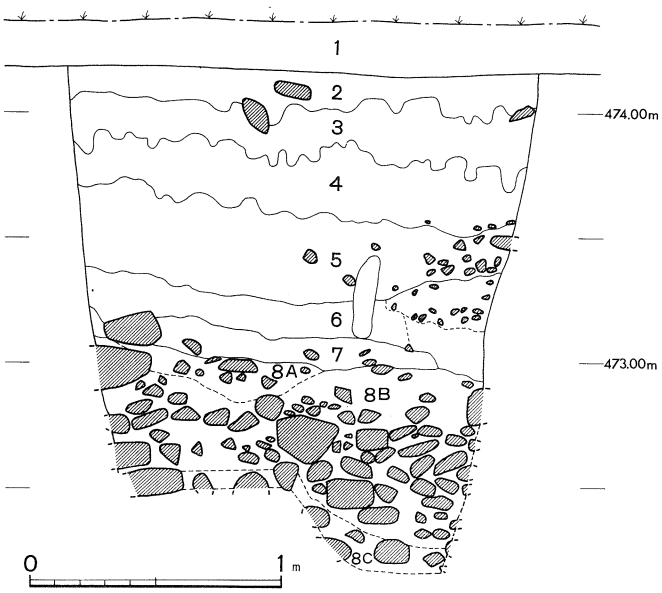
第4層　黄褐色を呈し，粘性が強いものである。北側がわずかに暗黄褐色を呈し，南側が黄褐色になるが，全体としては大きな変化ではなく，ほぼ均一の状態である。相当にしまりがあり，不純物を混じえないきれいな層であり，一般的に地山と称しているものに近い状態である。

10cm大の小石がわずかにみられる。層の厚さは平均20cm（最小15cm，最大25cm）あまりで，第3層と同様に北から南に向かって傾斜している。北壁における第5層との層界の標高は473.70m前後であるが，南壁では473.45mあまりとなる。第4層と第5層の層界は凹凸が少なく比較的ゆるやかな曲線を示している。レベルをみると，この層の下半層から出土したと思われる土



1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土(粘性があり，黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土～黒色土(やや粘性あり)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．暗褐色土(やや砂質)
6．暗黄褐色砂質土
7．暗褐色砂質土(礫を若干含む)
8A.暗褐色～黒褐色砂礫層
8B.黄褐色砂礫層
8C.灰褐色砂礫層

第7図　G1区北壁土層断面図　(1/30)

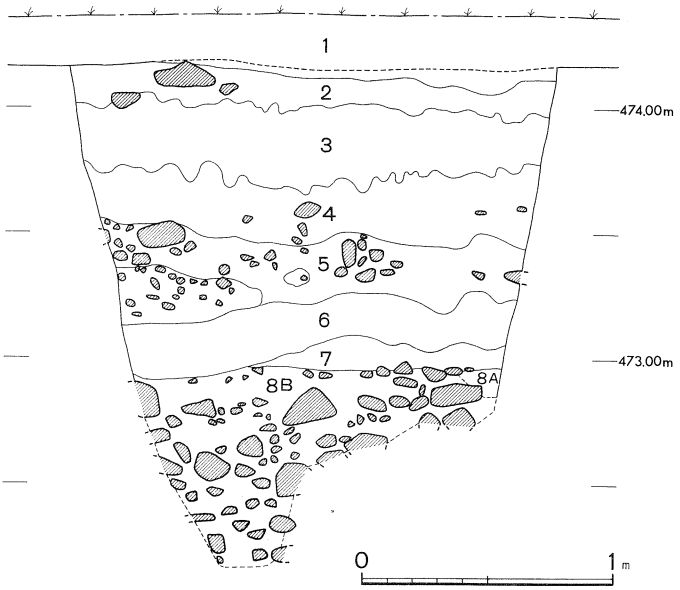


1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土(粘性があり、黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土～黒色土(やや粘性あり)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．暗褐色土(やや砂質)
6．暗黄褐色砂質土
7．暗褐色砂質土(礫を若干含む)
8A. 暗褐色～黒褐色砂礫層
8B. 黄褐色砂礫層
8C. 灰褐色砂礫層

第8図　G1区東壁土層断面図　(1/30)

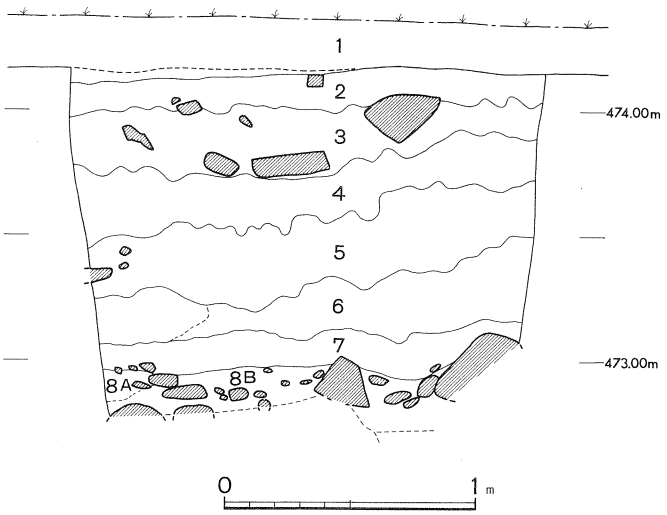
器小片が１点あるが，これは第５層出土の土器に類似した特徴を有するもので，基本的には第４層は無遺物層とみることができる。

第５層　暗褐色を呈するやや砂質の層である。北壁寄りはやや明るい暗黄褐色土で，南壁側は暗褐色になる。南壁寄りのみに４～５㎝大の礫がみられる。層の厚さは30㎝あまりのところ



1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土(粘性があり、黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土～黒色土(やや粘性あり)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．暗褐色土(やや砂質)
6．暗黄褐色砂質土
7．暗黄褐色砂質土(礫を若干含む)
8A.暗褐色～黒褐色砂礫層
8B.黄褐色砂礫層

第９図　Ｇ１区南壁土層断面図　(1/30)



1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土(粘性があり黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土～黒色土(やや粘性あり)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．暗褐色土(やや砂質)
6．暗黄褐色砂質土
7．暗褐色砂質土(礫を若干含む)
8A.暗褐色～黒褐色砂礫層
8B.黄褐色砂礫層

第10図　Ｇ１区西壁土層断面図　(1/30)

が多く（最小15cm，最大35cm），第３・４層などと同様に北から南に向かって傾斜して堆積している。すなわち，北壁における第６層との層界の標高は473.45mあまりであるが，南壁では473.25m前後となる。第５層と第６層の層界のラインはゆるやかである。この層の上半部に集中して土器片が包含されていた。これらの土器は第２・３層出土遺物と層位的に明確に分離した状態で出土しており，明らかに時間的な差を把握できるものとして注目される。なお，残念ながら第５層からは石器遺物が１点も出土しなかった。

第６層　暗黄褐色砂質土である。色調は細かく観察すると一様ではなく，北壁側がやや明るく，南壁側に近づくにつれて次第に黒っぽくなっている。単純な砂質土層であり，礫等は含まない。層の厚さは15～35cmあり，北壁側が厚く，南壁側が薄い傾向にある。第６層と第７層の層界はゆるやかな曲線を描き，標高473.15m前後でほぼ水平に近い（北側と南側では10cmくらいの差はある）状況を示している。この層には遺物を含んでいない。

第７層　暗褐色砂質土である。第６層に類似した砂質土であるが，第６層よりわずかに黒っぽくなること，礫を若干含むことなどにより分層したものである。層の厚さは10～15cmで，第８層との層界はほぼ水平（標高約473.00m）である。この層からは安山岩の剝片１点と炭が数点出土した。

なお，第６層と第７層はわずかな色調の違いが認められるが，第５章(1)で述べられているテフラの所見では同一層とみて良いものと判断されている。

第８層　砂礫層である。５cm大の小礫から50cm以上の大石まで多数の石塊を含む層で，これ以上掘り進めることはきわめて困難な状況になった。第８層は含まれている砂の色によって一応，A.暗褐色～黒褐色砂礫層，B.黄褐色砂礫層，C.灰褐色砂礫層と分層して実測図を作成したが，考古学的にはあまり意味のないことと思われる。

3.　Ｇ２区の概況（第11～16図，図版８－２，９）

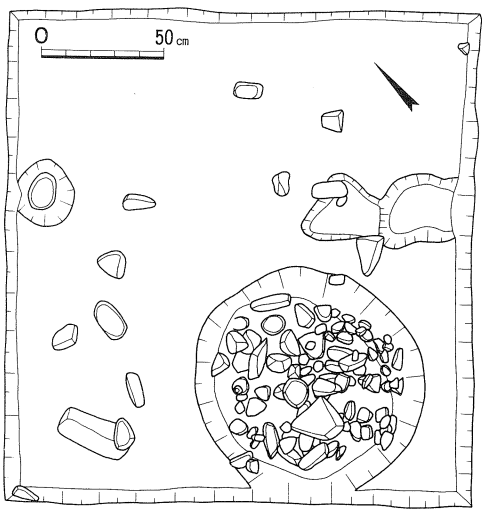
Ｇ２区は，Ｇ１区と同一水田面に設定したもので，現地表面は標高約474.13mある。

第１層　水田耕作土であり，調査時にはすでに全て除去されていた。

第２層　暗赤褐色を呈し，粘性があり，黄色ブロックを若干含むものである。Ｇ１区の第２層と同一の層と考えられる。この層の厚さは10～15cmあり，ほぼ水平に堆積している。第２層と第３層の層界は比較的平坦である。

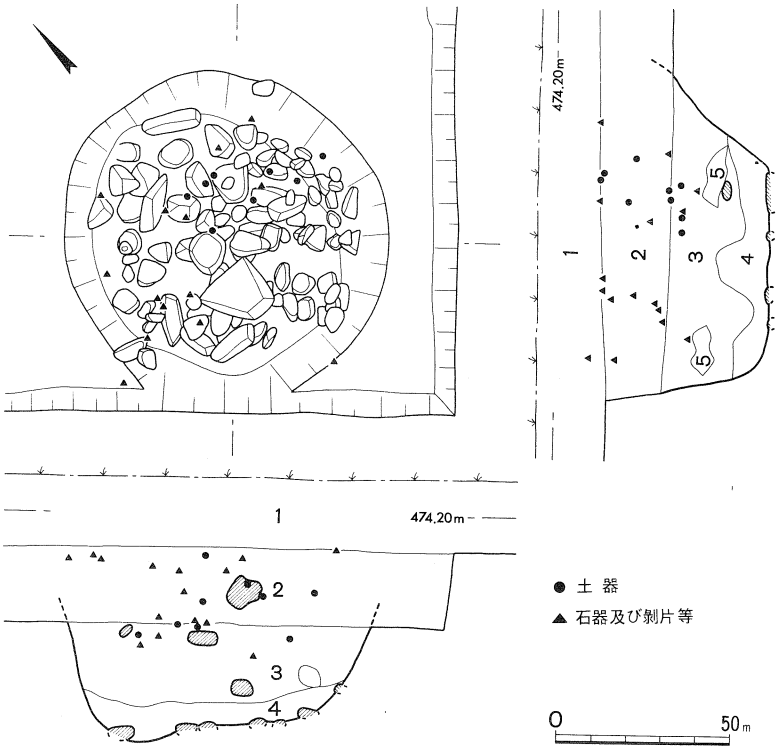
土器・石器遺物を包含していた。この層を掘りはじめるとすぐに５個あまりの石塊の集積がみられ，その周囲におぼろげながら径0.9mあまりの円形プランを呈する落ち込み（SK01）が認められた。ただし，この第２層中においては明確な輪郭をたどることが困難であったため，結果的にはこの遺構は第４層上面で明瞭に確認し，その段階から遺構を掘ることとなった。

第３層　黒褐色を呈し，やや粘性を有するものである。Ｇ１区の第３層と同一層と考えられる。この層の厚さは10～25cmとかなりのばらつきがあり，北から南に向かってわずかに傾斜している。すなわち，北壁における第４層との層界の標高は473.85mあまりであるが，南壁では473.75mとなっている。第３層と第４層の層界は，凹凸が著しい。第３層中からは多くの土器・石器遺物が出土した。第３層を掘り進み，第４層上面に達した時点で円形土壙（SK01）の輪郭を明瞭に確認したほか，３個のピット状の落ち込みがみられた。このピットはＧ１区第４層上面でみられたものと同様なもので，明確な遺構であることは判断し難いものであった。



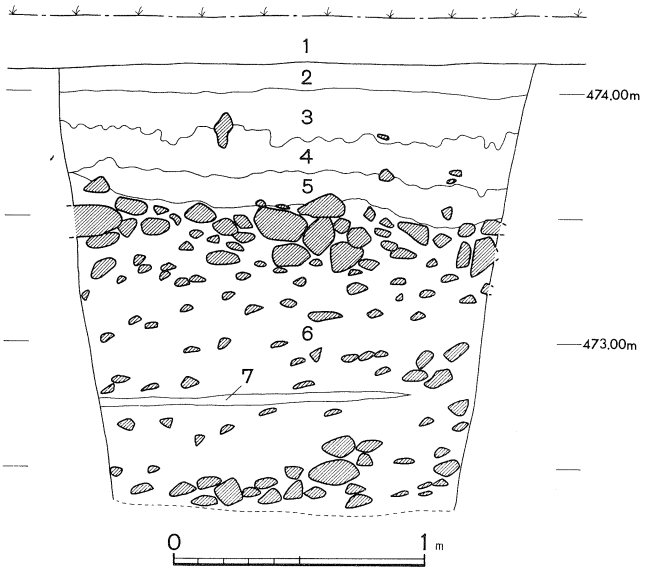
第11図　Ｇ２区上層平面図　（1/30）

第４層　黄褐色を呈し，粘性が強いものである。Ｇ１区の第４層と同一と考えられる。この



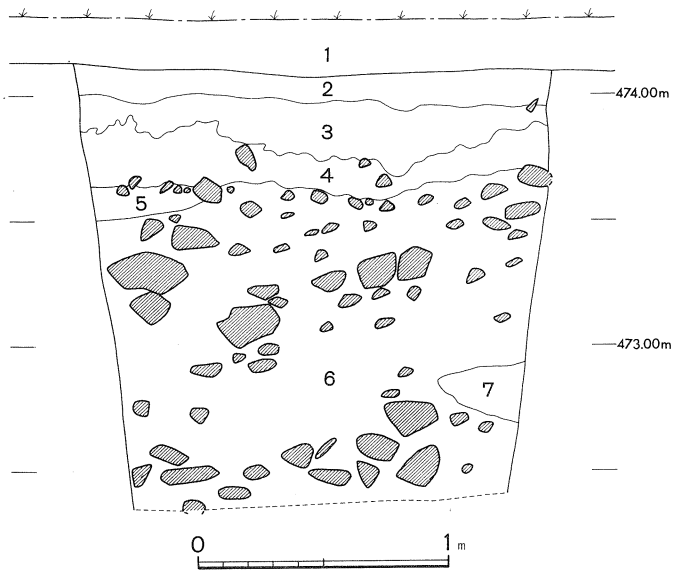
第12図　Ｇ２区ＳＫＯＩ実測図

層の厚さは10～30cmあまりで，第３層と同様に北壁側から南壁側に向かってわずかばかり傾斜している。すなわち，北壁における第５層あるいは第６層との層界の標高は約473.65mであるが，南壁では473.55mとなる。第４層とその下部層との層界は凹凸が少なく，比較的ゆるやかな曲線を示している。この層には遺物を含んでいない。



1．耕作土(暗青灰色)
2．暗赤褐色土(粘性があり黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土(やや粘性がある)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．黄褐色砂礫層(5～20cm大の石塊を多数含む)
6．暗褐色土(やや砂質)
7．暗褐色砂層

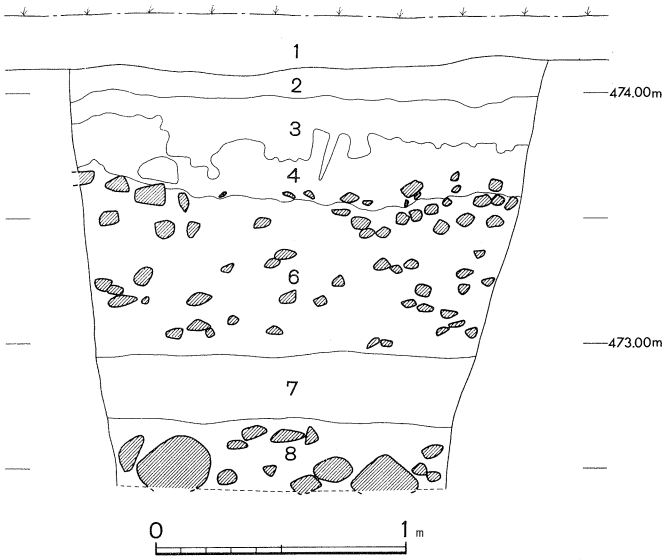
第13図　Ｇ２区北壁土層断面図　(1/30)



1．耕作土(暗青灰色)
2．暗赤褐色土(粘性があり黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土(やや粘性がある)
4．黄褐色土(粘性が強い)
5．暗褐色土(やや砂質)
6．黄褐色砂礫層(5～20cm大の石塊を多数含む)
7．暗褐色砂質

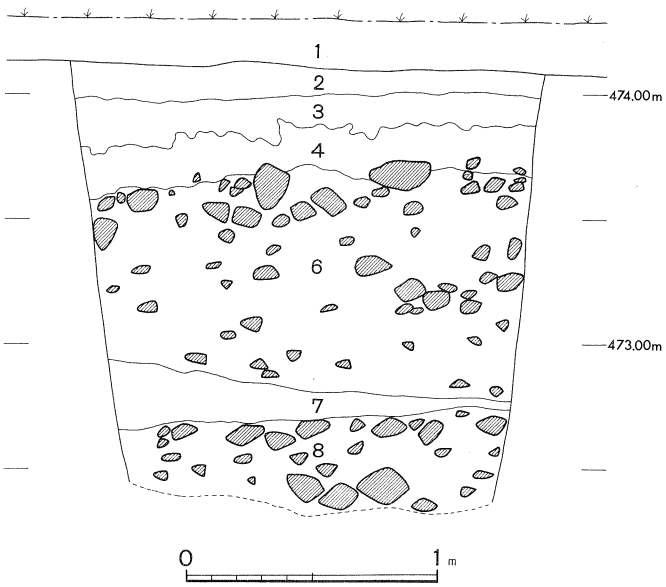
第14図　Ｇ２区東壁土層断面図　(1/30)

第５層　暗褐色を呈するやや砂質の層である。Ｇ１区の第５層と同一のものと考えられる。北壁の断面では厚さ10cmあまりの層がみられるが，東壁断面では北寄りのところでわずかにみられるのみで，西壁・南壁の断面には全くみられない。したがって，この第５層はＧ２区で消滅し，かわって第６層が厚く堆積する。この層では遺物は認められなかった。



1．耕作土(暗青灰色)
2．暗赤褐色土(粘性があり黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土(やや粘性がある)
4．黄褐色土(粘性が強い)
6．黄褐色砂礫層(5～20cm大の石塊を多数含む)
7．暗褐色砂層
8．黄褐色砂礫層

第15図　Ｇ２区南壁土層断面図　(1/30)



1．耕作土(暗青灰色)
2．暗赤褐色土(粘性があり黄色ブロックを若干含む)
3．黒褐色土(やや粘性がある)
4．黄褐色土(粘性が強い)
6．黄褐色砂礫層(5～20cm大の石塊を多数含む)
7．暗褐色砂層
8．黄褐色砂礫層

第16図　Ｇ２西壁土層断面図　(1/30)

第6層　黄褐色砂礫層である。5～20cm大の石塊を多数含む。G1区の第6層とは明らかに異なるもので，むしろG1区の第8層に近い様相を呈している。この層の厚さは70～90cmある。遺物は含まれていない。

第7層　暗褐色砂層である。北壁では厚さ3～5cmしかみられないが南に行くにつれて次第に厚くなり，南壁では厚さ25cmあまりになる。第7層中の最下部から炭が数点出土したほか，第7層と第8層の層界にあった石で火を受けたのではないかと思われる石が3個あまりあった。G1区の第7層に類似した層であり，石器剝片等の存在が期待されたが，人工遺物は出土しなかった。

第8層　黄褐色砂礫層である。第6層にきわめて類似しており，中間に第7層がみられないところでは区別することができない。遺物は含まれていなかった。

SK01　調査区南壁に接したところで検出された円形の土壙である。第2層中で検出したが，明確にプランを把握できたのは第4層上面である。第4層上面での直径0.9m，深さは0.35mで，壁は斜行し，壙底は皿状で，全体として摺鉢状をなす。土壙内の埋土は2層に分けられる。上層は黒褐色を呈し，炭と暗黄褐色土ブロックを混じている。全体に粒子が細かく，やや粘性がある。5～10cm大の石塊を多く含み，厚さは20cm前後である。下層は暗褐色を呈するやや砂質の層である。粘性が少なく，ボロボロしている。上層と同様に石塊を含む。厚さは5～10cmである。埋土中から土器・石器遺物が出土したが，意図的な埋置状況は認められなかった。

4.　G3区の概況（第17図，図版10－1）

G1区の南方へ12m行き，そこから東に2mの地点に設定したものである。G1区より約45cm低い水田で，標高473.70mあまりある。

第1層　水田耕作土であり，調査時にはすでに全て除去されていた。

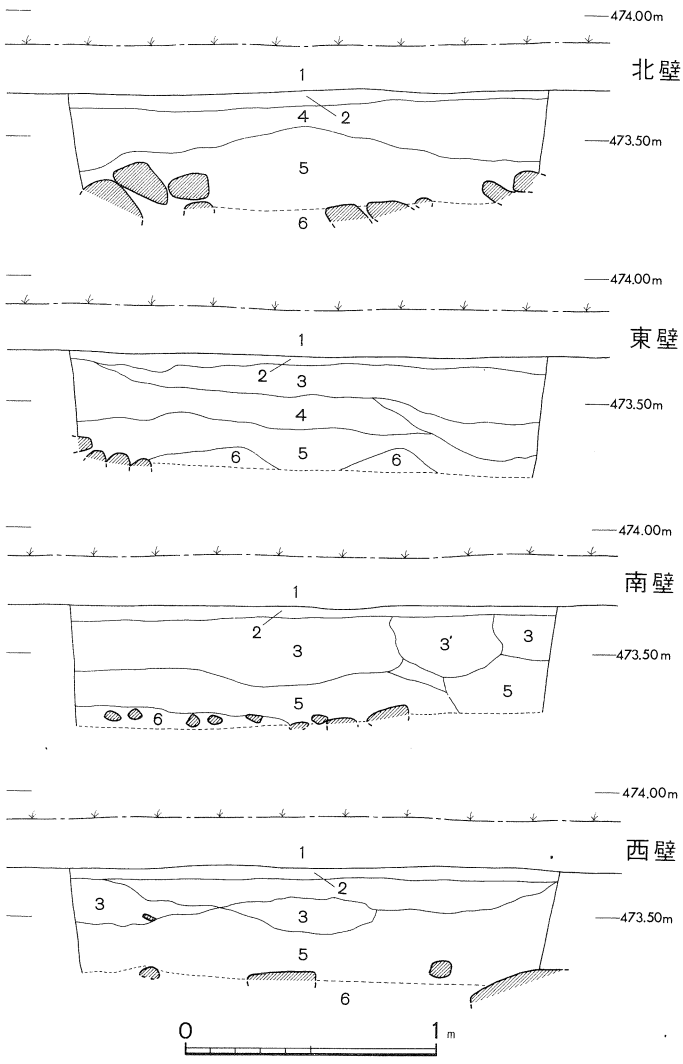
第2層　赤褐色を呈し，G1区第2層に類似している。層厚は約5cmと薄く，ほぼ水平に堆積している。G3区ではこの第2層のみから遺物が出土したが，量は少なくわずか3点であった。

第3層　黄褐色土で，G1・G2区の第4層に類似しているが粘性がやや少ない。層厚は10～20cmあまりで，東・西・南壁に認められるが，北壁では存在しない。

第4層　黄褐色砂礫層で，北壁では20cmあまりの厚さがあるが，南側に行くにしたがってしだいに薄くなり，南壁では認められない。

第5層　暗褐色～黒褐色砂礫層である。層厚は20～30cmある。

第6層　黄褐色砂礫層である。基底礫と考えられ，5～30cm大の石塊を多量に含んでおり，これ以上掘り進めるのは不可能であった。



1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
4．黄褐色砂礫層
5．暗褐色～黒褐色砂礫層
6．黄褐色砂礫層

1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
3．黄褐色土
4．黄褐色砂礫層
5．暗褐色～黒褐色砂礫層
6．黄褐色砂礫層

1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
3．黄褐色土
3．暗黄褐色砂礫層
5．暗褐色～黒褐色砂礫層
6．黄褐色砂礫層

1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
3．黄褐色土
5．暗褐色～黒褐色砂礫層
6．黄褐色砂礫層

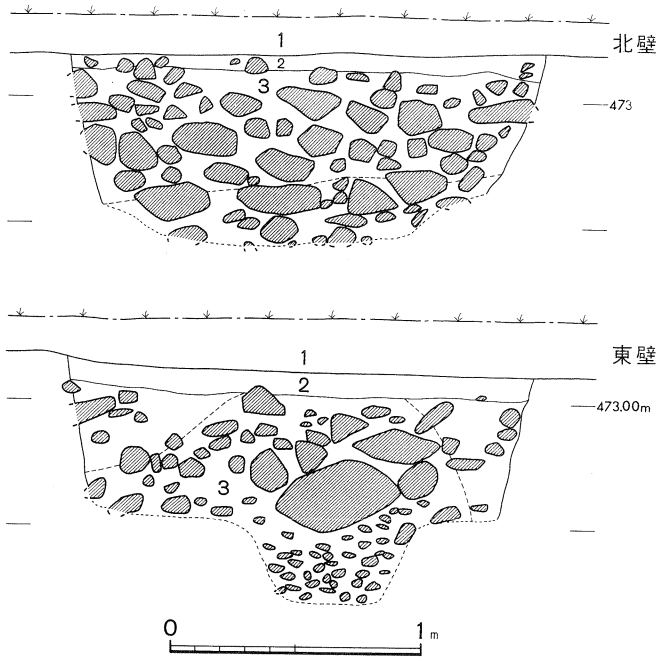
第17図　G３区土層断面図（1/30）

G３区では，G１区でみられた黒褐色土（第３層）・暗褐色土（第５層）・暗褐色砂質土（第７層）などのような遺物包含層はみられなかった。

5.　G４区の概況（第18図，図版10－２）

G１区から南方へ42.5m行き，そこから東に8.5mの地点に設定した調査区で，川に最も近いところにあたる。G３区より56cmあまり低い水田で，標高は約473.12mある。

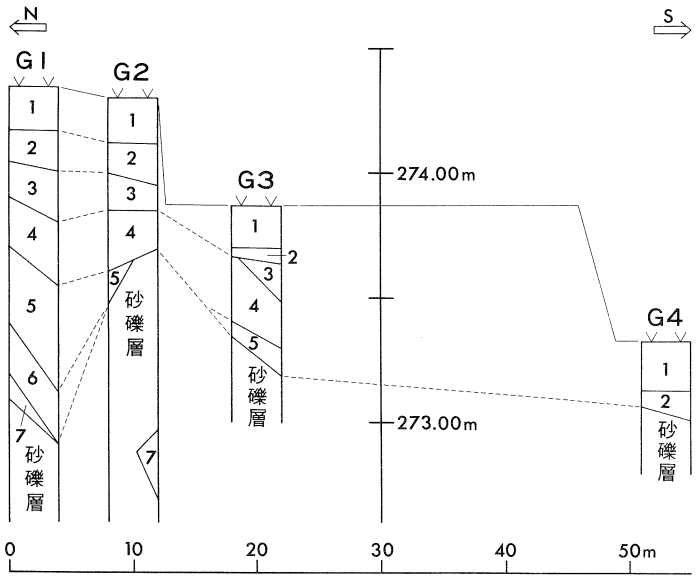
第１層　水田耕作土であり，調査時にはすでに全て除去されていた。



1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
3．暗褐色～暗黄褐色
砂礫層

1．耕作土(暗青灰色)
2．赤褐色土
3．暗褐色～暗黄褐色
砂礫層

第18図　G 4 区土層断面図　(1/30)



第19図　新槙原遺跡層位柱状図

第2層　赤褐色を呈し，G 1 区第 2 層に類似している。層厚は 5～10cmで，ほぼ水平に堆積している。遺物包含層は，この赤褐色土で，平面的には散在した状態で石器遺物 4 点が出土した。ほんらい，遺物包含層は流失しており，営田に伴って周辺から採土してかぶせた土ではないかと考えられる。

第3層　暗褐色～暗黄褐色砂礫層である。5～50cm大の大小さまざまな多量の石塊を含む層で，基底礫と考えられる。　(松本 岩雄)

第4章　出　土　遺　物

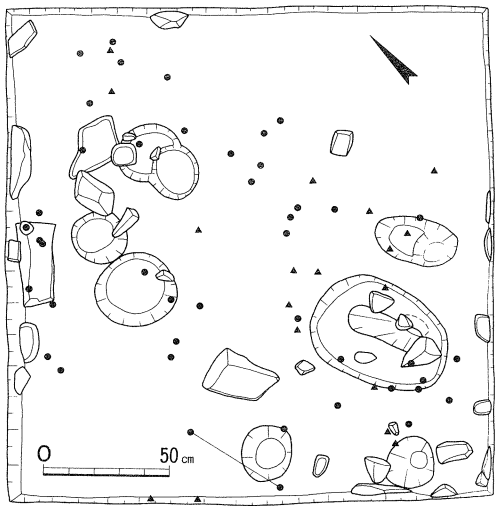
はじめに　4箇所の調査区G１，G２，G３，G４区のすべてから，遺物が出土した。遺物の品目は土器，石器遺物のほか木炭がある。木炭は，燃料であるか自然木の炭化か判らない。土器と石器遺物をあわせた総点数は149点で，内訳はG１区から93点，G２区から48点，G３区から３点，G４区から５点である。各調査区の平面積は同じだから，山方に遺物が多く，川方に分布が稀薄となる。

遺物は一点ごとに深度，平面位置を記録して採り上げたが，複数をまとめて採り上げた場合もあるし，層位名だけ記入して採り上げた場合もある。土器に関しては，磨滅のため拓本がとれない小破片を除いて，すべて図化したが，石器遺物は全量を図示していない。

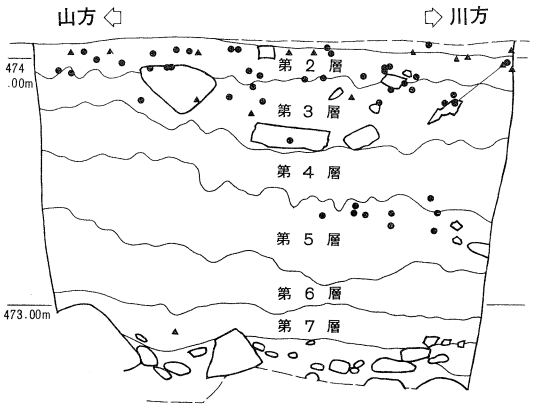
1.　層位と遺物の関係

G１区　遺構はない。遺物包含層は第２層，第３層，第４層，第５層，第７層である。遺物の垂直分布は，第２層，第３層ともに土器，石器遺物が多く，第４層で稀薄となり，第５層で土器がすこし増加し，遺物を含まない間層をはさんで第７層で石器遺物が１点出土した。この垂直分布を調査区北壁に投影すると，上方に大きな集中と下方に小さな集中の２つの分布のまとまりが現れる（第21図）。しかも上方の分布は第２層には均等に散在するが，第３層では上に寄っている事実が看取できる。上方の最深例は第４層に貫入した穴から出土したものであるから，第３層では上方から遺物が出土する。この大勢は動かせないものである。さらに，第３層と第２層から出土した土器片で，接合する事例があった（第24図１）。このことから，第２層と第３層はほんらい同一の堆積物で，表面が赤色化する汚染を後代にうけたと考えられるのである。もっともありうべきは，営田による物理化学作用である。排水水準を発掘で確かめなかったとはいえ，第２層，第３層が縄文時代前期の遺物しか包含していない事実から，遺物包含層は，ごく近年に層界区分が二次的についてしまったものとみられる。しかも縄文前期の包含層の直上に水田耕土がみられることは，遺物包含層の上方も，いくらかは浸蝕され，流亡していることを示す。

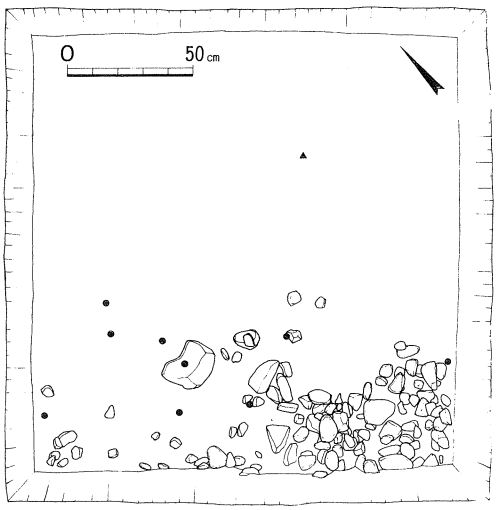
遺物の平面分布で，留意したのはつぎの２件である。すなわち第２層東南隅の遺物分布が稀薄で，堆積土中の石塊もみあたらないこと，第４層の上面に無数のピットがみられることである。結論として２件とも人為的なものではない。東南隅に掘り込みをともなう遺構の末端を想定したが，掘形は検出できなかった。遺物包含層は自然状態では山方から川方へと傾斜して堆積するので，山方の東南隅は営田によりもっとも深く包含層が削平される。そのため堆積土中



第20図　G１区上層の遺物分布（1/30）



第21図　G１区の遺物の垂直分布



第22図　G１区下層の遺物分布（1/30）

に含まれる遺物，石塊が少なくなったと理解している。このことは土層断面図（第21図）でも読みとれるが，計測位置は自然地形の勾配に斜行しているので，実際の土層の傾斜はもっと急激である。第４層上面の無数のピットは，ネズミの類の営巣痕跡とみられる。配列の不規則なこと，形態がくさび状であること，埋土が第３層と同じであること，経験的に壁が弱々しいことから，第４層に貫入した生物痕跡と判断した。したがって，平面図にあらわれる穴は，柱穴ではない（第６図）。G１区の基底礫の上面高は，473.00m。

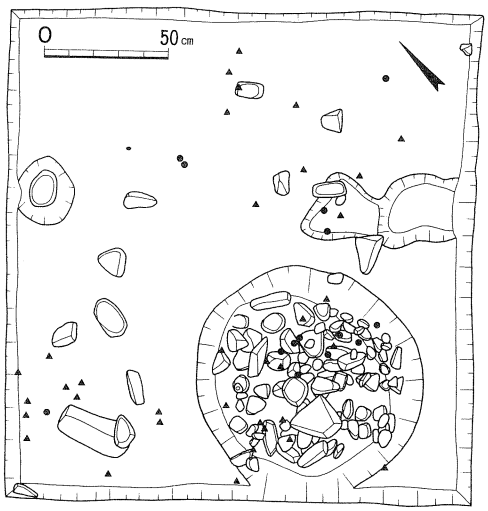
G２区　基底礫までの堆積層は，G１区と同じである。しかし第５層はうすくなって，この区で尖滅し，かわって第６層が厚く堆積する。また第５層と第６層の層界はG１区に比べて礫が多い。先土器時代と縄文時代の間に，鉄砲水によるオーバー・フローがあったことがうかがえる。遺物包含層は，第２層と第３層であり，この区では第４層以下からは，遺物が検出できなかった（第23図）。

調査区の南壁に接して，円形土壙SK01一基を検出し，埋土中から土器・石器遺物を検出した。この土壙は，縄文時代前期の包含層を切り込んだ遺構で，造営時の旧地表面はすでに流亡し，現存しない。包含層出土の最新の遺物は彦崎Z１式だから，それ以後の造営年代をあてねばならないが，埋土から出土する遺物が縄文前期のものばかりであるので，彦崎Z１式をあまり下らない時期の遺構とみられる。G２区の基底礫上面高は，472.70mである。

出土遺物の数量は，土壙から土器８点，石器

遺物13点，第２層から土器５点，石器遺物14点，第３層から土器１点，石器遺物７点であった。

Ｇ３区　Ｇ３区の堆積土は大勢としてＧ１区，Ｇ２区と同じであるが，黒褐色土を欠落し，遺物包含層は耕土直下の赤褐色土の１層であった。包含層の層厚は0.05mと薄く，出土遺物もわずか３点であった。Ｇ１区，Ｇ２区の第４層はこの区で尖滅し，下に黄褐色砂礫／暗黒褐色砂礫の２層が堆積して基底礫上面となる。基底礫の上面高は，473.20mである。



第23図　Ｇ２区の遺物分布（1/30）

Ｇ４区　もっとも川方に設けた調査区で，Ｇ１区，Ｇ２区とは現地表でちょうど１ｍ低い位置にあたる。層厚0.1mの赤褐色土を剝がすと河床礫となる。遺物包含層は，この赤褐色土で，平面的には散在状態で遺物が出土した。ほんらいの遺物包含層は流亡しており，営田に伴って周辺から採土してかぶせた土とみられる。基底礫上面の標高は，473.20m。土器１点，石器遺物４点が出土した。

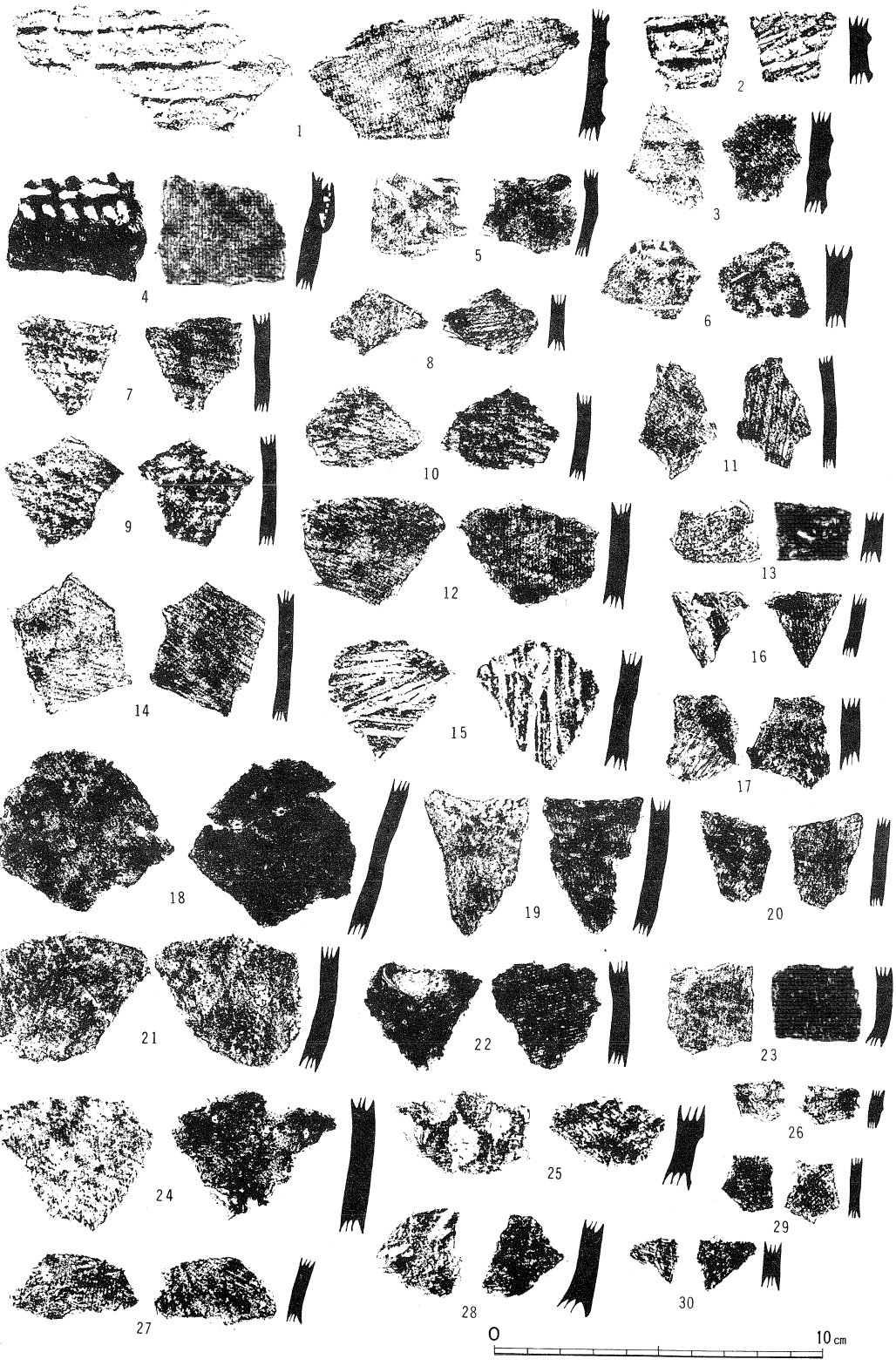
2.　縄文土器

縄文土器の概略　今回の調査における縄文土器の出土総数は79点であり，調査区別の内訳をみるとＧ１区から64点，Ｇ２区から14点，Ｇ３区からは出土なし，Ｇ４区からはわずかに１点だけ出土している。ほかに表採資料として12点を取り上げ掲載する。

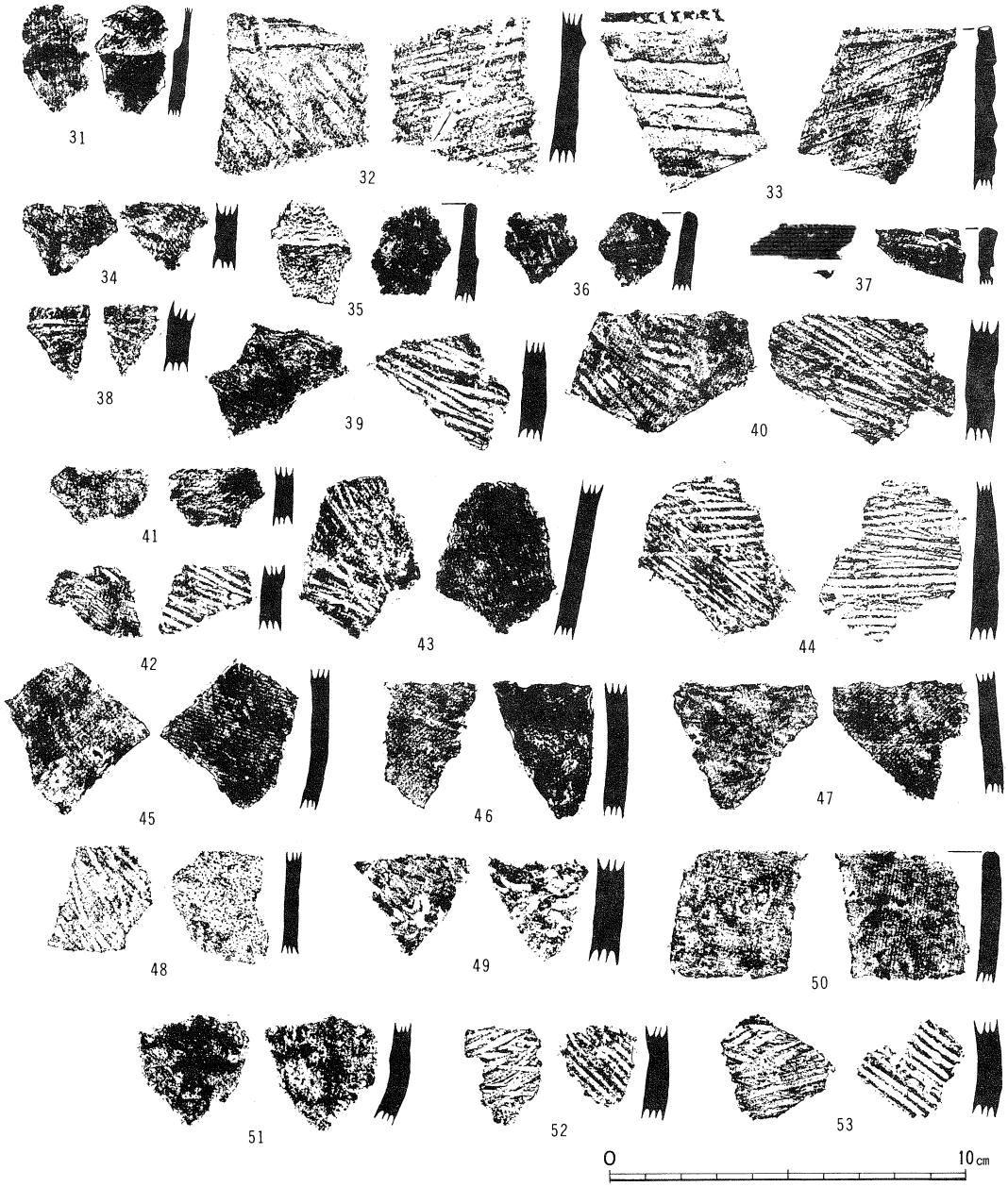
縄文土器の包含層は，まずＧ１区では第２層（暗赤褐色粘質土），第３層（黒褐色粘質土），第５層（暗褐色砂礫土）である。Ｇ２区では第２層（暗赤褐色粘質土），第３層（黒褐色粘質土）が包含層である。Ｇ４区の土器は，表採資料のため出土層位は不明である。Ｇ１区の第４層（黄褐色土）下部から２点の土器が出土しているが，これらの土器は第５層出土の土器に類似しており，ここでは第５層と同種のものとして扱う。

層位的には，Ｇ１区をみる限り，明確な間層（第４層）をはさんで，早期的な特徴を示す土器と前期的特徴を示す土器の包含層が分離できる。また，１点のみであるが，表採資料として中期初頭の土器が検出されている。しかし中期の土器を単純に包含する堆積層はＧ１～Ｇ４区を通じて検出できなかった。

出土土器は，すべて小破片で，原形を復原するには致っていない。そのうち，口縁部を残す



第24図　Ｇ１区第２層出土の縄文土器



第25図　G１区第３層出土の縄文土器（生物痕跡穴；48～53）

ものはわずかに10点（うち表採３点）のみで，口縁部に近いもの，あるいは胴部の破片が大半を占める。文様の判別できるものは19点（うち表採６点）あり，残りのものは条痕調整を施した土器か，無文様の土器である。

今回の報告は，土器の型式学的特徴とその出土層位の観点から，早期と前期の土器に二大別し，前期の土器をさらに文様，調整法，施文方法の違いについて観察し，分類を試みた。その結果は別表に示すが，拓本は各調査区ごとに上層から下層へと図示してある（第２表）。

第2表　縄文土器の分類

時期	分類			土器番号
早期				(第25図－51)(第26図－54～64)
前期	Ⅰ類・轟B式系統土器	A種　隆起線文の断面三角形が鋭く，大きなもの		(第28図－1～2)
		B種　隆起線文の断面三角形が鋭く，小さなもの		(第25図－33)
		C種　隆起線文の断面三角形が鋭く，やや小さなもの		(第24図－1～3・7・9・10)(第25図－32)
		D種　隆起線文の断面三角形が四角形のもの		(第28図－3・9)
	Ⅱ類・月崎下層Ⅰ式系統土器			(第24図－6)
	Ⅲ類・羽島下層Ⅰ式系統土器			(第24図－4・5・23)
	Ⅳ類・彦崎Z1式系統土器			(第24図－5・23)(第25図－37)(第28図－4・5)
	Ⅴ類・条痕文系土器	A種　表裏面とも条痕調整のもの	①　条痕調整が深く，粗いもの	(第24図－15)(第27図－1～3・7)(第28図－6)
			②　条痕調整が浅く，細かいもの	(第24図－11・12)(第25図－39・40・42・44・52・53)(第28図－8・10・11)
		B種　表面のみ条痕調整のもの		(第25図－38・43)
		C種　裏面のみ条痕調整のもの		(第24図－8・14・18・26)(第25図－34)(第27図－6)(第28図－7)
		D種　表裏面とも条痕調整のないもの		(第24図－13・16・17・19～22・24・25・27～30)(第25図－31・35・36・41・45～50)(第27図－4・5・8～12)
中期				(第28図－12)

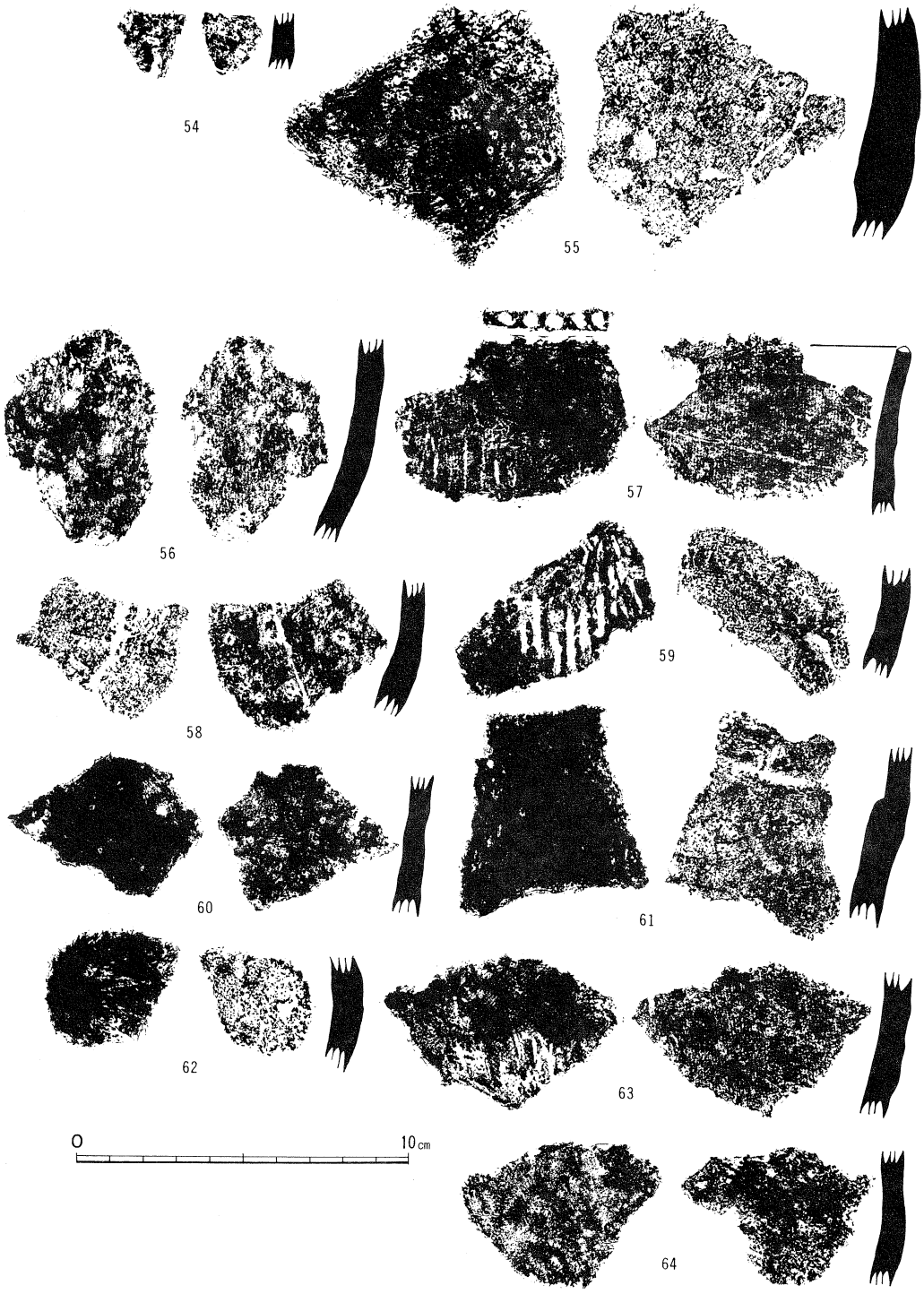
早期の土器（第25図51，第26図54～64）　54・62は表裏面とも磨滅が著しく，調整は不明である。55は裏面がナデ調整で指圧痕がみられ，表面は磨滅が著しい。いずれも胎土に長石，石英を多量にふくむ厚手の土器である。51・56は，裏面が黒く炭化したやや厚手の土器で，いずれも表裏面の調整は磨滅のため不明である。51には指圧痕が認められる。63の表面にわずかに認められる縦位のスジは，撚糸文の可能性をもっているが，磨滅のため確言できない。裏面は煤が付着する。57は口縁部に深い刻み目をもち，表裏面ともナデ調整である。表面は縦位の撚糸文の可能性をもつ施文が認められる。器壁の内部は炭化し，表裏面とも煤が付着したやや厚手の土器である。59は表面に文様の密な無節の撚糸文が縦位に施されている。裏面はナデ調整で指圧痕が認められ，全面に煤が付着する。裏面を観察する限りでは微量の繊維が混入されている可能性がある。61の表面にも縦位に施文された撚糸文の可能性をもつ文様が認められるが，磨滅が著しいために詳細は不明である。表面を観察する限り，胎土に微量の繊維を含んでいる可能性がある。58・60・64は厚さ中程度，繊維の混入があり，外面には指圧痕による凹凸がみられる。

前期Ⅰ類（第24図1～3・7・9・10，第25図33，第28図1～3・9）　轟B式系統の土器で，つぎの4種に分類できる。

A種　隆起線文の断面三角形が鋭く，大きなもの（第28図1・2）。

1・2とも表面の隆起線文（ミミズ腫れ状）の断面三角形がほかのものに比べて鋭く，大きなものである。1は2条の平行した隆起線文下に1条の弧状の隆起線文を施している。いずれも裏面は横位の条痕調整である。器厚はやや厚手で，外反する口縁をもつ。

B種　隆起線文の断面三角形が鋭く，小さなもの（第25図33）。



第26図　G 1 区下層出土の縄文土器（第 4 層;54・55, 第 5 層;56～64）

33は表面の隆起線文の断面三角形が小さく，細く，ほかの轟B式系統の土器とは違った施文方法を示している。口唇部には棒状工具による刺突文が施されている。裏面には左下がりの条痕調整のあと，口唇部下に1条の凹線が走っている。直口の口縁断面をもち，色調は赤褐色・器面に煤が付着する。

C種　隆起線文の断面三角形が鈍く，やや小さなもの（第24図1～3・7・9・10，第25図32）。

いずれも表面に断面三角形の鈍い隆起線文を施し，裏面には横位の浅い条痕調整が認められる。32は表面の隆起線文の下に浅い条痕調整が施され，また1・3・32の胎土には金雲母が含まれている。7・9・10は同一個体と思われ，表裏面とも磨滅が著しく，わずかにミミズ腫れ状の隆起線文を施すのみである。いずれも表裏面には多量の煤が付着している。

D種　隆起線文の断面が四角形のもの（第28図3・9）。

ミミズ腫れ状隆起線文ではなく，細隆起線文を貼り付けている。3つの表面の隆起線文の断面形は四角形で，隆起線文間の幅が狭く施文されている。9は表裏面ともヘラ状工具によって磨かれている。いずれもやや厚手の土器で同一個体と思われる。

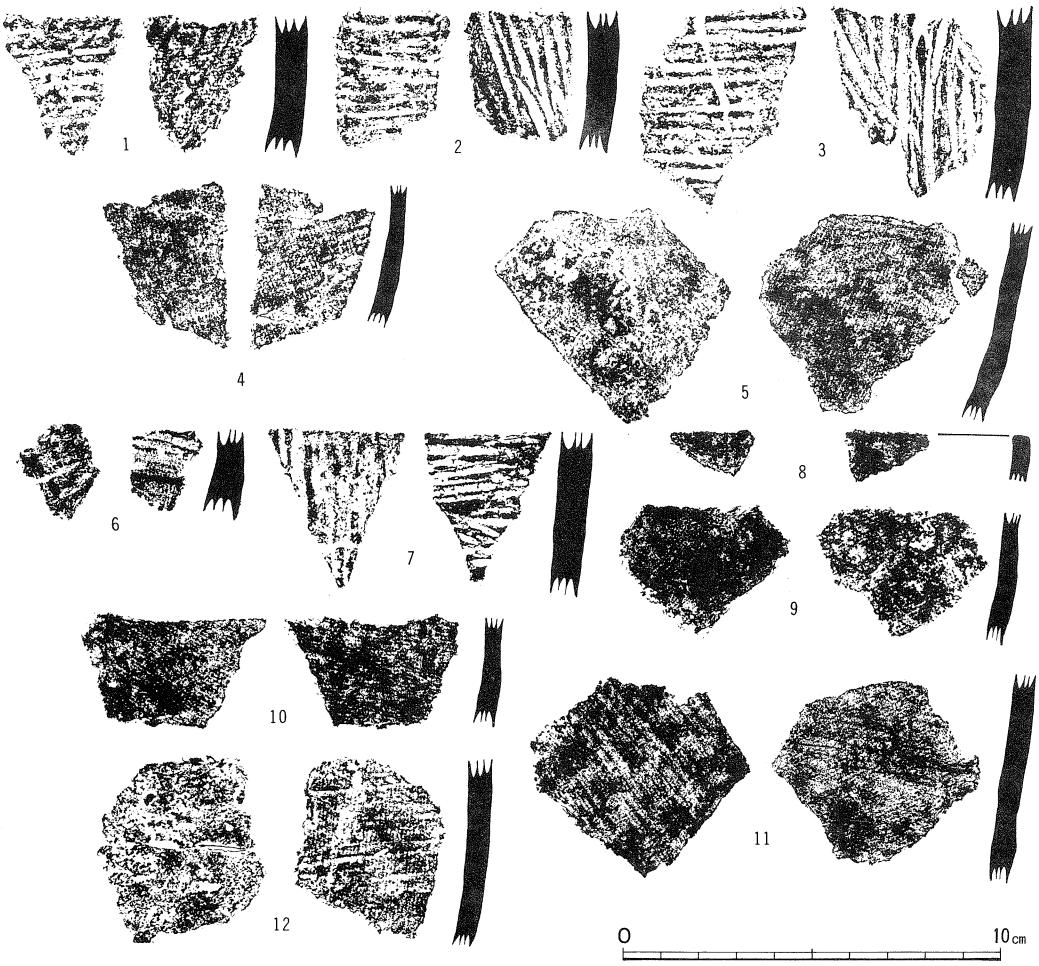
前期Ⅱ類（第24図6）　月崎下層Ⅰ式系統土器。表面の隆起線文の断面三角形が鈍く，小さく，かつ刻み目をもっている。表裏面の調整は磨滅が著しく不明である。隆起線文に刻み目をつけたものは轟B式土器のなかにも若干見られ，その影響を多分に受けたものと考えられる。

前期Ⅲ類（第24図4）　羽島下層Ⅰ式系統土器。表面に半截竹管状工具によって3段の刺突文が施されている。中段の刺突は左から右へ押し引かれ，また上下段は右下から左上へ刺突されている。刺突文の下には浅い横位の条痕調整を施し，その後刺突文の上に縦位置の突帯文を貼り付けている。裏面は条痕調整のあとナデており，表裏面とも煤が付着した，やや薄手の土器である。

前期Ⅳ類（第24図5・23，第25図37，第28図4・5）　第24図5は表面を竹管状工具によって右下から左上へ刺突している。表裏面ともナデ調整が施され，胎土が緻密な薄手の土器である。23は第24図5と同一個体と思われ，表裏面ともにナデ調整が施されている。いずれも表裏面には煤が付着し，胎土には金雲母が含まれている。37の表面には左から右への竹管状工具による押し引き文が施されている。地文は表裏面ともナデ調整された薄手の土器で，煤が付着する。4の表面には左から右への竹管状工具による押し引き文が施され，地文は表裏面ともナデ調整で，胎土に金雲母を含んでいる。表面に煤を付着させた薄手の土器である。第28図5の表面には2本の竹管状工具を重ねた右から左への押し引き文が施される。地文の調整は，磨滅が著しいため不明である。胎土に金雲母を含んだ薄手の土器である。

前期Ⅴ類　装飾のない土器片をⅤ類として扱った。A，B，C，Dの4種に分類できる。

A種は，表裏面とも条痕調整のもの。A1種は粗く，深い条痕，A2種は細かく，浅い条痕



第27図　Ｇ２区(1～11)とＧ４区(12)出土の縄文土器

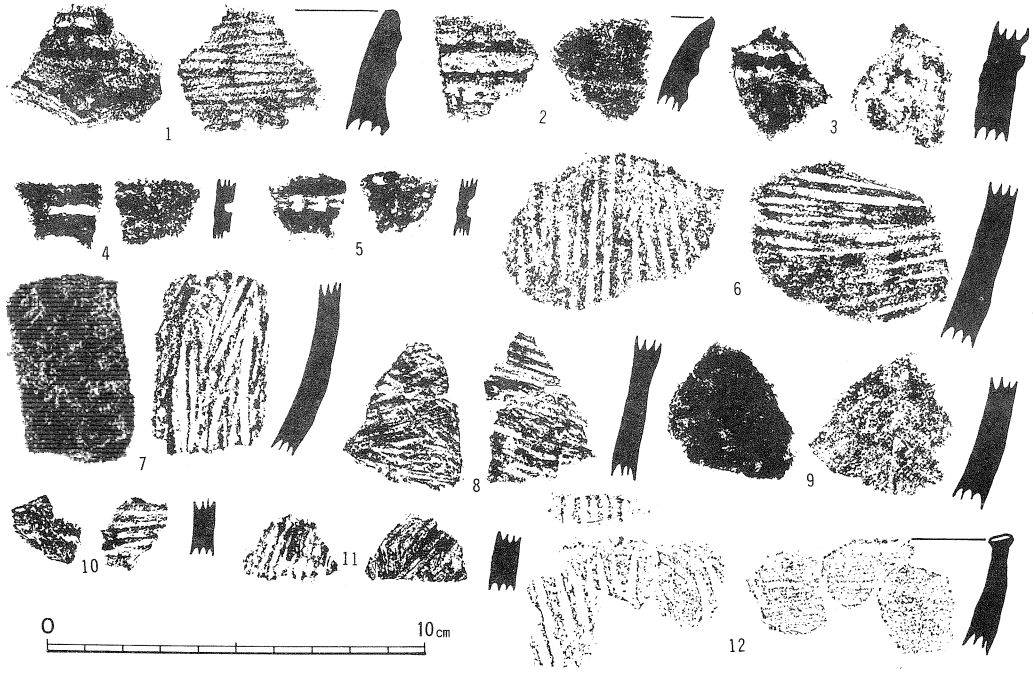
を意味する。

Ａ１種　粗く，深い条痕（第24図15，第27図１～３・７，第28図６）。

15の表面には横位の条痕調整のあと，右上への条痕調整をおこなった切り合いが見られる。裏面は縦位の条痕調整である。１～３の表面は横位の条痕調整を施し，裏面は縦位の条痕調整をしている。１・３は表裏面に，２は表面に煤が付着している。Ⅴ類Ａ１種は，いずれもやや厚手の土器である。

Ａ２種　細かく，浅い条痕（第24図11・12，第25図39・40・42・44・52・53，第28図８・10・11）。

第24図11は表面が右上，裏面が縦位の条痕調整である。12は表裏面とも横位の条痕調整である。



第28図　表面採集にかかる縄文土器

ともに胎土には金雲母を含み，表面には煤が付着する。39は表面が横位，裏面が右下への条痕調整を施している。８・40・42は，表面に横位条痕調整のあと右下への切り合いが見られる。裏面は右下への条痕調整である。40は表裏面に，42は裏面に煤が付着する。10・44の表面は横位条痕調整のあと，右下への切り合いが見られる。裏面は横位の条痕調整である。44は裏面に煤が付着する。第28図11は表面が縦位，裏面が縦位のあと右上へ条痕調整している。52の表面は，右上のあと横位に調整されている。裏面は右下への条痕調整である。53の表面は，横位のあと右下への条痕調整である。裏面は52と同様な施文具による条痕調整である。52・53は同一個体と思われ，ともに裏面に煤を付着させている。Ⅴ類Ａ２種は，いずれもやや薄手の土器である。

Ｂ種　表面のみ条痕調整のもの（第25図38・43）。

38は表面が横位の条痕調整，裏面は磨滅が著しく不明である。43は表面が条痕調整に，横位のあと右下への切り合いが見られる。裏面はナデ調整である。38は表面に，43は裏面に煤が付着している。

Ｃ種　裏面のみ条痕調整のもの（第24図８・14・18・26，第25図34，第27図６，第28図７）。

７・８・18・34の表面はいずれもナデ調整である。７の表面には，深く粗い条痕調整が施されている。８・18・34の表面には条痕調整が横位に施されているが，いずれも浅く不明瞭である。

第３表　縄文土器の観察表

Ｇ１区

挿図番号	出土地点	出土高（m）	条痕	摩滅	金雲母	煤	器厚（㎜）	分類（時期）	備考
第24図1	第２層	473.85 473.97	裏		○		4.5	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
2	第２層	473.94 473.96	裏				4.5	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
3	第２層	474.02	裏	○			6	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
4	第２層	474.00				○	5	Ⅲ（前期）	表面に刺突文・縦位の突帯文を施す
5	第２層	474.04			○	○	3.5	Ⅲ（前期）	表面に刺突文を施す
6	第2/3層	－		○	○	○	6	Ⅱ（前期）	表面に横位の刻目突帯文を施す
7	第２層	473.92	裏	○		○	4	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
8	第２層	474.02	裏				5.5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
9	第２層	473.92	裏	○		○	4	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
10	第２層	473.92	裏	○		○	4.5	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
11	第２層	473.89	表・裏		○	○	4	Ⅴ－A2（前期）	
12	第２層	473.93	表・裏		○	○	6	Ⅴ－A2（前期）	
13	第２層	474.01					4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
14	第２層	474.02	裏				5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
15	第２層	474.035	表・裏				6.5	Ⅴ－A1（前期）	
16	第２層	473.99			○		3.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
17	第２層	473.96		○	○	○	5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
18	第２層	473.92 473.97	裏		○	○	4.5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
19	第２層	474.01		○			5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
20	第２層	473.93			○		4	Ⅴ－Ｄ（前期）	
21	第２層	474.03				○	5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
22	第２層	473.97				○	5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
23	第２層	473.96			○	○	3.5	Ⅲ（前期）	
24	第２層	474.065			○	○	8	Ⅴ－Ｄ（前期）	
25	第２層	473.92		○		○	7.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
26	第２層	473.98	裏	○			3.5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
27	第２層	473.96			○		5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
28	第２層	473.01 473.94					7.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
29	第２層	473.92			○		3	Ⅴ－Ｄ（前期）	
30	第２層	474.01		○	○	○	4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
第25図31	第３層	473.93 473.94				○	4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
32	第３層	473.89	裏				5.5	Ⅰ－Ｃ（前期）	表面に隆起線文を施す
33	第３層	473.94	裏			○	5	Ⅰ－Ｂ（前期）	表面に隆起線文を施す
34	第３層	473.91	裏				5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
35	第３層	473.91		○	○	○	5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
36	第３層	473.86					4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	表面に横位の押引文を施す
37	第３層	473.869				○	4	Ⅳ（前期）	
38	第３層	473.824	表		○	○	7	Ⅴ－Ｂ（前期）	
39	第３層	473.82	表・裏				6	Ⅴ－A2（前期）	
40	第３層	473.792	表・裏			○	7	Ⅴ－A2（前期）	
41	第３層	473.92				○	5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
42	第３層	－	表・裏			○	6	Ⅴ－A2（前期）	
43	第３層	473.87	表			○	6	Ⅴ－Ｂ（前期）	
44	第３層	473.838	表・裏			○	6.5	Ⅴ－A2（前期）	
45	第３層	473.89				○	5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
46	第３層	473.846				○	5.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
47	第３層	473.93 473.94			○	○	4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
48	第３層	－			○	○	4	Ⅴ－Ｄ（前期）	
49	第3・4層の漸移土	－		○			7.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
50	テストピット	－				○	4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
51	Ｐ－７	－		○		○	5	（早期）	Ｐは生物痕跡番号
52	Ｐ－５	－	表・裏			○	7	Ⅴ－A2（前期）	
53	Ｐ－５	－	表・裏			○	7	Ⅴ－A2（前期）	
第26図54	第４層	473.44		○			5.5	（早期）	
55	第４層	473.38		○		○	11	（早期）	
56	第５層	473.32		○			7	（早期）	
57	第５層	473.37				○	7	（早期）	表面に縦位の撚糸文（？）を施す
58	第５層	473.33		○		○	8	（早期）	
59	第５層	473.36		○		○	8	（早期）	表面に縦位の撚糸文（？）を施す。繊維混入の可能性あり
60	第５層	473.32		○		○	8	（早期）	
61	第５層	473.38		○			10.5	（早期）	表面に縦位の撚糸文（？）を施す。繊維混入の可能性あり
62	第５層	473.37		○			10.5	（早期）	
63	第５層	473.40		○		○	8	（早期）	表面に撚糸文（？）を施す。
64	第５層	473.33		○		○	7	（早期）	

Ｇ２区，Ｇ４区

挿図番号	出土地点	出土高（m）	条痕	摩滅	金雲母	煤	器厚（㎜）	分類（時期）	備考
第27図1	Ｇ－２第２層	474.081	表・裏			○	7.5	Ⅴ－A1（前期）	
2	Ｇ－２第２層	474.051	表・裏			○	8	Ⅴ－A1（前期）	
3	Ｇ－２第２層	474.081	表・裏			○	8	Ⅴ－A1（前期）	
4	Ｇ－２第２層	474.021 474.041			○	○	4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
5	Ｇ－２第２層	474.021 474.041			○	○	5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
6	Ｇ－２第２層	473.841	裏				8.5	Ⅴ－Ｃ（前期）	
7	Ｇ－２第２層	473.971 473.991					7.5	Ⅴ－A1（前期）	
8	Ｇ－２第２層	474.061 474.071			○	○	4	Ⅴ－Ｄ（前期）	
9	Ｇ－２第２層	474.061 474.071			○		5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
10	Ｇ－２第２層	473.971 473.991			○		4.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
11	Ｇ－２第３層	473.94			○	○	5	Ⅴ－Ｄ（前期）	
12	Ｇ－４表採	－			○		6.5	Ⅴ－Ｄ（前期）	

表面採集

挿図番号	出土地点	出土高（m）	条痕	摩滅	金雲母	煤	器厚（㎜）	分類（時期）	備考
第28図1			裏				8	Ⅰ－A（前期）	表面に隆起線文を施す
2			裏				6	Ⅰ－A（前期）	表面に隆起線文を施す
3							7	Ⅰ－Ｄ（前期）	表面に隆起線文を施す
4					○		5	Ⅳ（前期）	表面に押引文を施す
5				○	○		5	Ⅳ（前期）	表面に押引文を施す
6							8	Ⅴ－A1（前期）	
7			裏			○	6	Ⅴ－Ｃ（前期）	
8			表・裏				6	Ⅴ－A2（前期）	
9							8	Ⅰ－Ｄ（前期）	
10			表・裏				5.5	Ⅴ－A2（前期）	
11			表・裏				6	Ⅴ－A2（前期）	
12			裏		○		7	（中期）	表面に無節縄文・口縁部に刻目を施す

18の胎土には金雲母が含まれている。14の表面には横位の条痕調整のあと，ナデ調整が施されている。裏面は右下への条痕調整である。6・26の表面は磨滅が著しく調整は不明である。6は裏面に横位の条痕調整を施したやや厚手の土器であり，26も裏面に横位の条痕調整を施したやや薄手の土器である。6・7は裏面に，18は表面に煤が付着する。

D種　表裏面とも条痕調整のないもの（第24図13・16・17・19～22・24・25・27～30，第25図31・35・36・41・45～50，第27図4・5・8～12）。

19・35の表面はともにナデ調整であり，裏面は磨滅が著しく調整不明である。35の胎土には，金雲母が含まれている。いずれも表面に煤を付着させた，やや薄手の土器である。27・48の裏面はナデ調整である。27は表面に横位の条痕調整のあと，ナデ調整を施した薄手の土器である。48の表面には右下への条痕調整のあと，ナデ調整が施される。胎土に金雲母を含んだ，薄手の土器である。48は裏面に煤が付着している。4・5・8～11は表裏面とも条痕調整のあと，ナデ調整を施している。4・5・8～11は胎土に金雲母を含む薄手の土器で，同一個体とみられる。いずれも表面に煤が付着する。12は表面がナデ調整，裏面は条痕調整のあとナデ調整によって条痕を消している。器壁に鉄分が付着した，やや厚手の土器である。17・25・30・49はいずれも表裏面の磨滅が著しく，調整の不明な土器である。17の胎土には金雲母が含まれており，また17・25・30の表面には煤が付着している。残りの土器は表裏面ともにナデ調整を施した無文土器である。28は底部近くの破片で，平底の様相を示している。また35・36・50は，直口した口縁部の破片であり，16・20・24・29は胎土に金雲母を含み，うち20・29は同一個体と思われる。21・22・24・31・41・46・47・50は表面に，35・45は裏面に煤が付着する。

中期の土器（第28図12）　表面には縄文が縦方向に走り，裏面は条痕調整をしている。口唇部は平坦気味に肥厚させ，刻み目が施される。これは，山陽地方の中期初頭の船元Ⅰ式土器H類とみられる。

縄文土器の型式比較　今回調査した新槇原遺跡の縄文土器を，上記のごとく分類してみた。早期の土器は，おもに第5層から出土しており，前期の土器とは良好な分層状態で把握できる。早期の土器が，はたして単純な型式なのか，早期でも時間幅を見込まねばならない複数型式なのか，資料が少なく，磨滅しているのでよく判らない。西日本の早期の土器として顕著な存在である押型文土器が，新槇原遺跡にないため，土器の比較は困難がともなう。しかし一部に撚糸文らしくみえ，また繊維混入の可能性がある資料は，最近公刊された鳥取県上福万遺跡の早期土器と比較できるであろう。上福万遺跡の撚糸文土器は，時期的には高山寺式，田村式併行として早期中葉以降に位置づけられている。これに対し繊維の混入のはっきりしない厚手の無文土器は，古くみつもれば黄島式に共伴する無文土器の可能性がある。さらに一部の早期無文土器が，例えば広島県馬渡岩陰遺跡の第Ⅳ層で検出された黄島式以前の無文土器と比較できる

可能性も全くなくはないが，資料がいずれにせよ少ないため，確言できない。

前期の土器は，第2，第3層から出土した。文様から既成の型式と比較しえたのは，轟B式，月崎下層Ⅰ式，羽島下層Ⅰ式，彦崎Z 1式である。新槇原遺跡で出土した轟B式の隆起線文はA～Dの4種に分けられるが，これが時期差を示すかどうかは，判らなかった。山口県月崎遺跡を標式遺跡とする月崎下層Ⅰ式土器は，隆起線文に刻み目を付けるもので，本遺跡で1点だけ検出されたが，島根県後谷遺跡，広島県帝釈峡観音洞洞窟遺跡などで類例が認められる。これは轟B式土器の影響を受けたものと推定され，時期的には轟B式土器併行と考えてよいであろう。羽島下層式と認定した土器は，鎌本義昌の提唱した羽島下層Ⅰ式に比較できるもので，轟B式との共伴関係は広島県帝釈峡観音洞洞窟遺跡，島根県後谷遺跡，山口県月崎遺跡においても認められている。ほかに，前期では時期的に後出とされる彦崎Z 1式土器が検出された。

前期Ⅴ類の条痕文土器は，以上の有文土器に伴ったとみられるが，島根県佐太講武貝塚では条痕調整の土器が単純に出土したという。佐太講武貝塚は前期初頭に位置づけられているので，新槇原遺跡の前期の土器は，要するに前期でも前半の所産と見なしてよい。

船元Ⅰ式土器が1点表採されているが，中期の包含層は，耕作による削平か，浸蝕によって河川側に流されてしまったものと推測される。

◇ 参考文献

鎌木義昌・木村幹夫：「各地域の縄文土器－中国」『日本考古学講座3　縄文文化』
河出書房　1956年

間壁忠彦・潮見　浩：「縄文文化の発展と地域性－山陰・中国山地」
『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』
河出書房　1965年

鎌木義昌・高橋　護：「縄文文化の発展と地域性－瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』
河出書房　1965年

乙益重隆：「縄文文化の発展と地域性－九州 西北部」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』
河出書房　1965年

赤木三郎・長岡・太田ほか：「上福万遺跡の調査」
『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』
財団法人 鳥取県教育文化財団　1985年

宍道正年：「島根県の縄文土器の研究－編年を中心として」『松江考古3』
松江考古学談話会　1980年

宍道正年：『島根県の縄文土器集成Ⅰ』　1974年

河瀬正利ほか：『横道遺跡－詳細分布調査報告』
島根県邑智郡瑞穂町教育委員会　1983年

間壁忠彦・間壁葭子：『里木貝塚』　倉敷考古館研究集報第7号　1971年

藤田憲司・間壁葭子・間壁忠彦：「羽島貝塚の資料」　倉敷考古館集報第11号　1975年

大平　要・広瀬永津子ほか：『考古資料収蔵目録1　縄文時代編・図版解説付』
瀬戸内海歴史民俗資料館　1979年

網谷克彦：「前期の土器－北白川下層式」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』
雄山閣　1981年
松崎寿和：『帝釈峡洞窟遺跡－発掘調査19年の軌跡』　亜紀書房　1980年
中越利夫：「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」
帝釈峡遺跡群発掘調査年報Ⅷ，広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室　1984年
潮見　浩：「本州西端地域の縄文前期土器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』　1980年
「月崎遺跡」『宇部の遺跡』
宇部市域遺跡群学術調査団・宇部市・宇部市教育委員会　1968年
高橋慎二：「美濃ケ浜遺跡」『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』
周陽考古学研究所　1978年
前島高雄：「黒島浜遺跡」『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』
周陽考古学研究所　1978年
福本幸夫・金子佳孝ほか：『黒島浜遺跡』
山口県柳井市黒島浜遺跡調査概報，柳井市教育委員会　1977年

早期の土器の鑑定については，山口大学河村吉行先生を介して，広島大学潮見浩・中越利夫両先生のアドバイスを得ることができた。誤認している箇所があるかもしれないが，以上の先生方に深謝する次第です。

（定池　博之）

3. 石器遺物

はじめに　石器遺物については，器面の拡大システムを持ち合せないこと，実験的経験にとぼしいことから，肉眼による精度のたかい方法として技術型態論の立場から観察，記述を試みようとおもう。石器遺物に対して技術型態論を保持する第二の理由は，純粋に論理的なもので，生産物の型態の企画性は製作意図に意識された型態の技術を通じての表現であることによる。この公準は，型態，機能，技術が観念に統合されていることから導き出せる。石器は土器と違って，環境に対する中立性が著しく劣るから型態規定の要因は複雑だが，技術だけが知の産物であって，観念の変化もしくは進化と連動する件は，決定的に重要な意義をもつ。ここに技術型態論が人間そのものを把える目的性がある。この立場は，石から人間の手による石器の存在を最初に認めた瞬間から始まっており，もともと実証する科学には純粋な型態論や技術論，機能論はありえないのである。

ところで，どんなに複雑にみえる打製石器でも，その作出は身体技法のうちもっとも単純な加撃からなるので，わずか一枚の剝離面に還元してとらえることができる。それ以下では遺物である認定ができないから，これは自明の理とおもうかもしれないが，器面を単純な一枚の剝離面に置き換える作業はたいへん難行した。ある部分はいまだもって判らない。原因は，主材の安山岩が石の目とからみあって，等質な剝離面を生産しないことによる。試みにこの石材を一撃すれば判るが，メクレタように割れ，単一の加撃で複数の剝離面が頻発する。この現象は，サヌカイト製打製石器について観察した松田順一郎の指摘を含んでいる。(1) すなわち，ハンマーがあたったところに生ずる剝離や潰れ，主剝離面のバルブにくい込んで生じる微小な剝離痕がそれである。ただし松田がほかに指摘する「打点以外のところから剝離が始まる」驚くべき事例は，主打撃が2回なされた二重バルブをもつ剝片として扱おうと思う。

以上は基端に生ずる複雑な剝離面の例だが，先端もしばしば複雑な剝離面となる。単一の加撃の衝撃波が先端にぬけるとき，力の円錐が歪んで，ほんらい一枚で作出される剝離面が割れて，複数の剝離面ができたり，割れずに稜ができたりする。この剝離面は，打点折れとは違ったものである。原因は，材の不均質，衝撃力と材の加重の相互作用，さらに加撃直後に剝片が石核に接触して折れることなどが思い浮ぶが，技術型態論の立場からは意図した剝離とは違うので，剝離事故として扱う必要がある。しかし遺物となった資料から，意図した剝離か事故による剝離かを区別することはできないので，ここではすべて剝離事故として扱った。

石器遺物の器面観察が難しいのに対して，石器遺物の重量は容易に計測できる。石材の経済効率は，技術型態論では最初には扱わない主題であるが，意図した生産物の原価比較のために個々の石器と石核，剝片の重量を計測することとした。とくに剝離事故が頻発する石材として，

第4表　石器遺物の観察表

登録番号	挿図番号	型式回石核回剥片	出土高	遺構層位	石材	重量	摩滅度	単純最大長	単純最大幅	最大厚	最大長	最大幅	剥離軸中央部厚	完形度	中央断面形	平面形	最大厚部分	最大厚部分ののびる方向	打面の型態	打面の傾き	打面作製細部調整	打面の平面形	打面の縁部形	打点の位置	打面の幅	打面の厚さ	原面	先行剥離面数	先行剥離面の方向	稜数	稜の規則性	稜の方向	二重バルブ	バルブの発達度	先端波状隆起	波状面	線状痕	垂直ヒビ割れ	技術を示す部分	打撃による事故	深形連続細部調整	その他の細部調整	折れ面
G1区 4	第29図5	石鏃	474.05	第2層	姫島Ob	0.5	×	別表																																			
5−1	4	剥片	474.03	第2層	灰安	3.6	ややあり	37.8	30.9	4.6	29.2	25.7	2.9	ほぼ完形	多角形	五角形	11	11→14	剥離面	裏	−	三角形	直線形	中央	13.9	5.1	無	(1)	(主打撃後表面形成)	(2)	(不)	縦+斜	○	C	(×)	×	×	×	×	×	無	無	4−9↕, 9−11↕
2	2	横形剥片	474.03	第2層	黒安	1.0	×	15.3	19.2	4.8	8.9	18.3	2.9	完形	四角形	四角形	18	18→0	原面上	裏	−	三角形	直線形	右	17.6	4.8	無	2	19→9, 18→10	1	規	縦	×	B	激しい	×	×	×	×	×	無	無	×
9−1		剥片	474.01	第2層	灰安	1.1	ややあり	26.0	12.0	3.0	17.6	12.0	1.9	完形	四角形	五角形	0	0→7	剥離面	水平	−	四角形	直線形	中央	8.2	3.0	無	4	9→14, 1→11 7→11, 3→15	3	不	斜	×	C	×	×	(○)	○19→11	裏面に剥離面	×	無	無	9−11↑
2		剥片		第2層	灰安	0.5	×	15.8	13.4	3.8	15.5	11.5	1.9	完形	正三角形	四角形	11	11→7	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	3	1→9, 9→19 17→7	2	(不)	斜+横	×	C	×	○	○	×	×	×	無	無	×
13		石刃状剥片	474.02	第2層	黒安	0.4	×	19.0	8.3	3.2	19.0	8.3	3.2	完形	二等辺三角形	部分円形	14	19→14→9	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	1?	19→9	0?	規	縦		C	×	×	○	○19→9 =9→7	台石上	×	無	無	×
15			474.01	第2層	黒曜石?	供出																																					
16			474.02	第2層	黒曜石?	供出																																					
17	6	石鏃	474.01	第2層	黒安	0.7	×	別表																																			
18		横形剥片	474.02	第2層	灰安	0.1	×	16.8	10.8	2.2	9.6	10.2	1.3	完形	二等辺三角形	部分円形	19	1←19→14	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	1	7→17	(1)	不	斜	×	×	×	×	×	×	×	×	細部調整剥片	弧	×
25−2		剥片	473.99	第2層	灰安	0.6	×	15.2	13.0	3.7	11.5	10.4	3.4	基端	四角形	四角形	14	9←14	原面上	水平	−	四角形	直線形	右	4.9	1.9	無	3	1→14, 7→17 17→7	3(叉)	不	斜	×	C	(×)	×	×	×	裏面に剥離面	×	無	無	9−14↖(ねじれ)
42	12	石鏃	473.95	第3層	灰安	1.8	別表																																				
43	8	横形剥片	474.02	第2層?	黒安	0.7	×	14.9	14.7	3.8	13.6	14.7	3.8	基端	正三角形	四角形	0	19←0→9	二面剥離	表	−	三角形	直線形	中央	11.0	2.6	無	3	1→7, 7→17 17→11	2(叉)	不	縦+横	×	C	−	×	×	×	×	×	無	無	7−11❢
45	3	剥片	473.84	第3層	灰安	3.8	激しい	38.6	24.4	7.0	35.6	21.6	6.9	完形	四角形	部分円形	19	19→9	二面剥離	表	−	三角形	凹形	左	22.1	4.6	無	1		0	?	?	○	A	○	×	○	○19→9	×	×	無	無	×
51	11	横形剥片	473.78	第3層	黒安	0.5	×	12.9	19.7	6.2	8.9	16.4	2.4	先端	四角形	六角形	4	4→14	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	10→5, 14→1	2	不	縦	−	×	×	×	×	○?	裏面先端に先行剥離面	×	無	無	4−14↑
97	10	横形剥片		第3層?	黒安	0.9	×	21.0	12.8	5.0	12.0	12.8	4.4	完形	正三角形	部分円形	0	19←0→9	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	1?	19→9	0	−	−		C	激しい	×	○	○19→9	台石上	×	無	無	×
99	9	横形剥片		第3層?	黒安	0.1	×	14.9	15.0	2.7	10.4	14.0	1.8	右縁	四角形	六角形	19	19→4	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	3	19→11, 19→4 7→17	3(叉)	不	斜	×	A	×	○	○	○19→14	×	×	無	無	9−14↕
101	13	石刃状剥片	472.90	第7層	灰安	4.9	ややあり	42.2	10.5	12.0	39.8	10.5	9.4	完形	四角形	四角形	14	19←14→9	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	3	7→17, 11→1	3(叉)	不	斜	×	A	×	○	○	○19→9	×	×	無	無	7−11❢
	1	横形剥片		第2層	黒安	1.5	×	23.9	16.0	3.9	15.7	23.1	2.8	ほぼ完形	四角形	四角形	4	4→14	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	1		0	不	縦	−	−	×	○	×	?	×	×	細部調整剥離	無	1−7↕
		剥片		第2層	黒安	1.4	ややあり	20.8	17.1	4.2	18.7	15.4	3.9	ほぼ完形	四角形	五角形	0	0→4	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	3	9→19, 4→14 1→11	3(叉)	不	斜+横	−	−	×	×	○	×	×	×	無	無	17→11
		剥片		第2層	黒安	0.4	×	14.0	10.8	3.8	12.7	10.3	3.5	完形	不等辺三角形	六角形	0	9←0→17	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	(3)	19→9, 19→7, 9→19	3(叉)	不	縦+横		×	×	×	○	×	台石上	先端ヒンジ	無	無	×
		剥片		第2層	黒安	0.5	×	16.5	11.9	1.9	16.5	11.9	1.3	中央	四角形	五角形	11	11→1	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	6→15	1	不	斜	×	×	×	×	×	×	×	×	無	無	1−17↕, 7−11↕
		剥片		第2層	黒安	0.2	×	13.2	7.0	2.6	12.0	6.0	1.7	基端	不等辺三角形	四角形	4	4→19	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	2/3	2	7→17, 17→7	2	不	斜	−	−	−	−	○	○19→4	×	×	無	無	4−9↑, 9−14❢
		横形剥片		第6層	黒安	1.8	ややあり	24.7	17.1	5.0	16.1	23.3	4.1	完形	不等辺三角形	四角形	0	7←0→17	剥離面	裏	−	三角形	直線形	中央	12.7	2.8	1/3	4	1→7, 19→9 20→9, 17→7	5(叉)	不	縦+横	×	B	○	○	○	×	×	×	無	無	×
	7	剥片		第6層	黒安	0.7	×	22.1	14.2	4.2	21.9	12.4	4.2	完形	四角形	五角形	19	19→9	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	1?	19→9	0?	規	縦		C	×	×	×	○19→9	台石上	×	無	無	×
		横形剥片		第3層	隠岐Ob	0.3	×	11.5	10.0	5.0	8.8	9.4	4.4	先端	四角形	五角形	14	14→9	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	15→1, 11−1	1	不	横	−	C	×	×	○	×	×	×	無	無	1−17❢, 17→9
		横形剥片		第3層	黒安	0.2	×	11.0	12.4	2.2	8.8	12.2	1.6	中央	正三角形	四角形	19	19→9	二面剥離	裏	−	三角形	凸形	中央	11.6	2.5	無	2	7→17, 14−4	1	規	縦	×	C	×	×	○	×	×	×	無	無	7−11↕
		横形剥片		第3層	黒安	0.1	×	15.4	6.3	1.7	6.5	14.8	1.3	先端	不等辺三角形	部分円形	17	17→1	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	?	−	−	−	−	−	−	○	○	×	×	×	×	無	無	17−1(ねじれ)
G2区 1	第30図13	石鏃	474.11	第2層	黒安	0.4	あり	別表																																			
2−1		剥片	474.10	第2層	灰安	1.3	あり	24.7	14.7	5.7	20.0	14.6	4.8	完形	不等辺三角形	五角形	14	9←14→19	二面剥離	裏	−	三角形	凸形	右	11.9	3.5	1/3	3	9→11, 1→4, 4→14	3	不	縦+横	×	A	×	×	×	×	右側原面	×	無	無	×
2		剥片	474.09	第2層	灰安	0.2	×	13.3	8.2	1.9	12.4	8.9	1.4	完形	不等辺三角形	部分円形	19	19→11	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	2	7→17, 11→17	1	不	縦	×	A	×	○	×	×	×	×	無	無	×
3		剥片	474.05	第2層	灰安	0.1	×	10.5	8.6	1.2	10.5	8.6	1.0	中央	四角形	四角形	1	1→7	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	19→9, 4→14	1	不	縦	−	−	×	×	×	×	×	×	無	無	1−7↕, 17→11↕, 7−11↕
4		剥片		第2層	黒安	0.1	×	11.7	8.9	1.2	10.8	9.0	1.1	ほぼ完形	部分円形	部分円形	0	−	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	1	−	0	−	−	×	B	○	×	×	×	×	×	無	無	8−10↕
3−1	12	楔形石器	474.11	第2層	黒安	4.8	×	別表																																			
2	15	楔形石器	474.08	第2層	黒安	1.2	×	別表																																			
3		横形剥片	474.07	土壙	黒安	0.5	×	18.0	8.8	3.8	8.6	18.1	3.0	基端	台形	三角形	7	7→19	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	3	1→11, 19→7 17→7	2	不	斜	×	C	×	×	○	○19→1	×	×	無	無	4−14❢
4		剥片	474.06	土壙	黒安	0.4	×	21.7	11.0	2.6	12.4	9.8	2.0	完形	台形	四角形	0	19←0→11	点状	−	−	−	−	−	−	−	1/3	2	19→9, 17→9	2	規	縦	×	B	×	×	○	×	左側原面	×	無	無	×
5		剥片		土壙	灰安	0.2	×	12.5	8.6	2.2	12.5	8.6	1.7	完形	不等辺三角形	四角形	11	11→17	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	2	1→9, 14→4	1	不	縦	×	A	○	○	×	×	×	×	無	無	×
5	2	剥片	474.07	土壙	黒安	0.5	×	17.6	13.6	2.8	14.4	7.2	2.0	先端	不等辺三角形	四角形	9	9→19	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	3	11→1, 16→5, 4→14	3(叉)	不	縦+横	×	−	×	×	○	×	×	×	無	無	4−14↓
6	18	尖頭器	474.05	第2層	灰安	3.1	ややあり	別表																																			
9−1	11	剥片	474.10	第2層	黒安	2.2	×	27.8	20.0	5.8	26.0	17.9	4.5	完形	不等辺三角形	部分円形	19	19→9	二面調整	裏	−	三角形	直線形	右	6.4	5.6	全面	0	−	0	−	−	×	A	×	×	○	○19→9	−	×	無	無	3−5↕, 5−7↕, 7−9❢
2	16	石核	474.10	第2層	黒安	1.2	×	18.1	13.2	6.4	13.4	11.6	3.4	完形	四角形	五角形																											
10−1	5	石刃	474.04	土壙	黒安	0.8	×	25.7	9.2	5.9	25.7	9.2	4.3	ほぼ完形	正三角形	部分円形	0	19←0	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	2?	19−9?	1	規	縦		C	×	×	×	○9→11	台石上	×	無	無	×
2	7	剥片	474.03	土壙	黒安	0.7	×	22.3	13.6	3.3	17.0	11.9	1.6	ほぼ完形	不等辺三角形	四角形	0	19←0→7	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	2	19−9	1	規	縦		C	×	○	○	×	台石上	×	無	無	8−11↓
3		石刃状剥片		土壙	灰安	0.3	×	18.9	4.8	2.6	18.6	4.4	2.0	完形	不等辺三角形	三角形	7	1←7→9	点状	−	−	−	−	−	−	−	無	1	14−4	0	不	−		C	×	○	○	×	左側原面	×	無	無	×
13		横形剥片	474.01	第2層	灰安	0.7	激しい	21.0	15.7	2.1	13.8	14.9	1.7	中央	四角形	部分円形	11	11→17	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	1	−	0	不	−		−	×	×	×	×	台石上	×	無	無	7−4↕, 4−17↓
15−1	17	楔形石器	474.07	第2層	黒安	2.4	×	別表																																			
2		横形剥片	474.03	第2層	黒安	0.7	あり	17.4	11.0	4.0	10.7	12.8	2.6	左縁	四角形	三角形	4	4→11	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	1	11−1	0	−	−	×	−	×	×	○	×	左側原面	×	細部調整剥片	先端表+不	7−17↖(ねじれ)
3		剥片	474.01	第2層	灰安	0.4	×	18.0	15.8	2.1	16.7	10.9	1.7	完形	台形	部分円形	17	17→11	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	2/3	2	1→9, 17→11	2	規	縦	×	C	×	×	×	×	基端原面	×	無	無	×
17	4	剥片	473.97	土壙	黒安	20.5	ややあり	54.8	32.8	15.4	44.0	31.4	8.4	右縁	四角形	部分円形	19	−	原面上	表	−	四角形	凸形	右	32.8	15.4	無	1	−	−	−	−	×	○	○	○	○	×	右側原面	×	無	無	19→7❢
19	8	楔形石器	473.91	土壙	灰安	2.7	×	別表																																			
20	3	石核	473.90	土壙	黒安	14.7	×	45.3	33.6	11.5	−	−			多角形												無														無	無	×
21	6	横形剥片	473.89	土壙	黒安	1.0	×	19.6	14.6	4.0	13.2	19.6	3.5	完形	正三角形	部分円形	0	19←0→4	原面上	裏	−	四角形	直線形	中央	10.4	2.4	無	4	1→11, 7→17 20→10	3	不	縦+横	×	C	×	×	○	×	左側原面	先端ヒンジ	無	無	×
22		剥片	473.93	第3層	灰安	0.3	×	16.5	9.6	2.4	13.4	8.8	2.4	完形	正三角形	三角形	0	19←0→9	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	3	4→14, 17→7 11→1	3(叉)	不	縦+斜+横	×	C	×	×	×	×	×	×	無	無	×
23	10	剥片	473.93	第3層	黒安	0.6	×	22.4	13.4	2.8	22.4	13.4	2.8	基端	不等辺三角形	四角形	0	4←0→14	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	7	多方向	7	不	多方向		C	×	×	○	×	台石上か	×	無	無	4−14(ねじれ)
25	14	石鏃	473.94	第3層	黒安	0.3	ややあり	別表																																			
31	1	横形剥片	473.82	土壙	黒安	0.5	×	18.6	13.5	3.8	10.5	18.5	2.5	完形	不等辺三角形	部分円形	0	19←0→11	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	4	1→7, 4→14 8→16, 18→10	4(叉)	不	斜	×	C	×	○	×	×	×	×	細部調整剥片	無	×
32	9	石鏃	473.79	土壙	黒曜石	0.4	×	別表																																			
35−1		剥片	473.81	第3層	黒曜石	0.3	×	13.6	12.0	2.2	13.6	12.0	1.3	完形	不等辺三角形	部分円形	0	19←0→1	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	2	9→19	1	不	貝殻状	×	A	×	×	×	×	×	×	無	無	×
2		石刃状剥片	473.81	第3層	灰安	0.2	ややあり	15.6	6.7	3.0	13.0	5.9	2.1	完形	四角形	五角形	4	4→9	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	(1)	−	0	不	−		×	×	×	○	○19→4, 19→14 9→4, 9→14	台石上	×	無	無	×
36		石刃状剥片	473.84	第3層	黒安	0.1	×	14.5	4.0	2.3	14.5	4.0	2.0	完形	不等辺三角形	六角形	14	14→9	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	2	19→9, 11→4	1	不	斜		C	×	×	○	○19→14	台石上か	×	無	無	9→7
37		横形剥片		第3層	黒曜石	0.3	×	12.4	10.2	3.4	6.9	10.2	3.0	先端	正三角形	六角形	19	19→0→9	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	19→7, 11→1	1	不	縦			×	○	×	×	×	×	無	無	4→14❢
G3区 1	第31図1	直刃削器		第2層	黒安	16.1	×	51.7	38.1	12.4	41.0	38.0	8.8	ほぼ完形	不等辺三角形	四角形	19	19→11	原面上	裏	−	三角形	凸形	中央	38.1	10.8	無	3	1→7, 17→7 11→1	3(叉)	不	縦+横	○並列	C	×	×	○	×	×	×	細部調整剥片	×	17−14↑
2	2	単刃厚形削器		第2層	灰安	7.0	×	44.8	16.7	12.7	44.8	16.7	8.6	左縁	正三角形	部分円形	0	19←0→9	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	1	19→9	−	−	−	×	−	×	×	○	×	×	×	細部調整剥片	侵・不・浅	19←9
3	3	横形剥片		第2層	黒安	1.0	あり	16.6	14.8	4.0	12.2	16.9	3.9	完形	正三角形	三角形	0	?←0→17	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	2→17, 7→15	1	不	斜	×	−	×	○	×	×	×	×	細部調整剥片	不	×
G4区 1	5	横形剥片	473.12	第2層	黒曜石	1.2	×	18.1	14.5	6.7	15.7	17.4	4.8	完形	五角形	三角形	19	19→9	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	無	2	17→7, 19→9	1	則	縦	×	C	×	×	×	○19→7, 19→14	×	×	×	×	×
2	7	横形剥片	473.06	第2層	黒安	0.9	あり	24.8	11.0	3.9	10.0	22.4	2.7	先端	不等辺三角形	部分円形	1	1→7	欠損	−	−	−	−	−	−	−	無	2	7→11, 11→1	1	不	縦	×	−	×	×	×	×	×	×	細部調整剥片	×	6−12(新しい)
3	4	横形剥片	473.04	第2層	黒安	1.3	激しい	20.5	18.0	4.8	15.5	16.7	3.8	完形	不等辺三角形	部分円形	11	7←11→19	欠損	−	−	−	−	−	−	−	1/3	1	1→11	1	不	縦	×	×	×	×	×	×	×	×	細部調整剥片	×	×
4	8	横形剥片	473.06	第2層	灰安	0.5	×	24.5	11.0	2.1	9.5	24.5	1.8	基端	不等辺三角形	四角形	−	−	粉砕	−	−	−	−	−	−	−	−	1	19→9	0	−	−	×	B	−	×	×	○19→1	×	×	×	×	1→4↕, 4→14↕
5	6	剥片	473.03	第2層	黒安	3.2	×	29.5	20.8	6.8	28.4	7.7	5.5	完形	五角形	四角形	19	19←0→9	原面上	表	−	四角形	直線形	中央	6.8	8.4	無	2?	多方向	1?	−	−		C	×	×	○19→9	台石上	×	×	×		

あらかじめ予見をもってかかるときには，重量計測は重要な分析法におもえた。

山中一郎による石器研究法　新槇原遺跡の石器遺物の観察と記述にあたっては，日本の石器を技術型態論の立場から研究している山中一郎の業績に全面的に依拠した。したがって，ここでは名辞の定義と使用法を記さないので，以下の略号で呼ぶ山中の論説をご参考願いたい。

［山中´75］　「彫器研究法」（『史林』58巻3号，1975年）

［山中´76］　「掻器研究法」（『史林』59巻5号，1976年）

［山中´78］　「森の宮遺跡出土の石器について」
（難波宮址顕彰会編『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』1978年）

［山中´80］　赤沢　威・小田静夫・山中一郎（『日本の旧石器』立風書房，1980年）

［山中´82a］　「石刃」（『文化財学報』第1集，1982年）

［山中´82b］　「長原遺跡出土の石器について」
（長原調査会編『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書』初版1978年，改訂版1982年）

［山中´82c］　「石器遺物」
（財団法人大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ 1982年）

この報告は，［山中´82b］で示された「剝片研究法」を用いて，新槇原遺跡出土の石器の記録を採ろうとおもう。山中一郎の剝片研究法は，1出土スクウェア，2出土層位，3磨滅度，4単純最大長，5単純最大幅，6最大厚，7最大長，8最大幅，9バルブ部分厚さ，10剝離軸中央部厚，11完形度，12形態分類，13中央断面形，14平面形，15最大厚部分，16最大厚部分ののびる方向，17石器・石核，18打面の形態，19打面の傾き，20打面作成細部調整，21打面の平面形，22打面縁部形，23打点位置，24打撃角，25打面の幅，26打面厚，27原面，28先行剝離面数，29先行剝離面の方向，30稜数，31稜の規則性，32稜の方向，33二重バルブ，34バルブの発達度，35先端波状隆起，36波状面，37線条痕，38垂直（ヒビ）割れ，39技術を示す部分，40打撃による事故，41深形連続細部調整，42その他の細部調整，43折れ面の43項目の欄を記入することから始まる。以上の項目のうち，9バルブ部分厚さと24打撃角は正確に計測できる見込みがなかったので，除外した。ただし細部調整の角度に関しては，［山中´76］の提言にもとづき，押圧剝離法によったと思われるものを平形，切れる刃部が残るものを薄形，削りにしか使えないものを厚形，垂直に近いものを極厚形として扱うことにする。(2)

この報告は，［山中´82b］のマニュアルから判らない箇所をつぎのように処理，もしくは改変して記載した。第一の前提は，どのような様態の剝片でも，できるだけ完形とみなすことである。そうでないと10剝離軸中央部厚，13中央断面形は，統一的記述ができなくなるので，完形，先・基端の加工・被損はその場合考慮に入れないでよしとする。主打撃からの打点折れ

第5表　打製石鏃の観察表

出土地区	登録番号	挿図番号	出土層位	石材	重量(g)	基部形	基部の対称性	基部の細部調整	調整	整形	中央断面形	尖端	折損部	原面	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
G 1 区	−4	第29図5	第 2 層	黒曜石	(0.5)	極凹形	−	薄・両	両面	非極	六角形	○	基部	×	(16.8)	(14.9)	2.5
G 1 区	−17	6	第 2 層	黒安	0.7	凹形	対称	薄・両	両面	非極	両凸	○	○	×	19.9	14.8	3.7
G 1 区	−42	12	第 3 層	灰安	1.8	直線形	対称	薄・両	両面	厚・両	六角形	×	○	×	21.4	18.2	3.4
G 2 区	−32	9	土壙	黒曜石	0.4	極凹形	非対称	薄表・平裏	両面	非極・鋸	両凸	○	○	×	21.5	13.0	2.6
G 2 区	−1	13	第 2 層	黒安	(0.4)	凹形	対称？	薄・両	両面	非極	両凸	○	一角	×	13.2	(13.1)	2.9
G 2 区	−25	14	第 2 層	黒安	0.3	凹形	対称	薄・両	両面	非極	両凸	○	○	×	14.0	10.9	2.3
表採		第33図6		灰安	(0.7)	極凹形	−	薄・両	両面	非極・鋸	両凸	−	尖端・一角	×	(20.8)	(15.20)	3.6
		7		灰安	(0.6)	凹形	対称	薄表・平裏	両面	非極	両凸	−	尖端	×	(13.9)	14.4	2.5
		8		黒安	(0.9)	凹形	非対称？	薄・両	両面	非極	両凸	○	一角	×	(19.5)	13.4	4.1
				黒安	0.8	凹形	非対称	薄・両	両面	非極	両凸	◎	○	×	20.7	13.8	3.8
				黒安	0.9	凹形	非対称	薄・両	両面	非極	両凸	○	○	×	19.8	15.0	3.4
				？	(0.9)	−	−	−	両面	非極	両凸	○	基部	×	(22.1)	(13.0)	3.7
				黒安	(0.8)	凹形	−	薄・両？	両面	非極	菱形	◎	尖端・一角	×	(20.9)	(11.4)	3.8
				黒安	(0.3)	凹形	−	薄・両	両面	非極	両凸	◎	尖端	×	(10.9)	11.1	1.9
				黒安	0.4	凹形	非対称	薄表・厚裏	両面	非極	片凸	○	○	×	12.5	11.0	2.5
				黒安	0.4	極凹形	対称	薄・両	両面	非極	両凸	×	○	×	12.5	13.4	2.0
				黒安	0.5	極凹形	対称	薄・両	両面	非極	両凸	○	○	×	15.2	13.0	2.3
				灰安	(0.3)	−	−	−	両面	非極	両凸	○	基部	×	(12.5)	(8.1)	(2.5)

第6表　楔形石器の観察表

資料番号	挿図番号	出土地区	極間長	最大幅	最大厚	細部調整数	極長	打撃面の様態	稜面数	横折りと	対縁のねじれ	稜面上剝離面数	石材	重量(g)	備考
G 2 − 3 − 1	第30図12	第 2 層	(32.8)	18.0	9.6	1＋	8.8／	原面上／	4	端	／	無	黒安	4.8	
− 3 − 2	15	第 2 層	18.00	11.5	5.2	2	4.5／1.6	点状／剝離面	4	中央	／	1	黒安	1.2	
−15− 1	17	第 2 層	(34.4)	10.0	8.4	1＋	3.9／	点状／	3	端	無	無	黒安	2.4	
−19	8	土壙	(18.4)	30.0	4.90	2	19.8／(9.6)／	点状／	1	無	／	無	灰安	2.7	
	第33図11	表採	46.2	23.5	11.4	2	11.1／7.7	点状／点状	3	無	斜	無	黒安	14.0	
	12		38.7	41.3	6.9	3	25.0／12.4／18.5	点状／点状／点状	3	無	無	無	黒安	13.8	ピエス・エスキーエか
	13		(30.6)	15.5	5.7	1	20.7／	点状／	3	無	／	無	黒安	3.5	
	14		(37.5)	13.4	6.0	1＋	13.0／	点状／	2	端	／	無	黒安	2.3	
	15		37.8	11.6	11.2	2	9.3／5.5	点状／剝離面	3	無	無	1	黒曜石	7.3	姫島産

を側面とする剝片も，完形として扱う。したがって完形でないものとは，主打撃以外の理由による折れ面をもつ剝片をさす。

型態指示の「部分円形」は，原礫から規定されるもの，貝殻状剝片や波状隆起の縁部など剝片剝離法から規定されるもの，細部調整によるものの３つの事態をふくめる。

15最大厚部分，16最大厚部分ののびる方向は，裏面に稜があっても表面の稜の様態だけで決定することとする。周縁番号は実際に残っている剝片のそれであって，29先行剝離面の方向に関する周縁番号も，同じくである。

18打面の形態は，［山中´82ｂ］の１点状打面，２原面上打面，３作製打面（剝離面打面，二面調整打面，多面調整打面）４打面欠損の分類に加えて，５粉砕打面の指示を入れる。理由は，粉砕打面を打面欠損として扱うと43折れ面の表記が煩雑となること，粉砕打面の同定が容易であること，また石器の整形がその場でなされたかどうか検討できる利点をもつからである。原面上打面は，コーテックスの厚い場合，問題なく同定できる。しかし打撃面がパチナに覆われた場合，自然の温度，物理破損によるものか，石の目を加撃したのか，石の目の自然破損か区別できないときがある。その場合，リングが目視できれば，意図的な剝離面として扱う。すなわち原面上打面には，コーテックスの面と折れ面の２つの事態をふくめる。

33二重バルブの検討は，台石上技法による剝片には適用しない。両極，多極技法と混乱する恐れがあるからである。

38垂直（ヒビ）割れを，主打撃の打点折れとして扱う。垂直割れとは，主剝離面が左右真っ二つに割れたもの，ヒビ割れとは剝離軸に斜行して折れたものを呼称する。ともに周縁番号を記入し，この件は43折れ面には算入しない。以上の点は，意図的に［山中´82ｂ］を変更させているので，注意されたい。

43折れ面の表記は，完形とみなすとできなくなるので，最小限にとどめた推定復原でおこなう。その場合，打撃軸方向を周縁番号の19－９とまず決定し，先端部をかならずしも９とはしない扱いとする。この点も［山中´82ｂ］とは違っているかも知れない。衝撃がどの方向から入ったか判らない時は，両極の矢印で表記する。

また，判断のつく場合は，できるだけ記入する（第４表）。

石器型式の記録　発掘によって出土した石器は，石鏃６点，楔形石器４点，直刃削器１点，単刃厚形削器１点，基部整形尖頭器１点である。

石鏃に関する観察項目と用語は，［山中´78］，［山中´82ｂ，ｃ］に則り，あらたに重量，石材，基部の対称性を追加した。基部の対称性とは，上からみて基部平面形の左右が対称に造り出されているか，そうでないかを問題とするものである。有無の二項選択を問うもので，数量基準をもうけず，目視でよいとする。非対称基部の石鏃は，直線形基部，凸形基部にはまず

現われないと予想されるが，独立項目として扱う。藤森栄一が提唱する有翼鏃は，非対称極凹形基部の石鏃と基部の一角がたたき折りされた二つの事態をふくむ。(3) そこで，表中の折損項目に一角とあれば，基部の左右片方が，基部であれば左右両角が折損している旨表記する。極凹形基部の角が，円脚であるか尖脚であるかの変異を認めるが，従属項目なので，略している。また表中の調整項目は，器体の整形にかかわらない浅形細部調整をふくむ。折損がわずかな部分であり，そのため観察項目の分類が推定できる場合も記入しておく（第5表）。

楔形石器をつぎのように定義する。楔形石器とは，台石上技法による剝片剝離の打撃面縁部に魚鱗状ないし階段状細部調整をもつ角柱状石核である。名辞は，岡村道雄の研究(4) から採用したが，曽根型石核でもよい。技術型態学の命名が，機能規定でないことは前文で述べた。細部調整をともなう打撃点を極とみなす。つぎの項目を計測，観察する。

極　間　長；細部調整をもつ対縁間の直線最短距離。

細部調整数；対縁にある細部調整部分の数。

極　　長；細部調整部分の長さ。打面の長さとは必ずしも一致しない。

樋　面　数；両極打撃の対縁に達する剝離面の数。垂直割れ，対縁に達する打点折れも算入する。

横折りとり；主軸に直交する折りとり面。表裏，両側いずれの面からの打撃かは問わず，樋面のヒンジも横折りとりと見なす。なければ無，あれば器体を推定復原した長の中央3分の1にかかるものを中央，以外を端と記す。

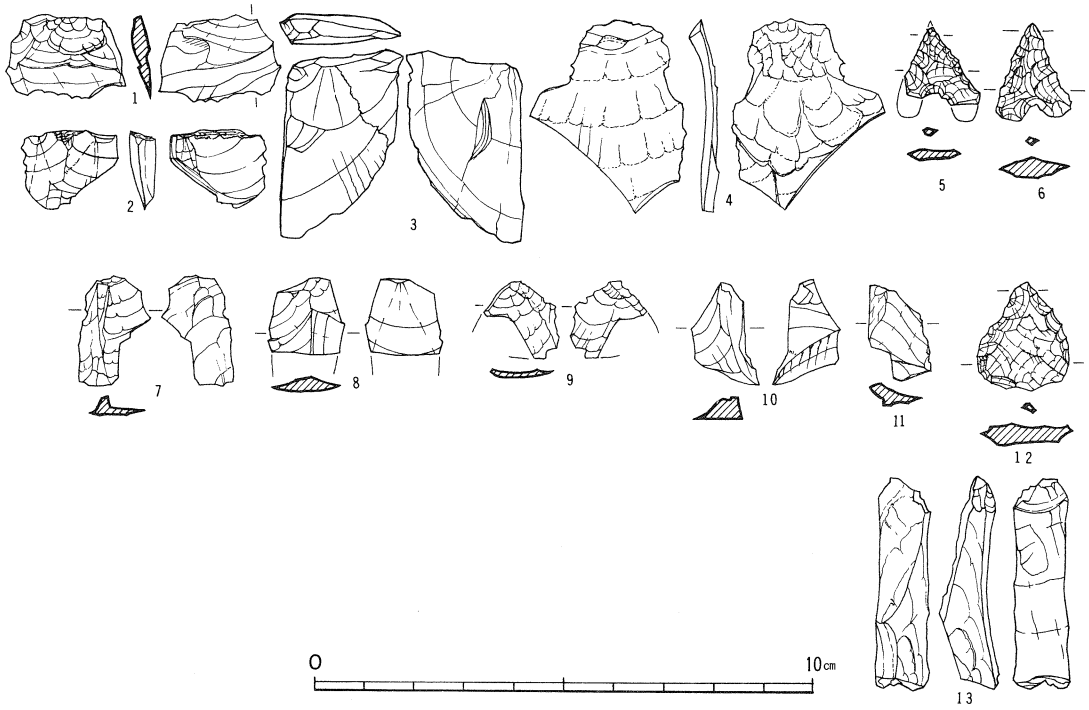
対縁のねじれ；極が平行する関係にあるものは無，斜行する関係にあるものは斜行，直交する関係にあるものを直交と記入する。

樋面上剝離面数；樋面の稜上を横方向に打撃する5㎜以上の長さをもつ剝離面の数。

その結果は，別表のとおりである（第6表）。

各調査区の石器遺物　4箇所の調査区から出土した石器遺物は70点である。G1区から28点，そのうち石器の型式は石鏃が3点で，残りの25点は広い意味での剝片である。G2区からは34点の石器遺物が出土した。そのうち石器の型式は，尖頭器1点，石鏃3点，楔形石器4点であり，ほかに石核2点がある。広義の剝片は，24点である。G3区からは3点の石器遺物が出土した。そのうち石器の型式は削器2点である。G4区からは5点の石器遺物が出土した。すべて広義の剝片である。したがって4箇所の調査区から出土した型式は，尖頭器1点，石鏃6点，削器2点，楔形石器4点の計13点である。型式と剝片の数量比は，13対55ということになる。

土器では，接合資料や同一個体が距離を離れずに出土しているので，堆積土中の遺物は，さほど移動していないと考えられる。石器遺物の接合例はなかった。各調査区の型式と剝片の数量比で，イレギュラーなものはG3区とG4区である。G3区の剝片1点が細部調整品である



第29図　Ｇ１区出土の石器遺物（第２層；1～6，第３層；8～12，第６層；７，第７層；13）

ことを併せると，この区は完成品のみが出土し，逆にＧ４区は石屑ばかり出土した。Ｇ４区は，客土中の出土であるので問題とならないが，Ｇ３区は完成した石器を持ち込んで，動物の解体，器物の工作をした場所なのであろうか。これに対して，山方のＧ１区，Ｇ２区では活発に石器製作がおこなわれたことが判る。石核，原礫面打面，粉砕打面の存在は，原材がＧ１区，Ｇ２区に持ち込まれて石器に整形，加工されたことを意味する。

Ｇ１区の第２層と第３層の剥片の型態変化は，狭義の剥片が第２層で９点，第３層で１点，横形剥片が第２層で３点，第３層で５点と逆転する。そのため第２層と第３層とで技術的変化があったように思えるのだが，土器の出土状態や堆積学的知見は，そうした比較は不可能であるとしている。縄文早期の石器遺物に関しては，出土資料がなく，この注目すべき土器型式に伴う石器装備を明らかにしえなかった。第７層からは石刃状剥片１点が出土した。基底礫直上からの出土であり，表採石器に先土器時代の良好な型式があることから，この層が更新世の堆積物である可能性は高い。広域火山灰のＡＴが，河床礫上部から第６層にかけて垂直分布する。基質が砂のため再堆積層の可能性もあるが，第５層の上部が縄文時代の早期に比定できるので，第６層以下が先土器時代の堆積物であることは誤りないだろう。

G２区出土の石器遺物は，土壙から13点，第２層から14点，第３層から７点であった。土壙は，第２層や第３層の形成以後の造営だが，石器遺物の品目で有意な差を見い出すことはできなかった。土器の所見と併せて，土壙の埋土は，第２層と第３層が使われたことになる。すなわち，掘削した土を埋め戻しているのである。G２区からは４点の楔形石器が出土し，この型式がG１区にない件はすこし気にかかる。しかしG１区でも，台石上剝片剝離法を用いた垂直割れをみる剝片がかなり出土しているので，技術的にG１区とG２区の石器遺物を区別することはできない。

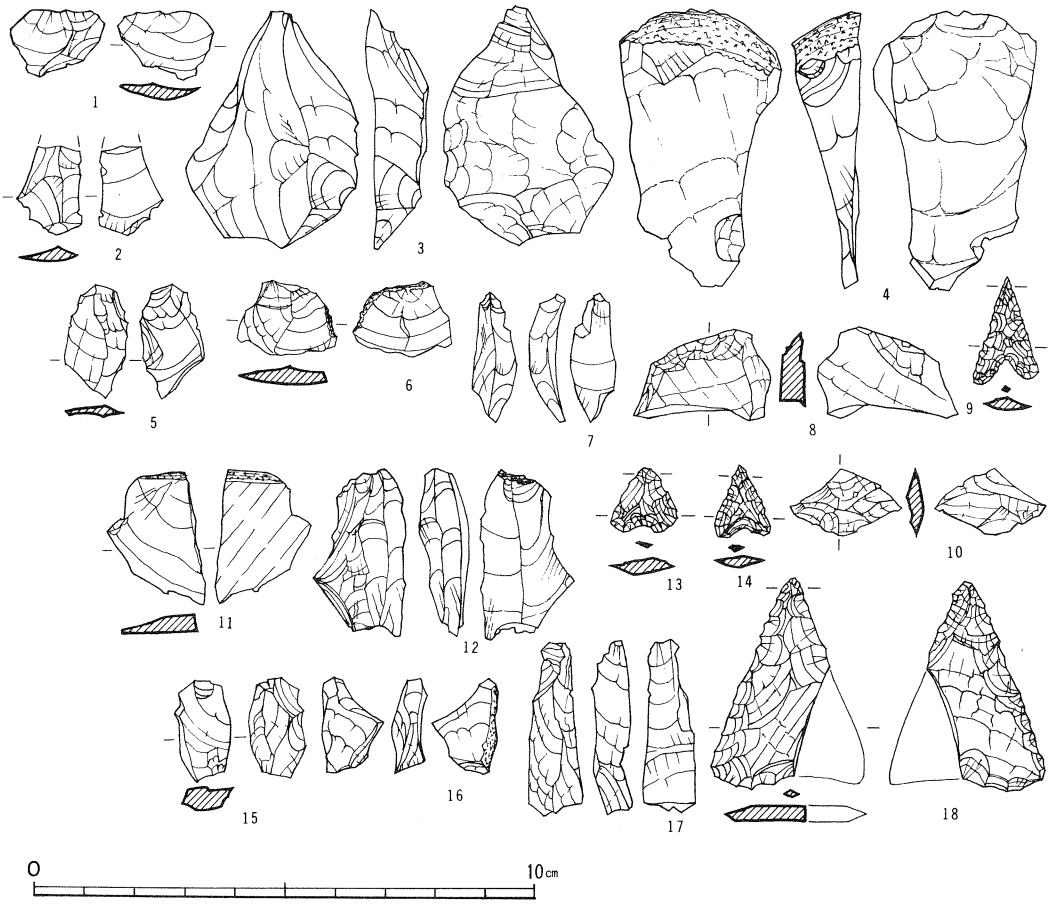
石器型式の分析　先土器時代と縄文時代早期の石器型式については，出土例がないため判らない。しかし表採資料には，型式判断から先土器時代の製品がある。

石鏃は表採資料を併せると，18点が知られる。基部形の判るもの16点中，極凹形基部が５点（31％），凹形基部が10点（63％），直線形基部が１点（６％）であった。この直線形基部石鏃（第29図12）は，整形，断面，尖端の３項目でもイレギュラーな指示がでるので，特異な存在である。おそらく未製品であろう。新槇原遺跡の石鏃は，原面をとどめず，両面から非極厚形細部調整によって整形するもので，たいへん均質で造りがよい。たぶん基部形の変異も，凹形か極凹形の２種類にとどまるであろう。基部の対称性が判る10点のうち，対称が６点，非対称が４点であった。東北アジアの打製石鏃に非対称凹形基部が存在するが，いまのところ数量比較をおこなえないでいる。この件は機能論のみならず，縄文文化の系統論にもかかわるので，資料の集積を企りたい。

楔形石器は，表採品を併せると９点が知られ，石鏃についで多い型式である。剝片のなかには，この石核から剝したものがある。横折りとりがあるものは単極，ないものは両極，盤状であれば多極として技術的分類が可能だが，使用された技法はたいへん均質である。変異は寸法におおきく現われるが，いまのところ数量比較ができないでいる。極長と細部調整の長さを一致させたが，極を打撃面とみなすと，細部調整の長さよりも長くなる事態がある。打撃面の様態は，観察できる14面のうち，点状打面が11例（79％）剝離面打面が２例（14％），原面上打面が１例（７％）であった。楔形石器の点状打面はたいへんユニークで，細部調整縁にそって線状となる。点状打面が高率な事実とあわせて，たぶんこの石器の使用法とかかわるものとみられる。細部調整は樋面の作出と同時にできる潰れである。

基部整形尖頭器（第30図18）は，凹形基部の打製石鏃を大型にしたものである。両面から薄形の深形と浅形の魚鱗状細部調整をする。原面はなく，中央断面形は六角形。長さ42.4㎜，現存幅21.9㎜，厚さ3.8㎜，現存重量3.1ｇである。

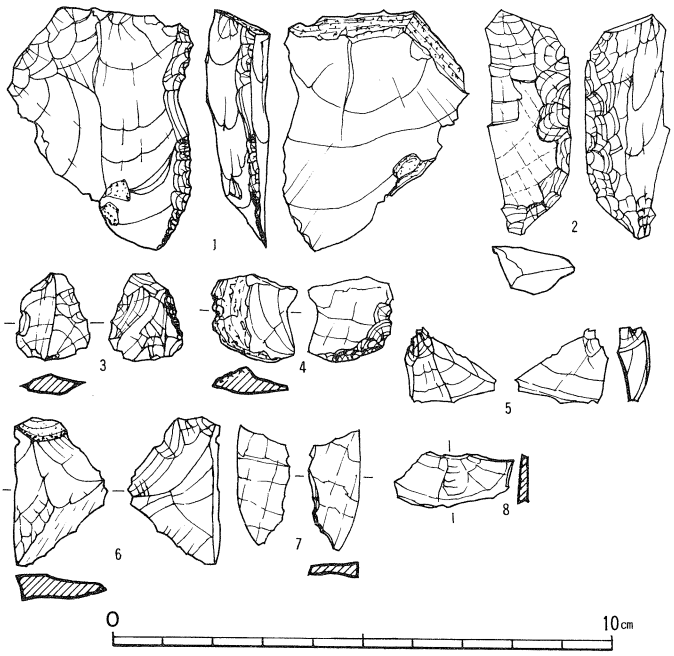
２点の削器が出土した。直刃削器（第31図１）は原礫面の稜上を打撃しているが，主剝離面剝離は左によったところから進行する。そのため，並列する二重バルブをもつと考えられる。



第30図　G 2 区出土の石器遺物（土壙；1～9，第 2 層；11～13，第 3 層；10・14）

表左縁に浅形・薄形連続細部調整で刃づけをしているが，基部付近では縁部が折損する。単刃厚形削器（第31図 2 ）は，両面から薄形・深形連続細部調整で凸形の刃部をつくる。素材剝片を，縦方向に台石上で両極から折りとる。裏面には，折りとり以前の侵形・階段状細部調整が孤立して入る。

剝片の分析　石器遺物70点のうち，石器型式13点，石核 2 点を除いた55点が剝片である。登録番号品 2 点を産地分析に供したので，分析した剝片総数は53点である。型態の分類は，石刃 1 点，石刃状剝片 5 点，剝片25点，横形剝片22点，細石刃 0 点，屑片 0 点である。下層の先土器時代と縄文早期の資料，およびG 4 区客土の資料を除いて以下，時代を縄文時代前期前半の石器遺物に限定する。すると，石刃 1 点，石刃状剝片 4 点，剝片23点，横形剝片17点となる。石刃の 1 点は台石上技法によるもので，石刃状剝片に分類すべきものなのかも知れない。縦長の剝片が採れてないのは，石材によるものではないかとみられる。屑片の出土がないのは，サンプリングの方法によるであろう。新槇原遺跡の発掘では，水洗フルイ法を実施していない。



第31図　G３区(1～3)とG４区(4～8)出土の石器遺物

時間の都合で，詳しい属性の相関は検討しえなかったが，以下評価を述べておく。

「ほぼ完形」を完形品扱いとすると，剥片では完形品15点（65％），基端部３点（13％），先端部１点（４％），中央部３点（13％），右縁１点（４％）となり，横形剥片では完形品７点（41％），基端部２点（12％），先端部４点（24％），中央部２点（12％），右縁１点（６％），左縁１点（６％）となる。大阪府長原遺跡では，横形剥片の方が高率で完形品として残る成績を得ているが，新槇原遺跡では逆であった。

中央断面形は四角形16点（33％），不等辺三角形15点（31％），正三角形10点（21％），台形３点（６％），二等辺三角形２点（４％），多角形１点（２％），部分円形１点（２％）であった。中央断面形は打撃点の相互関係で決まるが，不等辺三角形の多いことは，先行剥離面の稜をできるだけ避けた結果とみられる。四角形が優占するのもじつは同じ理由で，16点中15点（94％）が折れ面か垂直割れ，ヒビ割れの稜部をもつので，不等辺三角形の断面をもつ剥片として剥離されたことが判る。要するに，うすい剥片を採ろうとした意図の現われである。

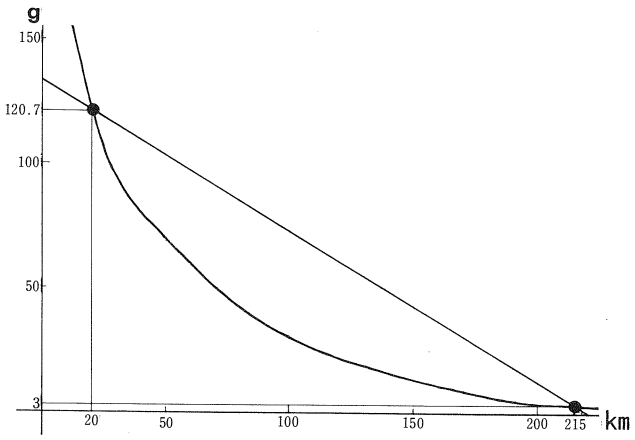
打面の様態は，欠損が15点（32％），粉砕打面が13点（28％），点状打面が７点（15％），原面上打面が５点（10％），二面調整打面が５点（10％），剥離面打面が２点（４％）であった。原面上打面と粉砕打面は，新槇原遺跡で原礫が石器に加工，整形されたことを意味する。作製打面が高率でないことと石刃，石刃状剥片のすくなさと相関のあることは言うまでもない。

先行剥離面について，面数，面の方向，稜数，稜の規則性，稜の方向には構造的関連性がある。剥離方向に規則性がないことをもって，新槇原遺跡の特徴と言えようか。

二重バルブの発生率10％は，［山中´82ｂ］のサヌカイトによる成績（15.7％）にくらべて高率ではない。この理由は，サヌカイトにくらべて主材の安山岩の硬度が低いとも考えられるが，［山中´82ｂ］のサヌカイト剥片が新槇原遺跡の剥片にくらべて全体的に寸法が大ぶりな

ので，剝片のサイズにもよるだろうと考えられる。

主打撃に起因する垂直割れとヒビ割れの頻度は，縄文前期の観察可能な剝片48点中12点（25%）で，たいへん高い事故発生率といえる。［山中82］で示されるサヌカイトのほぼ倍の頻度である。台石技法による剝片に限れば，9点中6点（67%）であるから，さらに高率で打点折れが発生していることになる。たぶんこの件は，新槇原の縄文人がよく承知ところであって，楔形石器の盛行と関係するに違いなかろう。ちなみに楔形石器の使用痕観察によれば，この型式は多目的用途に供せられたという。(5)



第32図　石材交易の離心減少モデル

折れ面の頻度も高率であって，剝片がポキポキと折れやすい性質であったことを物語っている。折れ面が狭小なため，くわしい観察はできなかった。

石材の経済効率　新槇原遺跡出土の打製石器の石材は，肉眼による識別で4種類が区別できる。黒色透明の黒曜石が，九州産か隠岐産か判らなかったが，島大三浦清教授によって隠岐K型の結果をえているので，ここでは類品を隠岐産として扱うこととした。素人判断が入っているので，同定に誤りの恐れがあるが，安山岩を灰色と黒色の2種類に分け，経験的にともに広島県冠山産のものと見なした。灰色不透明の黒曜石は，大分県姫島産として扱った。

ごく微量な資料は，主題に入る前に地質学者に渡っているし，発掘でみおとした微少な剝片もあるので，大勢に影響のないかたちで議論を進めよう。石器遺物の総重量は122.7g。うちわけは黒色安山岩が86.8g，灰色安山岩が32.9g，隠岐産黒曜石が2.5g，姫島産黒曜石が0.5gであった。未加算の資料は極小の剝片で，0.5gを越えないだろうから，ここではそれぞれに0.5gを加えて補正した数値を使うこととしよう。すなわち，黒色安山岩87.3g，灰色安山岩33.4g，隠岐産黒曜石3.0g，姫島産黒曜石1.0gとする。

黒色安山岩の石器型式の重量は24.4gだから，完成品となったのは28%である。灰色安山岩の石器型式の重量は14.6gだから，完成品となったのは44%である。黒色，灰色を問わない安山岩の総計では，32%が製品となったことになる。隠岐産黒曜石の石器型式の重量は0.4gだから，13%が製品となる。姫島産黒曜石の石器型式の重量は0.5gだから，50%が製品となる。黒曜石については入手したサンプルの大きさが小さいため，無効といえないまでも，歩留りの

結果についてはそのまま信用できない。産地に近い遺跡の大きな母集団で検討してみる必要がある。ただ注意しておきたいのは，出土した姫島産黒曜石は製品である。表採資料のうちに1点剝片が認められたが，それも細部調整をとどめるものであった。このことから，姫島産黒曜石は，新槇原には完成品のかたちで流入している可能性がある。冠山安山岩は打撃事故が頻発し，石材としては好材でない印象をうける。実際，冠山安山岩の先史時代交易圏は黒曜石やサヌカイトにくらべて狭小らしく，品質の粗悪なことを証拠だてているように思える。新槇原遺跡では，冠山産安山岩の完成品歩留りが3割の結果をえた。これが効率のいい方なのか悪い方なのか，目下のところ比較できる数値がないので，評価をひかえておく。

各産地と新槇原との直線距離を地図上で略測すると，冠山からは20㎞，姫島からは108㎞（うち海路33㎞），隠岐島久見からは215㎞（うち海路88㎞）を測る。主題を単純にするため，製品だけが流入した姫島産の黒曜石に関しては，議論を避ける。距離と重さの積は，仕事量であるから，冠山に対してなされた活動と隠岐島に対してなされた活動の運動量の比は，2,414対645となる。要するに，わずか2％の石材をうるために，21％のエネルギーが費やされたのである。

ところで，石材の入手については，個々の集団がそれぞれ産地に接近して材を入手したと考えるよりも，隣の集団からもらいうけたものではあるまいか。こうした手渡しによる方法のほうが実態に近いことは，産地から遠い遺跡ほど同心円状に産物が低減することからもうかがえる。そこでは，どのような経済法則が働くのであろうか。これは比較の問題であるから，新槇原遺跡と同じ基準で別の遺跡の成果がでていなければ，なしえない主題である。ここでは，隠岐産黒曜石と冠山産安山岩の製品歩留りが同じで，石材撰好に差のないものと仮定しておこう。すなわち，産地から20㎞離れたところで120.7ｇ，215㎞（うち海路88㎞）離れたところで3ｇ入手したと考えるのである。χを距離（㎞），ｙを重量（ｇ）とすると，2点を結ぶ減少グラフを想定できる（第32図）。離心減少が一次関数であれば，つぎの連立方程式を解けばよい。

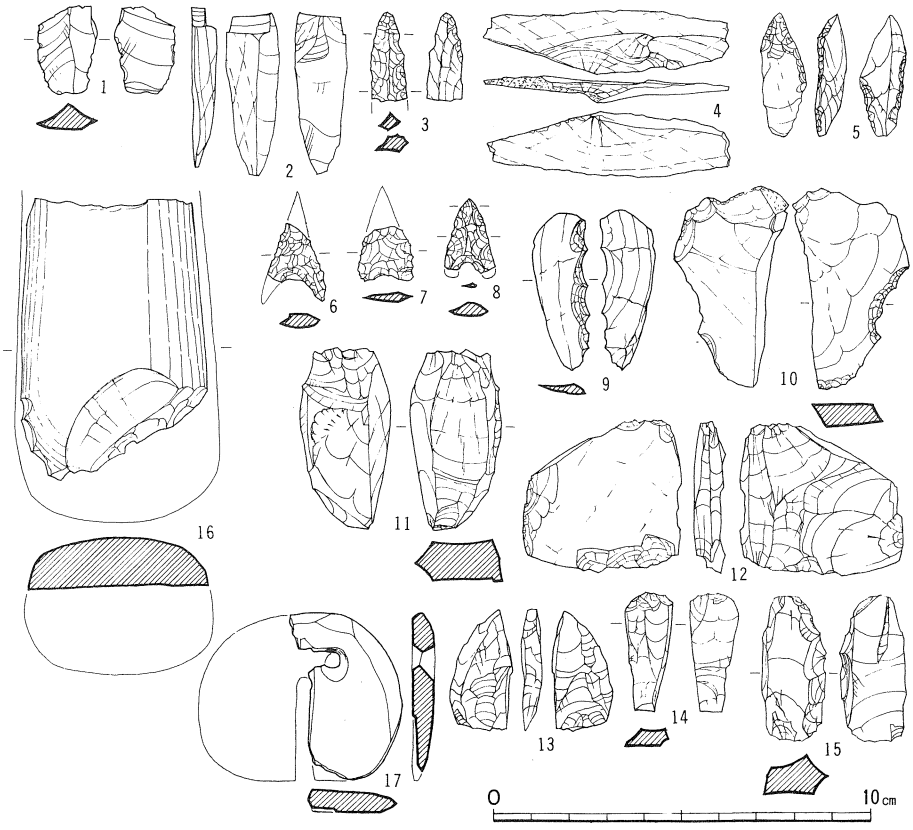
$$120.7 = 20a + b$$

$$3 = 215a + b$$

$a = -0.6$，$b = 132$だから，$y = -0.6\chi + 132$の式がえられる。

この式は，産地で132ｇ石材が搬出されると，1㎞あたり0.6ｇずつ目減りすることを意味している。考古学的に132ｇがまったく意味のないことは言うまでもない。石材の搬出量は，未知数なのである。

いま空間的位置関係は不動なのだから，つぎのように考えてみよう。20㎞を1距離単位のℓとすると，215を20で除した10.75ℓでは，3ｇを120.7ｇで除した0.0248…倍の増減があったことになる。レンフルーは，この問題をたいへん判りやすく説いている。[6] ℓを距離，kを受



第33図　表面採集にかかる石器遺物

け取り率（1以下），Nを出荷量とすると，

距離ℓの1村の受け取り量はNk

距離2 ℓの2村の受け取り量はNk^2

距離3 ℓの3村の受け取り量はNk^3

距離n ℓのn村の受け取り量はNk^n

となり，距離χ村の受け取り量の一般式は，$N \cdot k^{\chi/\ell}$となる。つまり指数関数で，手渡しによる低減が表記できるというのである。これを，新槇原遺跡に活用すると，つぎの式が成立する。

$$k^{\frac{215}{20}} = \frac{3}{120.7}$$

$$\frac{215}{20} \log k = \log \frac{3}{120.7}$$

$$k = 0.709\cdots$$

つまり20㎞あたりの減少率は，２割９分である。冠山産の安山岩と隠岐産の黒曜石を等価とみなし，海路も陸路計算に入れると，減少率は20㎞につき，約３割ということになる。この結果が，冠山と隠岐島のあいだの新槇原遺跡とは違う別の遺跡で検討されることを望んでいる。

表面採集にかかる石器　新槇原遺跡から渡辺友千代，吉田花子，西田保３氏によって表面採集された石器遺物の量は，発掘調査による出土量のほぼ２倍ほどである。発掘によって入手できなかった遺物をふくむので，選んで紹介する。

まず，先土器時代の型式として，両縁背つき尖頭器（第33図５）がある。パチナは発達し，やや磨滅する。石刃状剝片を素材とし，基端を尖頭にする。表面には器軸にそって１稜が縦にとおる。細部調整は，連続する表裏片縁で，深形・厚形（部分的には薄形）である。原面はない。最大長31.65㎜，最大幅11.3㎜，最大厚5.35㎜，重量1.7ｇである。翼状をなす横形剝片（第33図４）も，先土器時代の遺品かも知れない。しかし，右側縁に原面がのこるので，先土器時代の西日本に常見の剝片剝離法とは違っている。錐もしくは尖頭器の尖頭部分（第33図３）も，発達したパチナからして先土器時代にまでさかのぼる可能性がある。先土器時代の包含量はＡＴを含む第６層が縄文時代早期の第５層と連続するので，層間に不整合があって，厚い堆積土が浸蝕されたと考えられる。つまり先土器時代の顕著な形式である背つき尖頭器をＡＴ降下当時の所産とは，断定できないことになる。この型式と同じく表面採集でえられた翼状の剝片の関係は，たいへん興味深い主題であるが，発掘面積が狭小なためか，検討できなかった。

縄文時代の磨製石器として，磨製石斧（第33図16）と玦状耳飾（第33図17）がある。玦状耳飾は縄文前期の土器と共伴時例が多いので，第２層，第３層から出土しているとみられる。鋸歯縁石器（第33図９）と細部調整ノッチ（第33図10）は先土器時代にまでさかのぼる可能性があるが，楔形石器（第33図11～15）はＧ２区で縄文前期の土器と共伴するところから，新槇原遺跡ではまず縄文時代の型式であろう。

◇注

(1) 松田順一郎：「サヌカイト製打製石器にみられる使用痕の諸例」
（『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 1 №2，1986年）

(2) 山中一郎による細部調整の用語は，〔山中'75〕，〔山中'76〕と〔山中'78〕以後とで用例に変更がある。報告は，新称に従った。

(3) 藤森　栄一：『旧石器の狩人』（学生社，1965年）　221～224頁

(4) 岡村　道雄：「ピエス・エスキーユ，楔形石器」
（加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』７，雄山閣，1983年）106～116頁。楔形石器とピエス・エスキーエは区別の難しいときがある。それは台石上剝片剝離法に用いた石核がうすく，一撃で両面もしくは多面に剝離がなされた事態においてである。英語の楔形石器“splintered piece”は，仏語

のピエス・エスキーエ“piece esquillée”の直訳とみられるが，それでは両者が同一かというと違った概念規定で使用されるか，少なくともそういった場合がある。仏語名辞のピエス・エスキーエは，〔山中´82b〕で明確に述べられているとおり，「一般的には対縁（時に両対縁）に平形両面連続細部調整をもつ」「薄形の遺物」で，あくまで「細部調整剝片に属するもの」と理解しておいたほうがよい。岡村道雄の引くクラーク“Clark，J．D.”が，「調整されたより規則的な刃部が形成されることによってのみ両極石核と区別される」（岡村道雄：「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』，寧楽社，1976年，79頁）と記述していることからも，もともと英語圏でも仏語の“piece esquillée”の定義を忠実に踏まえていたことが伴る。もっともフランスの石器型式学は，1972年以降ピエス・エスキーエをタイプ・リストからはずす傾向にあるという〔山中’78〕。ピエス・エスキーエが型式でなければ，結果的に「調整されたより規則的な刃部が形成され」た剝片ということになるわけである。いっぽう下注に示すコズロウスキーの使用する英語名辞“splintered piece”（楔形石器）は，石核の技術型態を指示する。

(5) Kozlowski，J.K.(ed)，Origin of the Chipped Stone Industries of the Early Farming Cultures in Balkans，Warszawa，1982，pp．39-41．

(6) Renfrew，C.，Alternative models for exchange and spatial distribution，Approaches to Social Archaeology，Edinburgh，1984，pp．141/142．

（中村 友博）

第５章　自然科学的調査

1.　テフラからみた新槇原遺跡の層準

遺跡は赤谷川が匹見川と合流する狭隘な河岸段丘上に位置する。標高474.13～473.12mで段丘上の水田部約2,400㎡にわたって遺物が散布するのがみとめられる。このうち，16㎡（２×２ｍの調査区を４箇所）の調査をおこない，層位・遺物包含状況などを確認した。ここではこの４箇所の中のＧ１区について，テフラの層準と遺物包含層の関係について述べたい。

なお調査地点については第１・２図に示す。

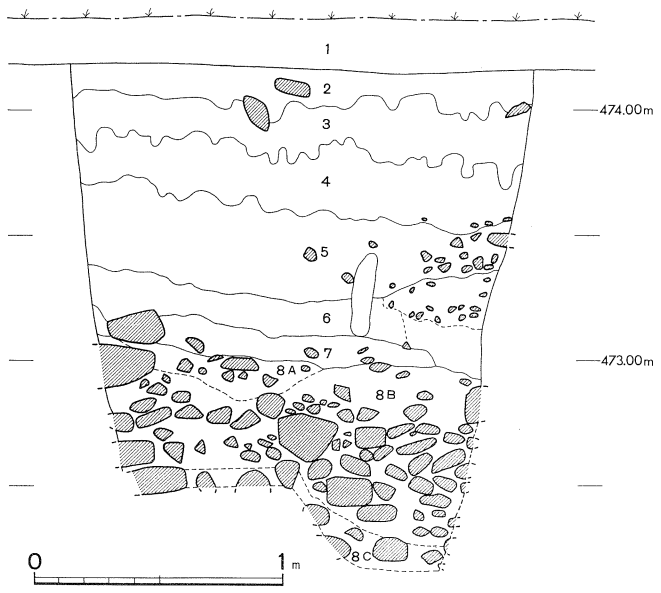
Ｇ１区は今回の調査で最も高い山側の水田に設定したもので，調査時はすでに水田耕作土が除去された段階であり，地表の標高は474.13mであった。

このＧ１区の断面を考古学的に上位から下位に向って８層準に区分された。その断面の状態は第34図に示すとおりである。

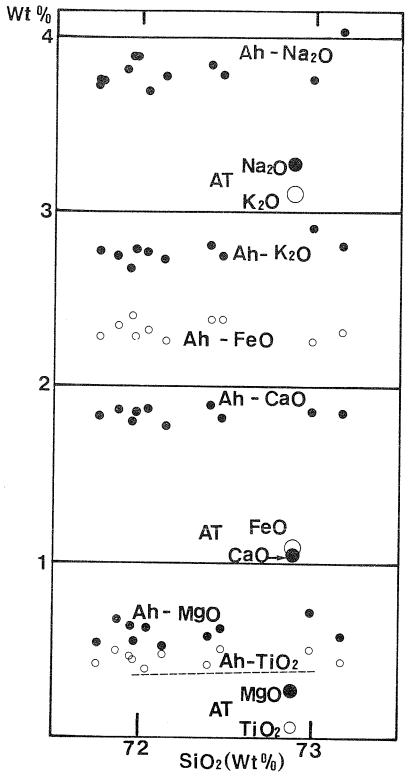
以下にこの層準に従ってテフラとの関係について述べたい。

第１層　いわゆる水田耕作土であるが，調査区の南西寄りに部分的（最大厚10㎝）にしか残っていない。

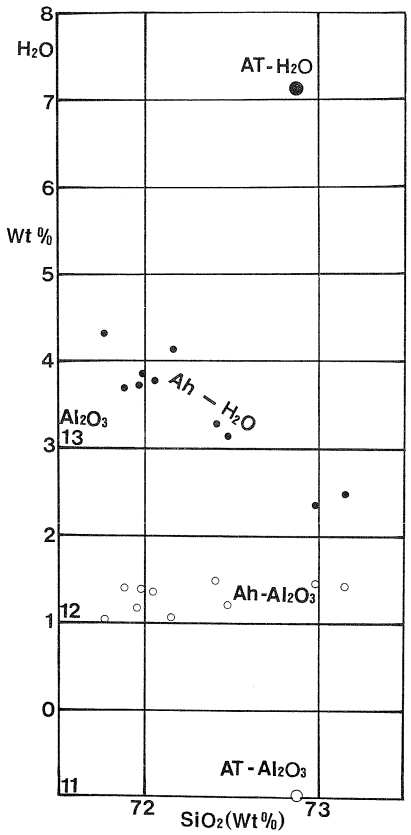
第２層　暗褐色（7.5YR 5/3）を呈し，やや粘性を示す。わずかに黄色の10～25㎝大の石塊



第34図　Ｇ１区東壁の層準



第35図A　G１区第２層に含まれる
火山ガラスの成分変化
（AT：アイラ火山灰の火山ガラス
Ah：アカホヤ火山灰の火山ガラス）



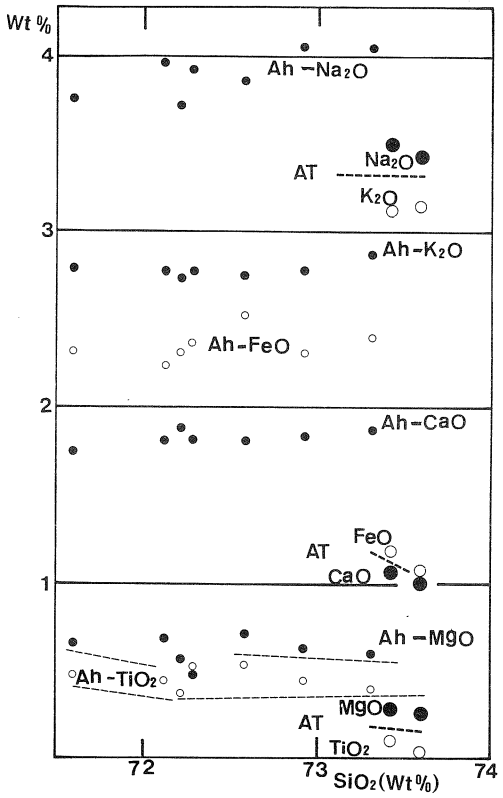
第35図B　G１区第２層に含まれる
火山ガラスの成分変化
（AT：アイラ火山灰の火山ガラス
Ah：アカホヤ火山灰の火山ガラス）

を含む。層厚は平均15cmでほぼ水平に堆積する。土器，石器遺物が多数出土する。

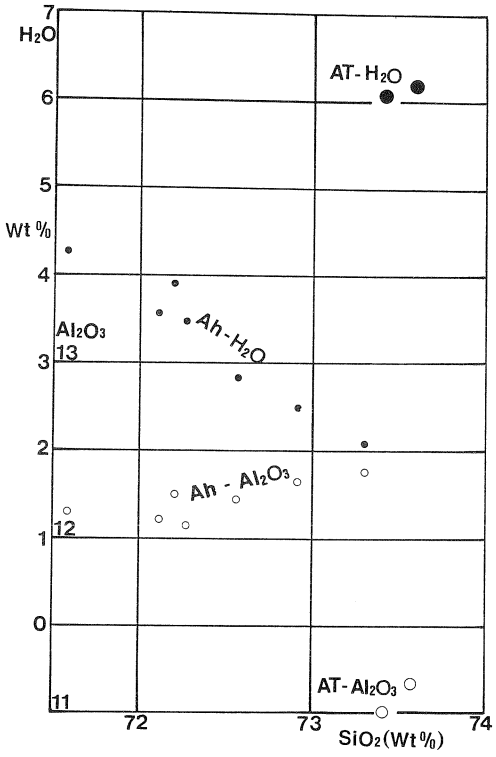
本層には多量の火山ガラスが含まれ，第35図A・Bはその X線マイクロアナライザーによる化学成分の変化を示したものである。成分はNa_2O, K_2O, FeO, CaO, MgO, TiO_2, H_2O, SiO_2の９種について示したものである。

三浦ら（1985ａ）が示したアイラ火山灰AT，アカホヤ火山灰Ah火山灰起源のものが含まれていることを示す。同図のATおよびAh記号はそれぞれアイラAT，アカホヤAh火山灰であることを示す記号である。

第３層　黒褐色乃至黒色(10YR 4/2)を呈し，やや粘性を有する。しかし色調は全体として単一なものではなく調査区北壁側は黒褐色を呈するが南壁側に向って漸移的に黒色化する。10～30cm代の石塊が多く含まれ，総厚は20～30cmで北側から南側にやや傾斜する。多数の土器・石器遺物を包含する。



第36図A　G１区第３層に含まれる
火山ガラスの成分変化
（AT：アイラ火山灰の火山ガラス
Ah：アカホヤ火山灰の火山ガラス）



第36図B　G１区第３層に含まれる火山
火山ガラスの成分変化
（AT：アイラ火山灰の火山ガラス
Ah：アカホヤ火山灰の火山ガラス）

本層には多量の火山ガラスが包含される。第36図A・BはX線マイクロアナライザーによる火山ガラスの成分を示したものである。この結果は種としてアカホヤAh火山灰起源の火山ガラスに少量のアイラAT火山灰起源の火山ガラスが含まれていることを示す。この組み合わせと量比の関係は第２層と全く類似するが後述するように第４層以下とは全く異なり，この層準ではじめてアカホヤ火山灰が出現する。すなわち，アカホヤAh火山灰の噴出年代6,000～6,500年以前の頃かそれよりもやや新しいかと言うことを示すのがこの第３層である。

この層準から出土する土器は轟B式系統，月崎下層Ⅰ式系統，羽島下層Ⅰ式系統，彦崎Z１式系統の各土器のほか修飾のない土器片など，いずれも縄文前期の特徴を有するもので，テフラの年代と考古学的事実とは調和しているといえよう。

この層準から出土する石器の中に黒曜石製のもののほか安山岩製のものが含まれる。安山岩と称されるものには明らかに古銅輝石安山岩に属するガラス質安山岩が主体である。恐らくこれがいわゆるサヌカイトといわれるものであろう。しかし，これが安山岩製石器と言われるもののすべてかと言えば多少の疑問が残る。この問題の解決については別に詳細な研究を必要と

するのでここではこれ以上にはふれないことにする。

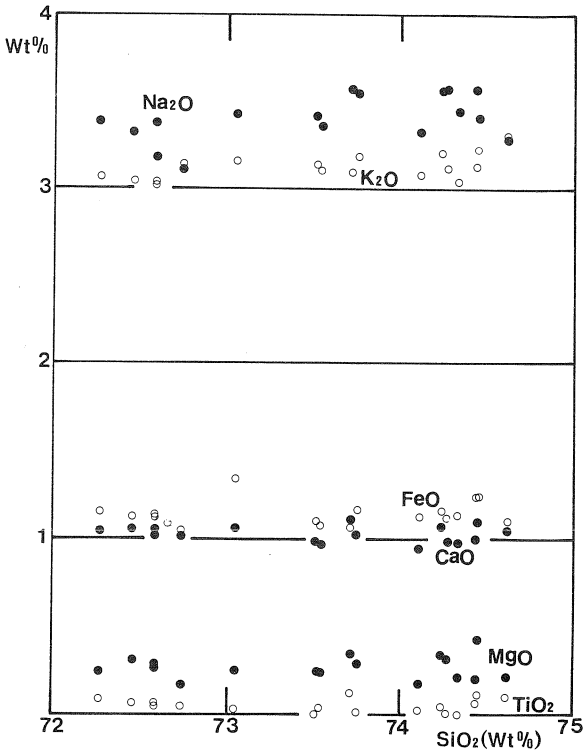
黒曜石の問題については後述する。

第4層　黄褐色（10YR 7/3）で粘性が強い。10cm大の小礫をわずかに含有する層厚がほぼ20cmの層で北から南にわずかに傾斜する。恐らく無遺物の層準とみられる。

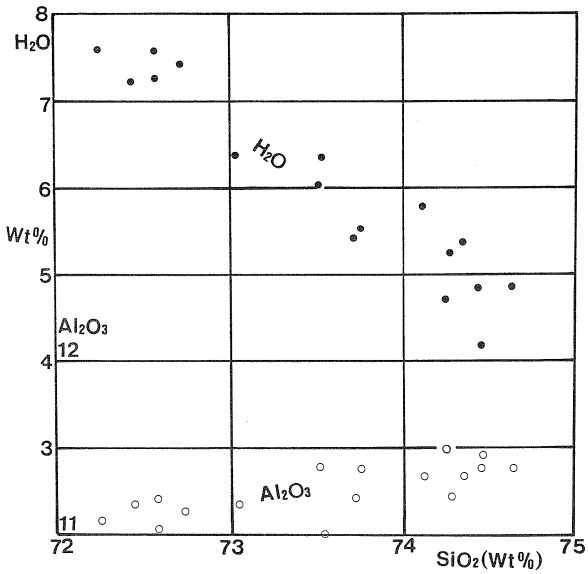
本層に含まれる火山ガラスのX線マイクロアナライザーによる分析値を同じようにして第37図A・Bに示す。この層準に含まれる火山ガラスには全くアカホヤAh火山灰が含まれず，火山ガラスはすべてアイラAT火山灰起源のものである。この事実は極めて重要で，これが第3層との大きな違いである。

第5層　暗褐色（10YR 4/2）を呈するやや砂質の層で層厚は平均的に30cm程度（最小15cm，最大35cm）のもので，北から南にやや傾斜している。この層の上半部に集中的に縄文土器片が含まれる。

本層に含まれる火山ガラスのX線マイクロアナライザーによる分析値を第38図A・Bに示す。この図に示すように本層に含まれる火山ガラスはすべてアイラ火山灰ATであって，アカホヤAh火山灰は全く含まれない。つまり，アカホヤ火山灰Ahの噴出年代が今より6,000～6,500年以前であるから，この層準はこれよりも古いと言うことである。



第37図A　G1区第4層に含まれる火山ガラスの成分変化



第37図B　G1区第4層に含まれる火山ガラスの成分変化

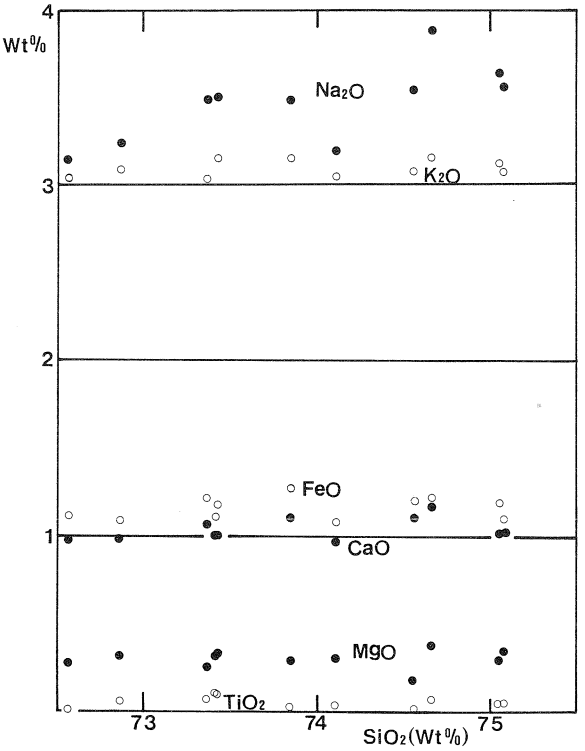
浜田市日脚遺跡（三浦・林：1985ｂ）では，アカホヤAh火山灰の直下から押型文土器が出土したが，ここではこれがみられない。

縄文土器のうち，口縁部片は口唇部に深い刻み目をもち，表裏面上ともナデ調整で表面に縦位の撚糸文の可能性をもつ施文の認められるものや表面に無節の撚糸文が縦に施こされたものがある。厚手の土器が多く微量の繊維を含むものがある。時期的に高山寺式，田村式併行として縄文早期中葉以降に位置づけられている鳥取県上福万遺跡の撚糸文土器に類似するが押型文土器の層準がないため土器の比較には困難が伴う。

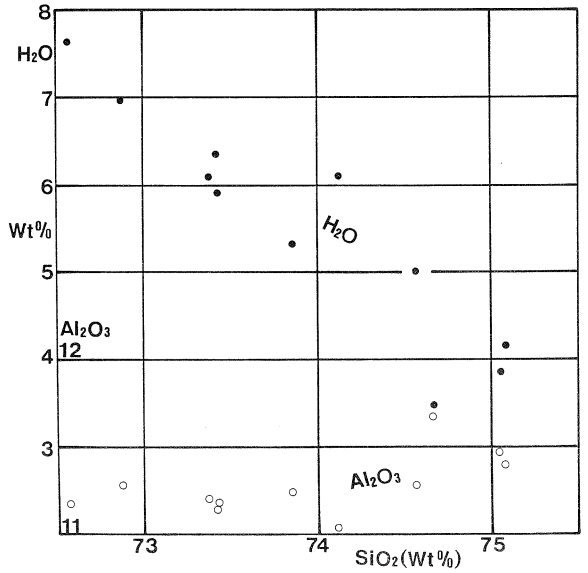
第６層　暗黄褐色（10YR 6/3）砂質土で北壁側がやや明るく，南壁側に次第に黒っぽくなる。層厚15～35㎝で北壁側に厚くなる。本層には遺物は含まれない。

本層に含まれる火山ガラスのＸ線マイクロアナライザーによる分析値を第39図Ａ・Ｂに示す。当然ながらアイラAT火山灰起源のもののみでアカホヤ火山灰Ah起源のものは全く含まれない。

第７層　暗褐色（10YR 7/3）砂質土で第６層に類似するがやや黒っぽくなることと礫を若干含むことでそれから分層したものである。考え方によっては第６層と連続してその最下位層準としてもよく，後述する第８層とは火



第38図Ａ　Ｇ１区第５層に含まれる火山ガラスの成分変化



第38図Ｂ　Ｇ１区第５層に含まれる火山ガラスの成分変化

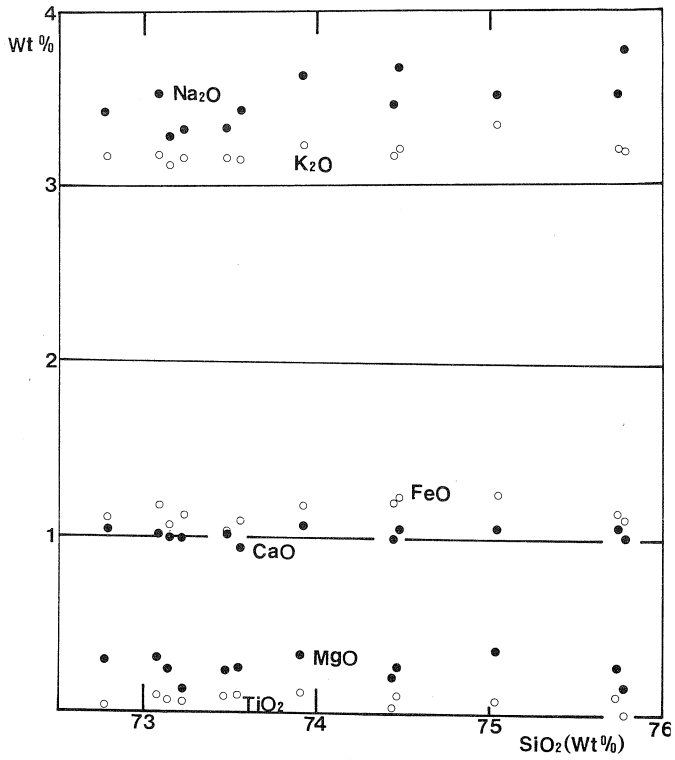
山灰から完全に意味を異にする層準である。

第40図A・Bは第7層に含まれる火山ガラスのX線マイクロアナライザーによる分析値である。これに含まれる火山ガラスはすべてアイラAT火山灰起源のものである。後述する第8層には，火山ガラスは全く含まれず，この第7層からアイラAT火山灰起源の火山ガラスが出現しはじめる。この事実は考古学的にも極めて重要な事である。

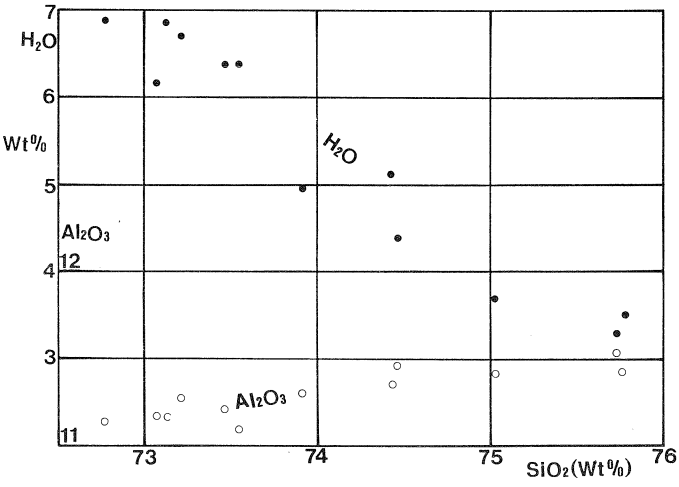
アイラAT火山灰の噴出年代は今からおよそ21,000～22,000年以前と考えられている。この第7層がその火山灰起源の火山ガラスが出現しはじめた層準で，その直下の層準である第8層以下にはそれが全く含有されないので，この第7層は，このアイラAT火山灰の降下年代をほぼあらわしているとみることが出来よう。

この第7層からは，安山岩製の石刃状剝片1点が出土する。したがってその年代もアイラAT火山灰降下年代とほぼ一致するものとみることにあまり抵抗はない。

第8層　砂礫層で河床堆積物とみられる。5cm大の小礫から



第39図A　G1区第6層に含まれる火山ガラスの成分変化



第39図B　G1区第6層に含まれる火山ガラスの成分変化

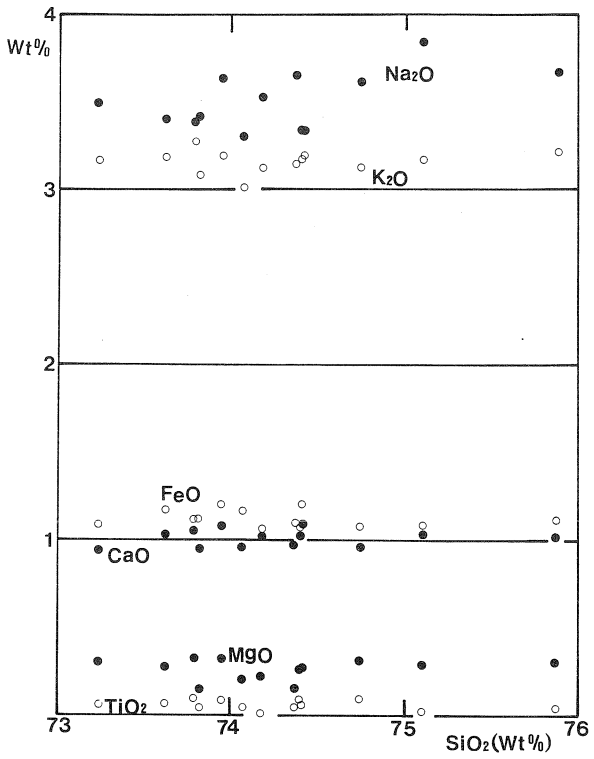
50cm大の礫まで多量の礫を含む砂礫層で，全く火山ガラスを含まない。

以上，考古学的断面とテフラの関係について詳述したがそれを要約すると第7層からアイラAT火山灰起源の火山ガラスが出現しはじめ，したがってこの層準はほぼ，21,000～22,000年頃をあらわすものとみられる。この中には安山岩製の石刃剝片が発見されている。

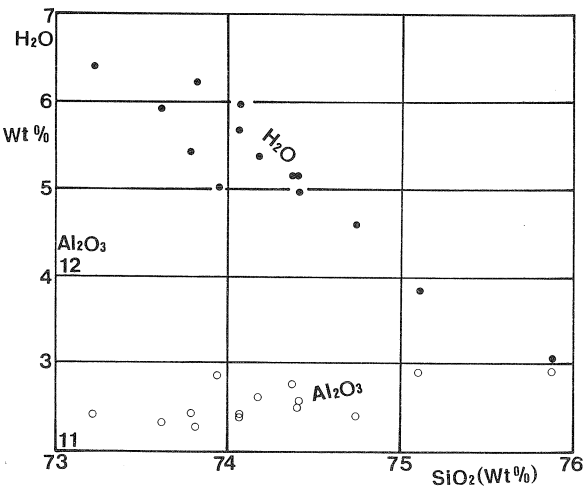
第6層，第5層，第4層もアイラAT火山灰起源の火山ガラスのみを含んでおり，アカホヤAh火山灰降下年代6,100～6,500年以前よりは古いものである。このうち，第5層から縄文早期の土器が出土している。

第3層からはアカホヤAh火山灰起源の火山ガラスがはじめて出現しはじめる。したがってこの第3層はほぼその降下年代である今から6,100～6,500年以前に対応するものとみられる。ここから縄文前期の特徴をもつ土器が出土する。したがってこの土器の年代が，大局的にはこの火山灰の降下年代頃か，あるいはややそれにおくれる年代を示しているものとみられよう。

（三浦 清）



第40図A　G1区第7層に含まれる火山ガラスの成分変化



第40図B　G1区第7層に含まれる火山ガラスの成分変化

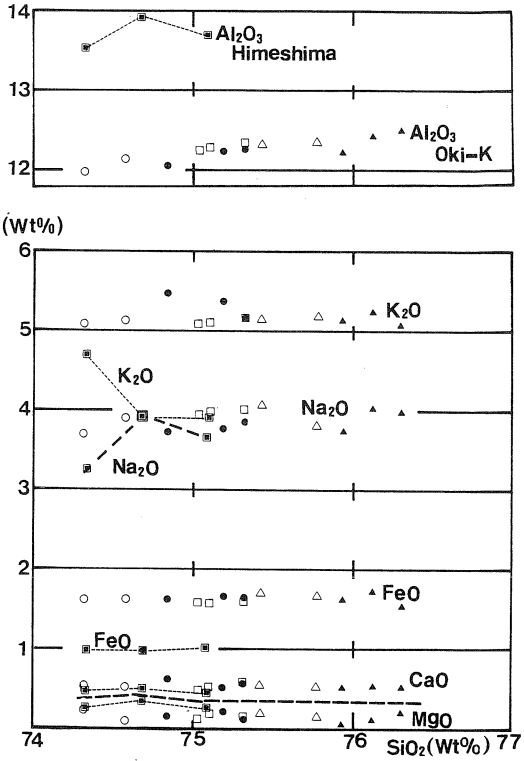
2. 黒曜石製の石器とその起源について

本遺跡の縄文前期の土器に伴って黒曜石製の石器が出土する。その層準は第3層とみられる。

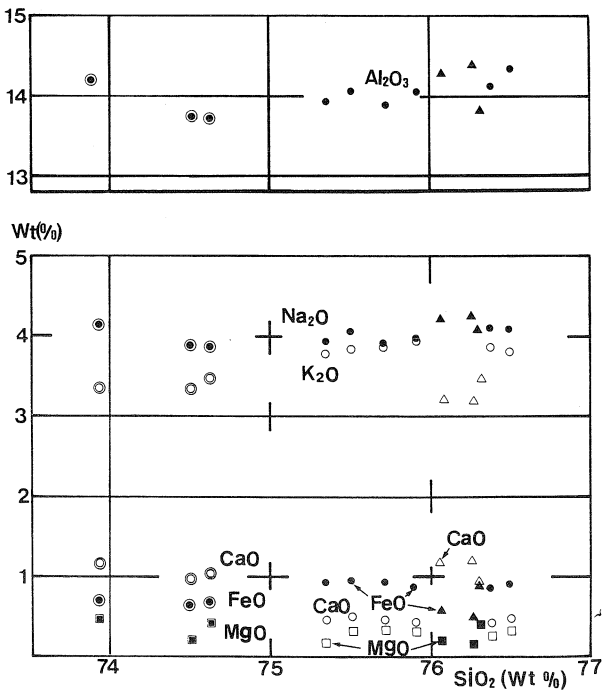
黒曜石は天然の火山ガラスであって，少量の微斑晶を含むものの，石基はほとんど火山ガラスからなる。したがってその石基部分の化学組成はかなり精密にそのマグマの性格を反映しているものとみられる。

このような意味で，九州から山陰方面の黒曜石の原産地から各黒曜石の石基部分の化学組成をX線マイクロアナライザーで測定してみると産地ごとの化学特性が認められる（三浦：1987）。

いま，この遺跡産の黒曜石の石基の化学的特性をX線マイクロアナライザーで測定すると第41図のようになる。特にAl_2O_3，FeO，K_2O，Na_2Oの成分について性格を異にする二種の黒曜石からなっていることがわかる。これが，どこの産地のものであるか，筆者のもとで進めている研究から比較してみるとまず第42図に示す姫島産の黒曜石（ガラス質安山岩ではない）とその特徴において一致しているものがある。他のものは第43図に示す隠岐原産のものと一致する。隠岐には明確に二種の黒曜石があり，ともに本土に持ち込まれているが，その中の久見産（Oki−



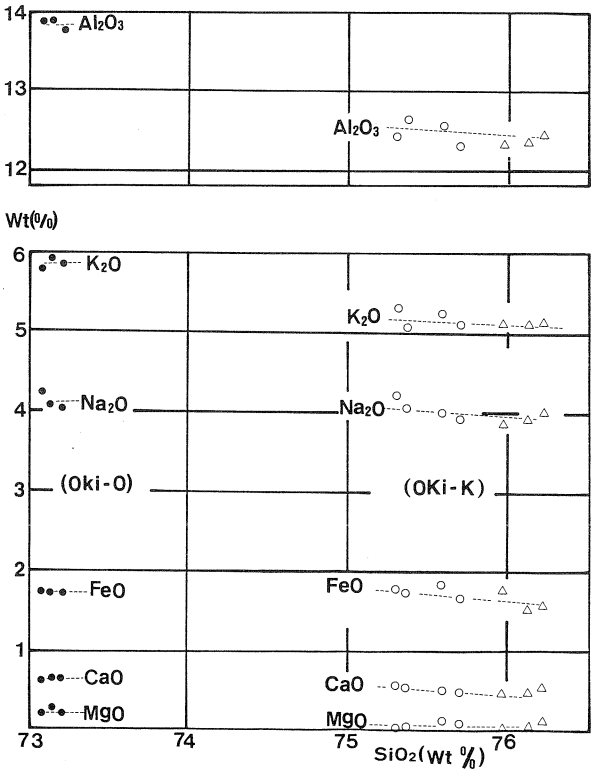
第41図　新槙原遺跡から出土した黒曜石片の石基部分の化学組成
（記号のちがいは個体のちがいを示す）



第42図　姫島産黒曜石の石基部分の化学組成
（SiO_2 75%以上のものが黒曜石で
それ以下のものがガラス質安山岩である）

K）のものとよく一致している。

以上から，新槇原遺跡の縄文前期を示す層準から出土する黒曜石には二種のものがあり，一つは姫島原産のもので，他のものは隠岐島久見産のものである。



第43図　隠岐産黒曜石の石基部分の化学組成
（OKi-K：久見産のもの
OKi-O：男池産のもの）

◇参考文献

三浦 清・林 正久（1985 a）：「山陰ならびにその周辺地域にみられるアイラ火山灰（AT）およびアカホヤ火山灰（Ah）の火山ガラスの化学的特性」『山陰地域研究（自然環境）』1号，71－80

三浦 清・林 正久（1985 b）：「浜田市日脚遺跡におけるアイラおよびアカホヤ火山灰の産状と遺跡の年代について」『日脚遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会

三浦　清（1987）：「黒曜石小考 — 島根県下の縄文遺跡から出土する黒曜石の原産地推定法をめぐって —」『島根大学教育学部紀要』第20巻（自然科学編），45－61

（三浦 清）

第6章　ま　と　め

新槇原遺跡は，昭和60年11月に工事現場で石器や土器が採集されたことから遺跡として確認された。遺跡のひろがりは、表面的な遺物の散布状況からみると約2,400㎡におよぶものと推測された。このたびは，工事中に発見され，かつ事業内容が地下は掘削せずに盛土を行なって畑にするということであったため，遺跡のうちわずか16㎡（２×２m四方の調査区４箇所）の調査しか実施していない。調査は主として層位・遺物包含状況等を確認する目的で実施したが予想以上の大きな成果が得られたものといえる。

今回の調査における最大の成果はＧ１区で先土器時代と考えられる層および縄文早期，縄文前期の層が確認されたことであろう。

先土器時代と考えられる層はＧ１区第７層（暗褐色砂質土）で，その層からはわずかに安山岩製の剥片１点と炭が数点出土したのみである。ただし，採集品に先土器時代の技法を有する石器遺物・剥片が数点みられることなどからも，第７層はその時代の層と考えてよいものと判断された。さらにテフラの分析によると，第７層中にはアイラAT火山灰起源のガラスがみられ，その直下の第８層以下にはそれがまったく含有されていないことから，第７層はアイラAT火山灰の降下年代（21,000～22,000年以前）をほぼあらわしているとの所見が得られた。

次に縄文時代早期と考えられる層はＧ１区第５層である。第５層中からは無節の撚糸文が施された土器，微量の繊維を含んだ土器などが出土している。押型文土器の層準がないため，土器の比較は困難をともなうが，鳥取県上福万遺跡の早期土器に類似していることが注意される。テフラの分析によると，アイラAT火山灰起源のガラスはみられるが，アカホヤAh火山灰起源のガラスがみられないことから，少なくともアカホヤAh火山灰降下年代（6,100～6,500年以前）よりは古いものと推定された。

Ｇ１区の第２・３層中からは縄文前期の土器とともに多くの石器遺物が出土した。土器には轟Ｂ式系統，月崎下層Ⅰ式系統，羽島下層Ⅰ式系統，彦崎ZI式系統のものがみられる。石器遺物には安山岩製のものと黒曜石製のものがあり，石鏃・楔形石器などがみられた。第３層でアカホヤAh火山灰起源の火山ガラスがはじめて出現しはじめることから，第３層はこの火山灰の降下年代頃かあるいはややそれにおくれる年代（6,100～6,500年以前）を示しているものと推定された。

このほか，Ｇ２区では縄文時代前期の土壙（SK01）１基が検出された。Ｇ２・３・４区からは基部整形尖頭器，直刃削器，単刃厚形削器などが出土した。

また，黒曜石の石基部分の化学組成をＸ線マイクロアナライザーで測定した結果，隠岐島の

久見産のものと大分県姫島産のものが含まれていることが確かめられた。こうした成果をふまえて，石材の経済効率さらには石材の入手方法についても言及することができた。これはこの新槇原遺跡における試論ではあるが，こうした方法で他遺跡においても数多く検討されることを期待したい。

本遺跡は合計16㎡というきわめて狭少な範囲の調査しか実施していない。今後機会があれば広範な調査を実施し，その内容をより明確に把握する必要があろう。なお，本遺跡の一部は幸にも匹見町文化財として指定され，道川自治会によって買上げされた。今回の調査結果を参考に今後適確な整備・活用・管理の実施されることが望まれる。

（松本 岩雄）

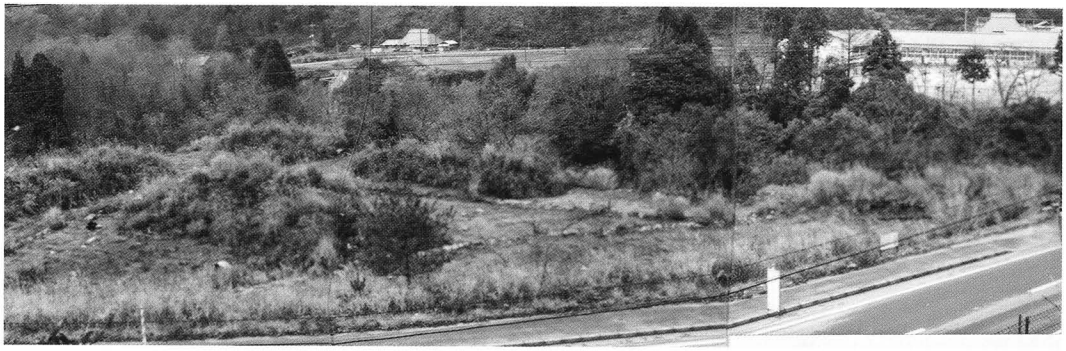
図　　版

図版一　遺跡及び周辺地形の鳥瞰

1．空からみた新槇原遺跡（日本林業技術協会提供）

図版二　遺跡外景

1．遺跡の遠景（西側から）



2．遺跡の近景（北東から）

3．遺跡の近景（東から）

図版三　G1区上層の状態

1．G1区2層の調査状況

2．G1区3層除去後の状態

図版四　G1区遺物出土状態

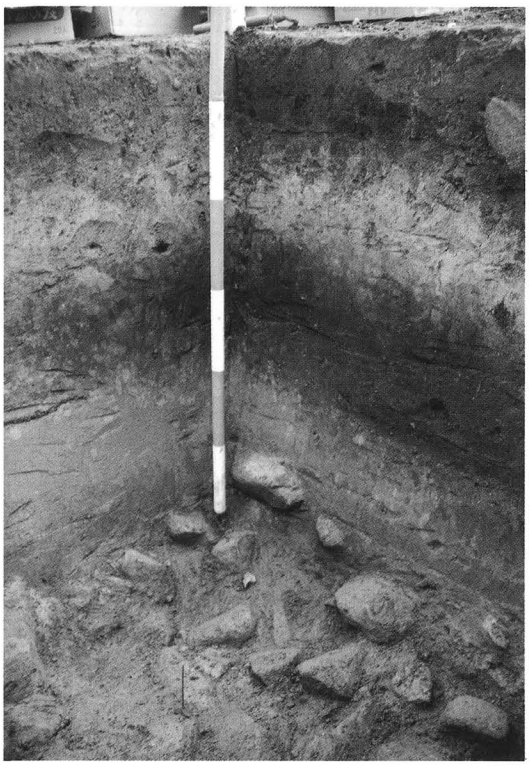
1．G1区3層遺物出土状態

3．G1区5層遺物出土状態

2．G1区5層遺物出土状態

4．G1区7層遺物出土状態

5．G1区5層調査の状況



6．G1区7層遺物出土状態

図版五　G1区土層

1．G1区北壁の土層

2．G1区東壁の土層

図版六　G1区土層

1．G1区南壁の土層

2．G1区西壁の土層

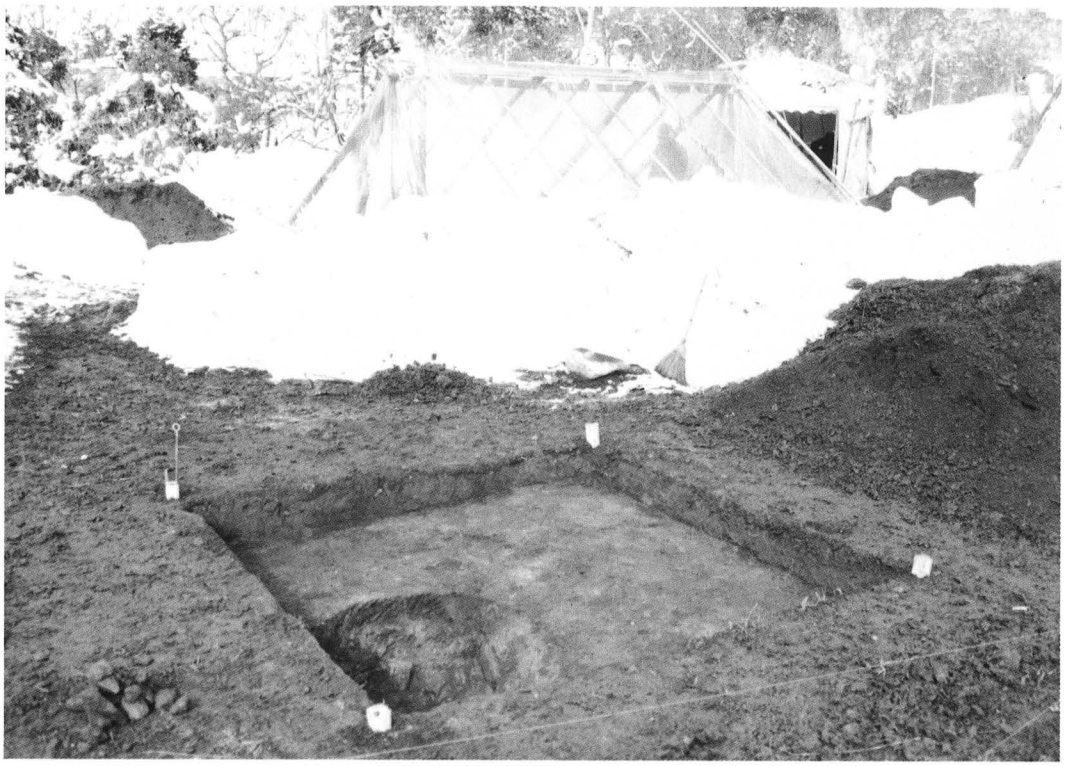
図版七　G1区土層

1．G1区北壁の土層

2．G1区南東隅の土層

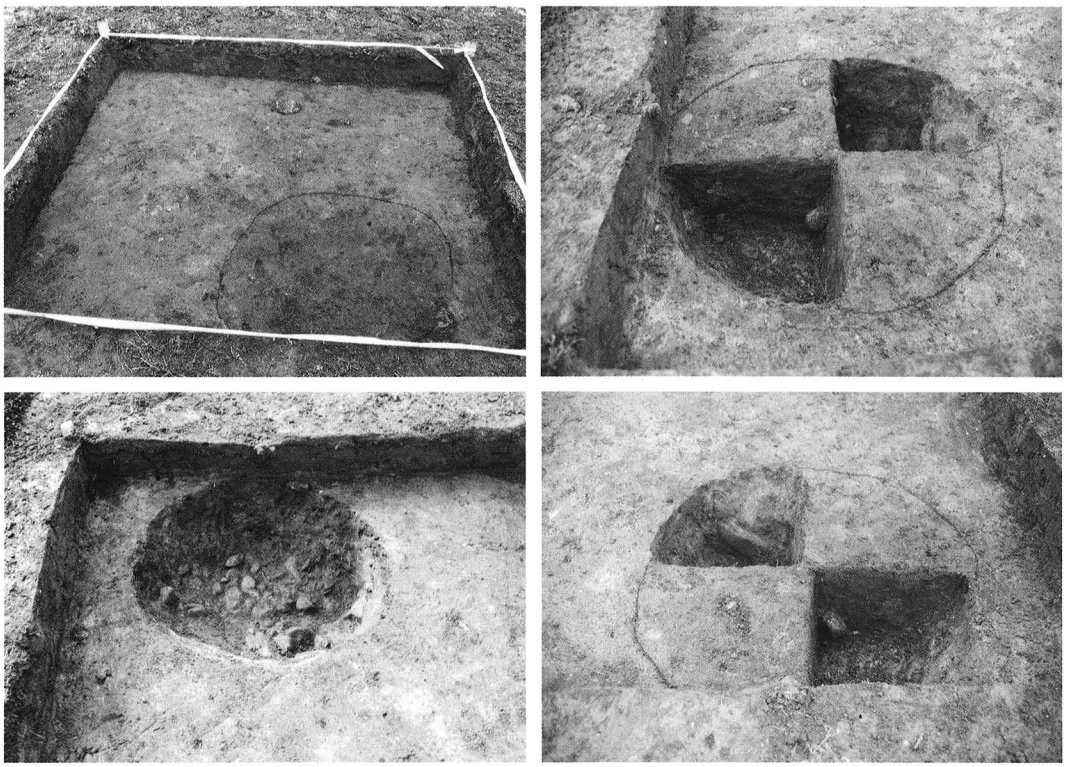
図版八　G1・G2区調査状況

1．G1区東北隅の土層

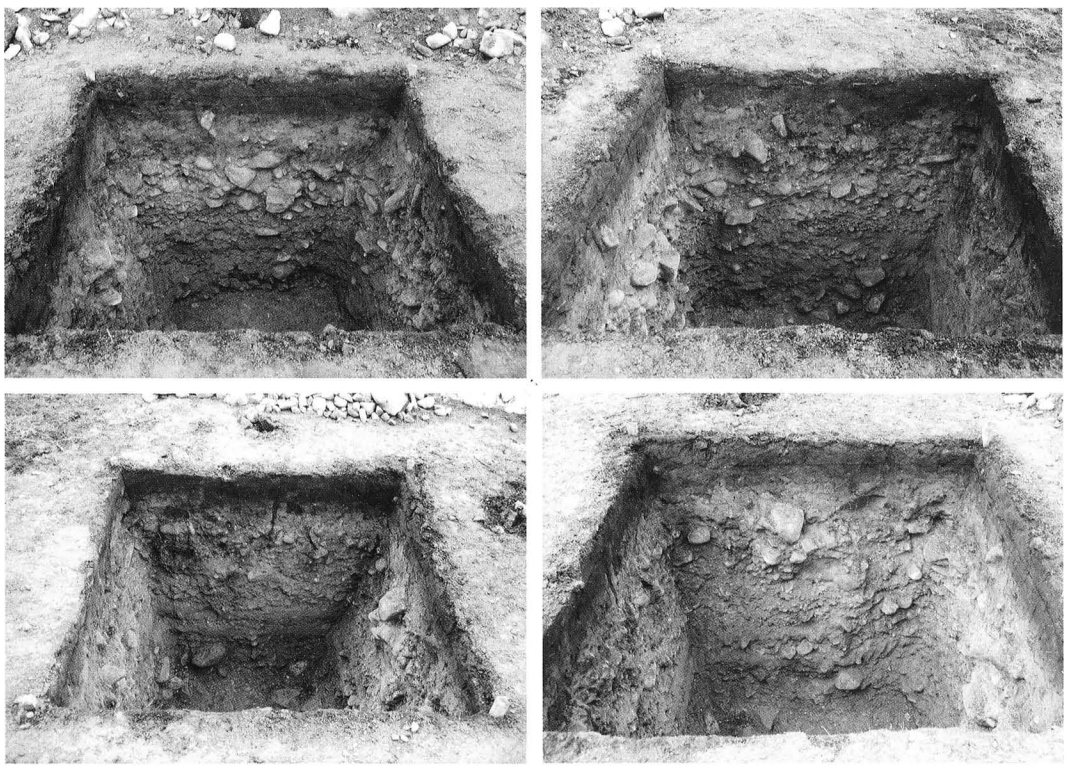


2．G2区第2層の調査状況

図版九　G2区調査状況



1．G2区SK01の調査状況（左上；土壙の検出，左下；完掘，右上；東から，右下；南から）

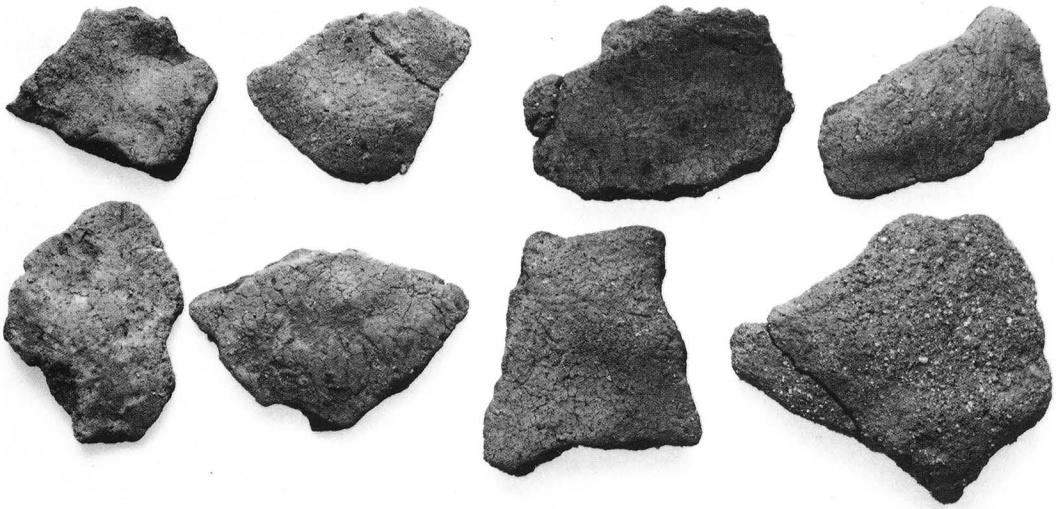


2．G2区各壁の土層（左上；北壁，右上；東壁，左下；南壁，右下；西壁）

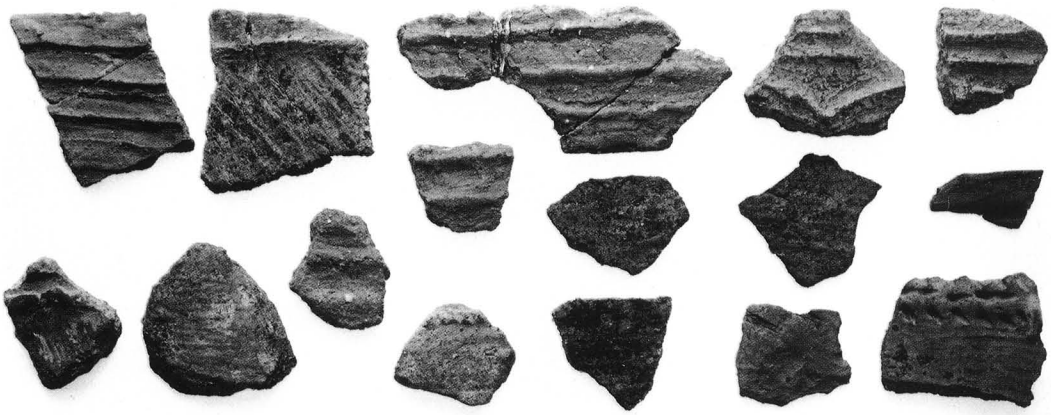
図版一〇　G3・G4区調査状況

1．G3区（西側から）

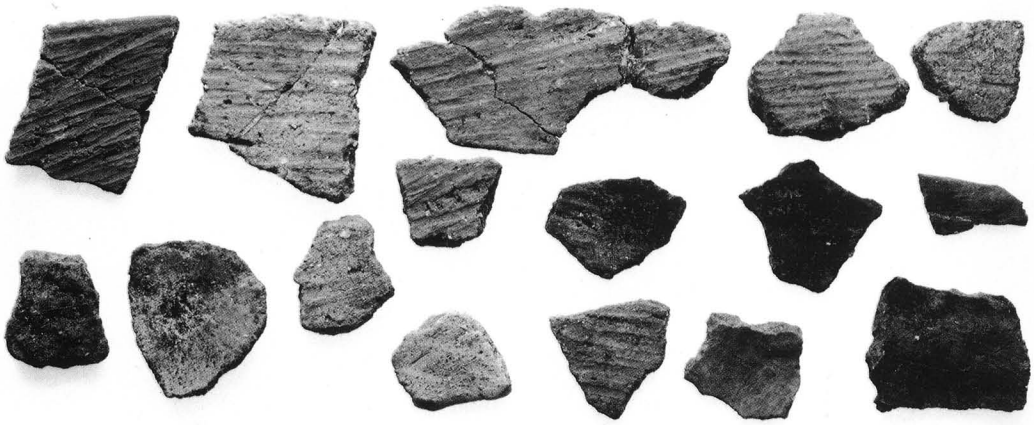
2．G4区（西側から）



1．G1区の縄文早期土器(表面;1/2)

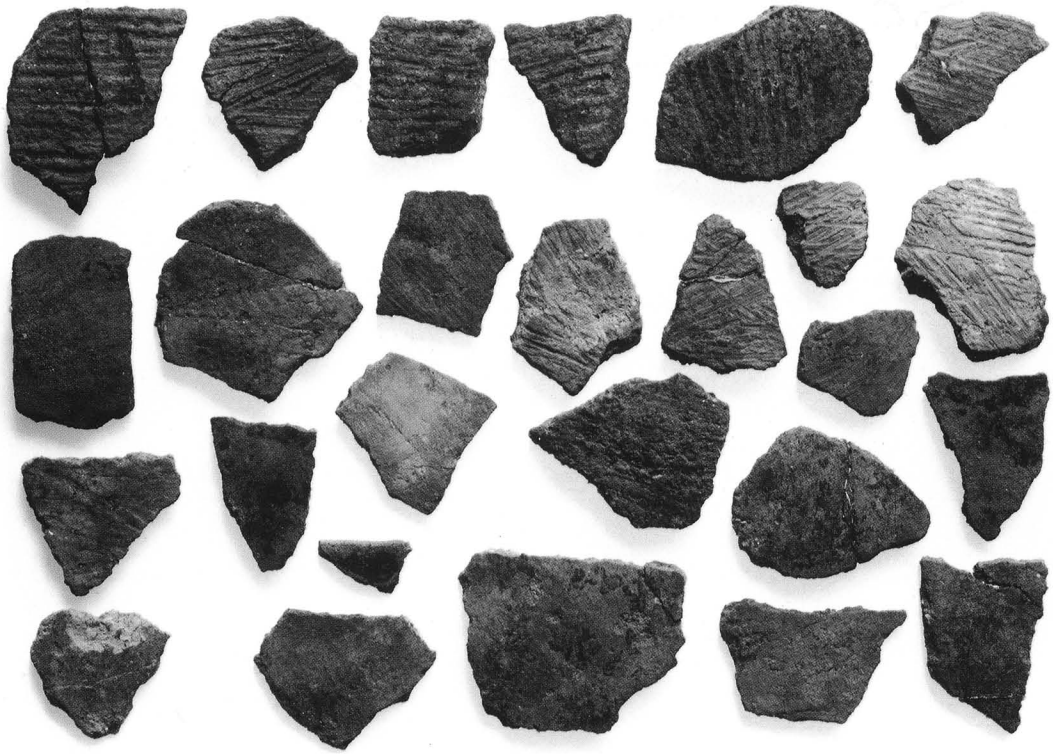


2．縄文前期の土器(表面;1/2)

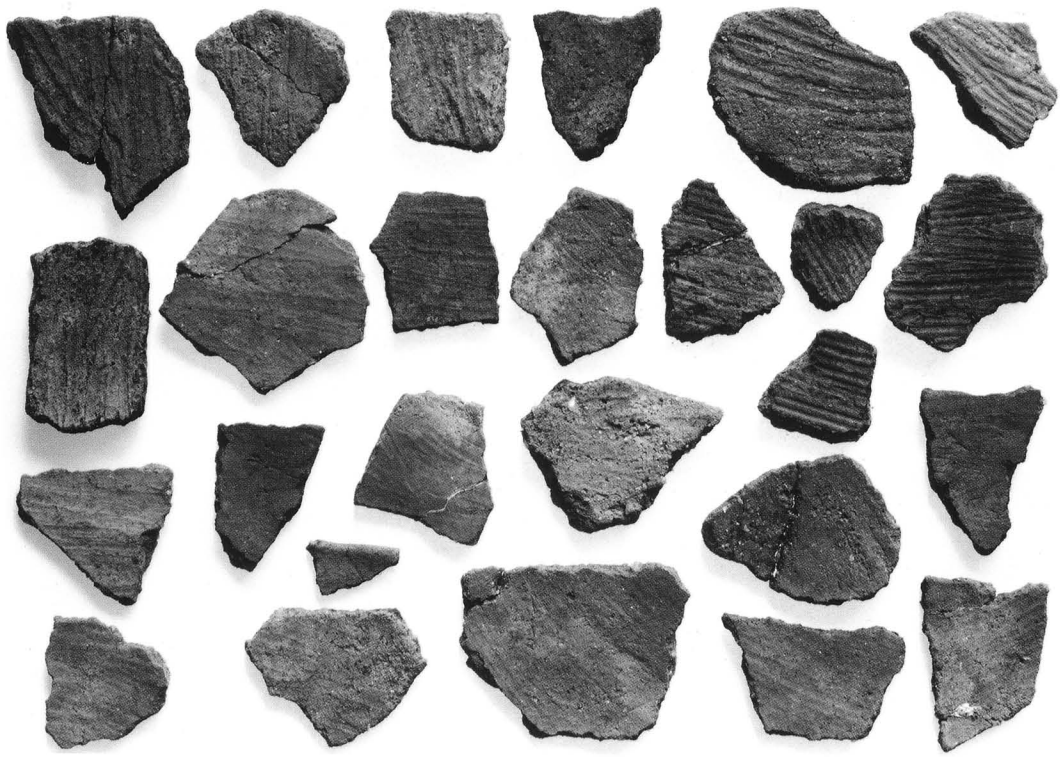


3．縄文前期土器(裏面;1/2)

図版一二　出土遺物　土器



1．条痕とナデ調整の土器（表面;1/2）



2．条痕とナデ調整の土器（裏面;1/2）

昭和62年２月１日印刷
昭和62年２月８日発行

新槇原遺跡発掘調査報告書

発行　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町

印刷　㈲ 谷 口 印 刷
島根県松江市母衣町89